
授天力(エネルギー)の戦士が世界を廻る-作るぜ!!最強の"絆"!!-

優氣凛々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

授^{エン}天力の戦士が世界を廻る - 作るぜ!!!最強の”絆”!!! -

【Nコード】

N0956W

【作者名】

優氣凛々

【あらすじ】

これは筆者が「こんな風になりたい」「こんな技使いたい」等という厨二丸出しこんちきしょうな妄想からできた主人公「御神 ユウタ」があちこちの漫画、アニメの世界で頑張る話です。

一応主人公にはまず死ぬほど…てか死ぬ痛みを味わってもらいます。

「そんなグロいの嫌いよ!」とか「なにこいつ、マジでキモいな」とか思った野郎ども、表にで「殴

回れ右して下さいね…(鼻血

因みにR・15くらいの表現は出したいなと思いますよ

苦手だなと感じたら、縄で輪作ってそれに首w（ブロッケ殴

回れ…右…して下さいね…（流血

第1幕「ワシ脂肪：死亡宣言」

やあ、みんな元気かい？ハッピーかい？

俺は…絶賛不幸中だよ…

何故なら…

カ「サキ姉、俺のDS返せよ！！」

サ「カツリのは私のもの、私のは私のものよ！！」

何故なら我が愚弟と愚姉が年甲斐なくゲームごときでケンカしてるからだ。

サキ姉さん、あんたは青狸に出てくるガキ大将か…

自己紹介が遅れたな！すまない…

俺の名は「御神 ユウタ」という。

しがない専門学校生生活を細々としのいでいる。

今、一応夏休みに入ったから、実家がある日本は東北、覆山県に来た。

専門学校は関東の裁姑呂県にある。

いわゆる一つの「里帰り」さ？

んで、今に至る。

只今、我が愚弟「御神 カツリ」と愚姉「御神 サキネ」が絶賛ケンカ中だ…泣いていいかな？こんちきしょう…。

カツリはふくよかながら力は強く、プロレスを幼少から叩き込まれている

サキネはテコンドーをやっていたせいか、胸は無い。コンプレックスらしいが、カツリはヴィジュアル系、サキネはアイドル系並みに顔が良い。俺はその間くらいをいつているが…なんだか複雑だな…

あつ、カツリがサキネのミドルキックに伏した…えげつない…

サ「あゝー！！イライラするなあ！ユウ！コンビニいくよ！ひんやりしたの食べたい！」

ユ「へえへえ、分かりやしたよ…ったく！」

俺はサキ姉さんの手にあるDSを素早く取った。俺は柔道と空手をやってるだけあつて、瞬発力は右に出るやつは家族にはいない。

サ「なっ！ちょっと、ユウ！」

ユ「俺の貸すからカツリには返してやれよ…全くなあ、ホレツ！」

DSをカツリに投げて渡す。カツリはそれをスライディングキャッチした。

…野球しよう。チーム名はリトルバスターズ。

カ「うわっと！！サンキュー！ユウ！」

ユ「面倒なんだからもうやめろよこんなガキみたいなケンカ…」

サ「むう……ほら！！早くいくぞユウ！」

サキ姉さんは俺の腕に自分の腕を組む。そのせいか、無いが少しは膨らんでいる女特有の柔らかさと体温が……

ユ「…なんだよ、引っ付かなくても行くから？」

サ「〜」

それからサキ姉さんにされるがまま、俺は家から500mくらいの家向かいのコンビニに行った。

そして今日、俺は…

本来遭わないはずの最終イベントに遭うことになる…

…所変わってコンビニ…

サ「ふう〜 やっぱり上手いなあ！！ペロチャンアイスクャンディ
！」

…味はうめこぶだがな…

どうやらサキ姉さんの味覚は足技以上に飛び抜けてずれてるらしいな…

因みにワシはビターチョコが隠し味の「ワシのスイーツ」クレープ

「」だ

…なんで一人称が「ワシ」か？

精神年齢が「80くらいの縁側にいるおじいさん」だと言われたからな…

サ「…ユウのも美味しそうだなあ…」

…そんなハイエナが餌を貪るような目でみんなよ…？

ユ「仕方ないなあ…ほら、一口食べよ。」

サ「やたあ んじゃ、ありがたくいただきます」

…なんかツツコミたく無いが…何で俺の食いかけに食いつくんだよ…しかも一口でかい…はあ

サ「…ユウの味がするう」

ざわああああ…!!!

なんだってんだよ今の！完璧にイタイよね！？しかも俺の味で！？公衆の面前でやめるよバカ姉貴いい！

サ「幸せ〜 ユウの味、美味しかった！」

ユ「だああああ！だからやめ…ろ…っ…って…！」

迂闊だった

サキ姉さんは幸せ過ぎて周りが見えずに…

車道のと真ん中において…

しかも…

4セトラックが…姉さんめがけて突っ込んでいた…

ユ「ばっ…か姉貴いいいいい！」

サ「えっ…きゃああ!??」

俺は咄嗟にサキ姉さんを正拳突き的要領で歩道まで突き飛ばす
だが…

俺は間に合わない…

ユ「南無三…!!」

ドゴオオオオオン!!!!!!

俺は姉さんの命と引き換えに…自らの命を差出し…絶命した。

第2幕「お約束だよな？多分。」

ユ「……………あるえ？確かワシは死んだんだ…よなあ？」

ワシは現在、な〜んにも無いま〜っつ白な空間に浮いてる…
と言った方がしっくり来る。

今の1人称で「ジジイかよ…しけるなあ…」って思ったやつ、今すぐ後ろ向け。…締めるから。

ワシは神話とか天国とか地獄とかそこそこ好きで、一応イメージはありやがるんだが…やはりイメージはイメージで、現実はこのまんかな？と思った。

日本のみならず世界ではうん十、うん百万人と死に至っているが…別室らしいのか誰一人、しかも何一つ見当たらない。正直さみしい。ねえ知ってる？ウサギさんはさみしいと死んでしまっただよ？動けるからとりあえず散策しよう、うん。じっとしてるのは性に合わない。

？「うめんなやこ…！」

「散策しよう」と発言した数分後、綺麗な羽が3対生えた綺麗な金髪ウエーブのお姉さんがいきなり土下座してきた。スライディング DOGE ZA初めて見た…痛そうだな。

？「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！」

しかし3対かあ…俺の知識じゃ最大の羽の対は6対12翼の羽らしいからちょうど中間管理職？お疲れ様です。

？「因みに私、神様ですよー！ごめんなさい！！ごめんなさいごめんなさい！！」

ユ「心読むなよ…あと、謝るくらいなら現状を教えてくださいよ。あと、誰だよあんたは？」

するとお姉さんが顔を上げた。上目遣いなせいか、いや、顔立ちが可愛いせいとか、ちょっと見いった。かわいいな。

？「えへへ…／／／ありがとうございます／／」

ユ「…／／／！勝手に心読むなっば！！…あんた、名前は？ワシは御神 ユウタだ。一応日本でくたばった。」

？「あつ…はい／／／私は…」

エ「エリリイって言います！神様です！！よろしくですよ…ユウタ…さん／／」

照れんなよ…。神様かあ…ということとはくたばったのは確定だな…
？どうせ心読んでんだからわかんたろ？

エ「…？どうしたんですか？…あっ、因みに心はもう読んでません
よ？」

ユ「都合悪いな！！？今まさに重要事項だったのに！！？？」

調子狂う…この子は天然さんなんだな？仕方ないか…。

エ「私は天然さんですか？」

ユ「何で今さら心読んでんだよ！？」

分かんないよこの子！！？くそお！

第3幕「異世界に行け、という名の厄介払い」(前書き)

作者「なかなか更新できなくてすみません！あと短くてすみません！駄文すみません！」

ユウタ「おいおい、ワシの本体なんだから頑張ってくれよ…」

作者「不定期更新覚悟ですがよろしくお願いいたします！」

ユウタ「まああんなベタなシチュエーションはないわな…」

作者「生きててごめん…」

ユウタ「ハイハイ、縄で輪を作らないの。」

第3幕「異世界に行け、という名の厄介払い」

やあ…みんな元気かい？ハッピーかい？

ワシは頭がいたい…

みんなお馴染み御神 ユウタだ。

今、絶賛お説教中だ。

え？空間無いに誰もいないのに誰を？
いるじゃん…エリリイって神様が…

ユ「……………」

エ「ヒック…えう…………ふええ……………」

無言の圧力は相当いたい。精神的に来るものがある。生前に散々思い知らされた。

因みにエリリイはワシの怒りが伝わっているらしく泣きじゃくっている。

えっ？女泣かして男かお前は？ってか？いい俳句を教えようか？

かわいいが

いつでも正義と

思っなよ

何でこんなにカオスな現状なんだって？

いづのはめんどくさいから回想入れんぞ？…そこ、あまり深く追及すると禿げるよ？

~~~~~回想~~~~~

あのあとワシは一応死んじまった理由を聞いていたんだが…

ユ「は？手違い？」

エ「はうう…はい…あなたは本来ならばあと50年は生きられたんですが…」

ユ「…ですが？」

エリリイはまた土下座した。

エ「私が寝ぼけて仕事したせいであなたの生期を今日だと記入してしまい、あなたのお姉さんに50年後と記入してしまってあなたの50年という余生うはうはライフをぐちゃぐちゃにしてしまいましたあー！…ごめんなさい！！」

要するに、俺はこの子…エリリイに故意が無くても間接的に殺された…のか？いや…姉さんが死ぬよかましか…俺より姉さんが生きていた方が世のため人のためだもんな！！

姉さん、あと50年も生きんのか…誰か嫁にもらってくれんかね？

エ「おお…！あまり怒ってらっしゃらないみたいですよ！やっぱリ  
ユウタさんは優しい…」確かに死んだことにや怒ってないな…え？」

エリリイが顔を上げた瞬間、サーッと青くなつていく。

そりゃ、手違いでくたばったつても死んだんだ。死んじまったら仕  
方ない。しかし…寝ぼけて仕事だと？…許せん…！！

ワシは顔に出るタイプらしいから、顔に怒りが滲んでるに違いない。

エ「へうう！？ユウタ…さん？」

ユ「……………」

~~~~~ 回想終了~~~~~

エ「ヒック…えう…ユウタ…さん？お願い…れすう…許して…ふえ

え…くらすいよお…」

…いい加減泣かれるのにも罪悪感を感じてきた…。さすがに怒りす
ぎたな…謝ろう。

ユ「…ごめん…怒りすぎたな…実際俺も学校で寝ちやつからなんと
も言えんか…だからもう泣くなよ。」

エ「ユウタ…さん？…ふえ！？／／／／」

そういつて、エリリイを軽くだきよせ彼女の頭を撫でる。カツリが
泣いたり、姉さん宥めたりしたときと同じだ。あいつら溜
め込むタイプだからな…だから俺が受け止めてたんだ。今はもう無

理だが…

ん？なんかエリリイの顔が赤いな…泣かせ過ぎちまったな…

ユ「泣くなつて！まだ聞かなきゃならん事があるんだから。」

エ「……………はいい…／／／」

あれから数分後、泣き止んだエリリイはワシが呼ばれた理由を教えてください。

エ「えつと、実はユウタさんに「ストップ！」ふええ！？まだ話してないですう！！」

ユ「違う違う…ワシの呼び方に不満があつてな？」

エ「呼び方…ですかあ？」

エリリイは何なんだと言わんばかりに首をかしげている。そう、ワシは呼ばれかたにちょっとしたこだわりがある。

ユ「さん付けなしな？ユウタでいい。」

エ「…どうして…ですう？／／」

ユ「せつかくこんなにま〜っしろな空間で初めてできた”友達”だからな！！さん付けはよそよそしくて嫌いなんだ。頼むよ。」

エリリイはしぶしぶ了解してくれた。…なぜに体をくねらせてるか
疑問だが…

エ（ユウタ…ユウタ…ユウタユウタユウタ！いい響きですう／＼／
／）

…急に悪寒が…。誰かがヤンデレ化したのかな？

ユ「んで？話を反らして悪い。なぜにワシはここに呼ばれたんだ？」

エ「実は救って欲しい世界があります！！いわゆる一つのトリップ、
ですう」

うわぁ…ベタなやつ来たなぁ…。

第3幕「異世界に行け、という名の厄介払い」（後書き）

エリリイ（ユウタ…ユウタ…あああ！なんか心がキュンキュンするですう）

ユウタ「…どうしたんだ？」

第4幕「チート作成計画！……ほどほどに」(前書き)

作者「更新できなくてすみません！あと短くてすみません！駄文すみません！」

ユウタ「まさか毎回言わないよな？」

作者「そして何より、読んでくださっている方々に感謝します！……この小説、画像はれるかな？」
ユウタ「？どうして？」

作者「もし画像みて気に入ってくれたらうれしいしな　あと、随時リクエスト募集中ですよ」

ユウタ「まあこんなやつにかかれたく無いだろうが…もしよかったら感想にのせてリクエストしてやってくれ。」

作者「さりと酷い…？」

第4幕「チート作成計画！……ほどほどに」

やあ！みんな元気かい？ハッピーかい？みんなお馴染み神様に殺られちゃった御神 ユウタだ。

エ「一応こちらからの依頼なんできちんと協力させてもらいますですう」

ユ「お前の「エリリイですう！」エ……エリリイの言いたいことは概ね理解した。」

前回のあらすじ

「異世界に行ってもらいますですう」

…以上だ。

てな訳で異世界行が決行（強制的）されるが…俺の今のスペックは柔道と空手というなかなか突っ込み隊長的なもんだが…さあてどんなものが貰えるんだ？

この流れはチートトリップだな…チートは嫌いだからそこそこ強くなるう。うん。

エ「でわでわ！あなたにとっておきのプレゼント、ですう」

ユ「…なんだ？見た目指輪だな？」

渡されたのはな〜んも特殊な物がなさそうな王冠のエンプレムの金

指輪。

エ「会って数分で婚約指輪／／きゃああ！！あたしったらあ！／／」

ワシは無言でエリリイに近より後ろから抱き締めた。

エ「ユ…ユウタ…／／大胆すg……っ！…っ！？」

そして文字通り首を締めた。

はだか締めっという、まあありきたりな腕を交差させて締めるアレだな。

ユ「ごめんよお？おじいちゃんの耳で聞き取れる周波数と嬢ちゃんの発する周波数がちがくてねえ…キコエナカッタナア？」

~~~~~  
エ「それは…どんなにいれても…大丈夫な無限倉庫って…言います  
う…はふう…／／」

あのあと、なんとかエリリイを吹きかえらせ、話を聞いている。ん？才とした？うん！もちろんだよ！いやあ、神様も才チンだな〜！  
！新たな知識だ。

どうやらこの指輪は青狸のポケット並みに入るみたいだ。便利なもの手に入ったなあ

ユ「ふ〜ん、なるほどねえ…能力とかはくれるのか？」

エ「は…はい ええと…「小説内のキャラの能力」と「譲歩」、  
身体能力の強化」ですう」

…まじでかああああああ！！！！！？？

まじでか！？それなら有難い！

ワシは小説を書いているが、使えないのかなあってず〜〜っと思っ  
ていたんだ

譲歩ってのはさしずめ能力の切り離しと流入か…面白い！！

ユ「あつ、身体能力はほどほどにな。あまり強すぎても困るから。」

エ「了解ですう ユウタ！これでいつでも異世界逝かせられるです  
う」

……ん？変換間違えてるよな？「行かす」だよな？

エ「容姿も変えとくのでお楽しみ…ですう / / /」

お〜い、何一人でくねくねしてんだ？

てな訳で、異世界行の準備は着々と進んでいく。

第4幕「チート作成計画！……」(後書き)

作者「さて、能力は次回に紹介だ」

エリリィ「ですう」

ユウタ「次からが不安だ…ワシ…生きて残れるかな？」



第5幕「小説読んでるとよくあるパターン」神様はワシ等の身の保証をしなさい

作者「更新できなくてすみません！あと短くてすみません！駄文」  
以下略。「最後まで言わして……！」

ユウタ「迷惑極まりないわ！」

サンライト《少し落ち着いて下さいませ。》

作者「お前ら、見てくれた人が1000行きかけなんだぞ！？嬉し  
いよ！嬉しすぎてこの際……！」

ユウ・サン「《この際……？》」

作者「このわっかに首を通して……！」

ユウ・サン「《はあ……。。》」

第5幕「小説読んでるとよくあるパターン」神様はワシ等の身の保証をしなさい

前回のARASUJI

エ「ついに…ユウタに婚約ゆっ、オとし足りなかったか？」ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！」

~~~~~

やあ！！みんな元気かい？ハッピーかい？遂に神様のことをオとした（解釈自由）御神 ユウタだ。
ワシは今…

ユ「……………はあ。」

絶賛落下中だ…。

一応あつちの真っ白空間でいろいろ能力の説明を受けて、必要なものは金指輪に入ってるからというエリリイの言葉によりすぐ行ける用意はできたんだがな…

く読まなくてももいい回想くく

エ「夢を見てるときだけこちらの空間に来れるですう」

ユ「へえへえ…分かりましたよつと…世話になったな、エリリイ。」

」

少しただけだが、四元リングももらったし、その他も頂いた。礼を言わないと無礼だな。」

エ「はい…あ…あの…！」

ユ「ん？どうしたんだ？」

エリリイはうつむいて顔が赤い。顔とスタイルがいいせいか、絵になるな。

エ「たまには、顔出しに来てください！もちろん、毎日でも大歓迎ですからあ…！」

要するに寂しいのな…真っ白空間だし寂しいよなあ普通…

エ「いえ、別に部屋があるから大丈夫ですう。」

カチーン

ユ「顔出しになんて来な…すみませんでしたあ…！来てください！…全くなあ…！」

~~~~~

てな感じにとりあえずエリリイの出した扉くぐったら…

重力に従って落ちたと…まあ、そんなこんなで今に至る訳だが…

ぶっちゃけ地面が恋しい…とそろそろ地面と接触しそうだ…  
死なないのか？んなこと気にしてたらキリがないからこの際…

ユ「ユウタ イン ワクワク 異世界！やつはあああああ」

はっちゃけるのもまた一興かもな！！

ズドオオオオオオオン！！！！！！

ユウタ、着陸完了……。

ユ「フムウ…こんな衝撃に耐えたワシの体が怖いな…少し痛いけども…」

現在、ワシはクレーターの真ん中にいます。  
なんで？落ちた時にクレーターが出来たから…かな？  
怪我もしてないとすると、骨密度、骨軟性、さらには皮膚強度や筋肉の能力が拡大に上がったらしいな。さすが神様なだけあるか。エリイには感謝だな。

？《あなたが私のマスターですか？》

ユ「っ！？誰だ！？」

どこからともなく声が…

聞き覚え無いぞ？こんな透き通って澄んだ優しい女の声なんて…

？《…貴方の腕に付いてるブレスレットです》

ユ「ん？腕輪が…光って…」

右腕に付いていたブレスレットが光っている。確かエリイに渡された守りのようなもの…

？《貴方のお名前は？》

ユ「ユウタ…御神 ユウタだ。」

？《マスター登録完了…私はインテリジェントデバイス…名前はありません。マスター、付けていただけますか？》

インテリジェントデバイス？聞いたことあるが…まあいいか。プレ  
スレットは太陽を型どったエンブレムの真ん中に濃い赤の宝石が付  
いている。

ユ「そうだなあ…装飾には太陽か…サンライト…か？」

サ「分かりました。私はサンライト。あとはマスターがset u  
pすれば完了です。私の言葉を復唱してください。」

ユ「分かった。」

サ「我に宿るは神秘の太陽…」ユ「我に宿るは神秘の太陽」

サ「我が振るうは焰の神撃…」ユ「我が振るうは焰の神撃…」

サ「我に裁かれし闇の力は…」ユ「我に裁かれし闇の力は…」

サ・ユ「神の炎に焼き尽くされん！サンライト…set up！  
！」

ワシの体は赤い光に包まれて、服装が変わった。

黒のワイシャツは黒のロングパワーシャツに変わりそこから紅蓮の  
ノースリーブロングコートを羽織った。

黒のズボンは七分丈のズボンに変わり、スポーツシューズが装甲に固められた。

両手は紅蓮の籠手はめられ、縁は黄金に煌めいた。

光が収まる……

ユ「……おお……おおお！？！すげえ！」

その武装が……ワシの小説のオリジナル主人公「東寺 神太」君のもの！テンションが上がらない訳がない！！！！

サ《お気に召されましたか？》

ユ「ああ！すげえ嬉しいよ！！夢のようだなあ……あれ？」

サ《？どうされました？》

そついえば……さっきから違和感バリバリだったから今さらだが叫ばせてくれ……

ユ「あるえええええ！？からだがちっこくなつとるうううう！！」  
「？」

そつ、ワシは19歳なんだが、何か手が異様に小さくなっていたから……

まさか、あの頭脳、精神的には16、7歳にも関わらず小学生のま  
まで小学生よろしく16、7歳のおなごと風呂に入ってるヤラスイ  
イ某少年探偵の如くちっこくなつたのか!?

ユ「エリリイ! 謀つたなあああ!?!」



第5幕「小説読んでるとよくあるパターン」神様はワシ等の身の保証をなさず

エリリイ「ユウタがシヨタ…ユウタがシヨタ…ユウタがシヨタ…あ  
ああ…!! // // // // // // // // // // //」

エリリイの何かが暴走した。

その頃…

ユウタ「さあて!今夜はあいつのところ行っていきますかあ…(鬼黒)

」

サンライト(マスター…お気の毒に…)《マスター、お手伝いしま  
す!》

ユウ、サン「《いざ鎌倉!…!!…!!》」  
いつの時代だよ…

第6幕「お隣さんへの挨拶は大切！〜鏡を見たらお約束〜」（前書き）

作者「更新できなくて」《言わせませんよ！？（ねーよ？）》「は  
やっ！？」

ユウタ「あのなあ…ワンパターンはダメだろ？」

サンライト《だから私達があなたがダメダメなお陰で不本意ながら  
盛り上げようと尻を拭ってあげてるんですよ！？わかりますか？だ  
いたい貴方は》

ユウタ「わあ〜！？なんて滑らかな毒舌！でもこれ以上は止めと  
け！出ないと…！」

作者「…俺は小説の風になる！！！」

ユウタ「あああ！？もう縄のわっか何個目だ！？あとリストカッ  
トすんな！！さらには一酸化炭素吸い出すなあ！！！」

第6幕「お隣さんへの挨拶は大切！〜鏡を見たらお約束〜」

前回のアラ筋

ユ「着地したら…からだが縮んでしまっていた！」

やあ…みんな元気かい？ハッピーかい？只今ネガチブな御神 ヨウ  
タだ。

なぜ？…からだが…からだがちっこくなつてたからだよ！！  
あんの神様一回叩きのめさないと分からない質みたいだなあ…

…それはさておき、一応住居らしきものがあるみたいだ。ワシはと  
りあえず行ってみることにした。  
因みに外見年齢は9歳くらいだ。しかし、頭は普通に19歳並み…  
いや、それ以上かもな。精神年齢は相変わらず80代くらいだなき  
つと。

ユ「うん、普通に住みやすそうだな。…一階は要らないだろ？」

なんか庭付きの一戸建て二階つきがワシの自宅らしいな。

…標札しとこ。

ユ「はてさて、なかは…っと…うん、案外暮らしやすい設計だ。嬉

しいことに和室まで！裏には道場があったな！」

至れり尽くせりだな。あとは…鏡を見てみよう。

どんな顔をしてんだろうか？道を歩いてたらなんでか男に絡まれたし…ワシはそっちの気は無いぞ？

どれ、お顔拝見。

ユ「……………嘘？」

鏡を見たら…なんでか女顔になっていた。

髪は白色、まるで雪みたいに真っ白い。そして前髪は蒼のメツシユ、長さは肩甲骨くらいまでで、眼は鮮やかな緋。まるで燃え盛る炎。しかし、右目はなぜか黄金色になっていた。そして止めは、肉体的にも顔的にも中性的だが女寄り…

ユ「…と、とりあえず服を揃えないと…」

ワシは…改めて俺は現実逃避をすべく服を探しに町を散策することに。

~~~~~

ユ「ざっと…こんなもんかな？それにしても…服は黒が多いな…」

あのあと服や雑貨、食材を買いに行った。（因みになんでか俺の通帳が入ってて、額がなんでか0が10個…通帳を開けてみたらブラツクカードが…入ってた額が0が11個…なして?）

まあ無駄遣いするほど無いからな…昔から欲ないし…。

サ《お疲れ様です、マスター!》

ユ「ん、お疲れさま。まあ鍛えてた筋力が落ちはしたが…道場あるからまた鍛え直しかな?」

「からだ縮んだせい、筋力が衰えたっていうか…歳に合わせたっていうか…」

サ《マスター、ご夕食には早いのでお隣さんへの挨拶をしてきてはいかがですか?》

ユ「賛成、手土産ちょうど買っておいたんだ。まだ夕方だし…いいか。」

俺は、とりあえずお隣さんへの挨拶をすべく「翠屋」という喫茶店に行った。巷では有名な喫茶店らしく、主に女子高生や若奥様方に絶大な支持を受けているらしい。

…ティラミスあるかな?

ただ…そのときはあんなことが起こるとはミジンコ並みに思わなかった。

~~~~~喫茶店「翠屋」~~~~~

?「はいいらっしやいませ……!」

ユ「こ…こんにちは!俺は今日から隣に越してきた御神 ユ」  
「き  
やあああああ!!可愛~~~~い!!!!!!」  
「ぐほお……!!?」

なんでか知らんが綺麗な会計のお姉さまがタツクル…もとい抱きついてきた。…大の大人がはしゃくなよ。本人は大きいし…それに俺可愛くないし…

お姉さまは綺麗な栗色の髪を腰くらいまで長くしていて、可愛いというよりは綺麗ななという印象だ。

?「いやあん可愛いわあ!!お人形さんが息をしてるみたい」「は…離して下さい!あうう…//」  
「あはあん!!!照れてるのも可愛い~~~~!」

何時になったら抜け出せるんだろうか…綺麗だし胸大きい…おおつと!!何を考えているんだ!!「邪念は人生のごみだ!冷静になるんだ!」  
「って死んだじいちゃんが言ってたし!!」

………煩惱退散!!!



ユウタ「なっ…!? やっ止める…!! 放せ…!! 近寄るなあああ  
ああああああ…!!…!!…!!…!!…!!…!!…!!ぎゃああああああ  
ああああ…!!…!!…!!…!!」



第7幕「美味しいものを食べて苦い目に遭う」主人公なんてこんなもんかな？

やあー！みんな元気かい？ハッピーかい？

俺は今…

ユ「……ん おいひいな」

喫茶店「翠屋」で美味しいティラミスを堪能してます。

？「美味しい？家のティラミス！」

栗色の髪をツインテールにした女の子付きで

因みに女の子はオレンジジュースとシユークリームだ。

ユ「うん このビターな苦味が何とも言えん！しかもブラックコー  
ヒーもあるし…ありがとう！高町さん！」

そう…この女の子はさっき入り口でタックルがましてきたお姉さま

「高町 桃子」さんの娘、「高町 なのは」という。

なんで娘さんと食べてるのか？いきさつは例の如く回想で説明しよ  
う！タララララン



ぴくん…

桃「ケーキじゃなくても好きなものをサービスしようかな？なんて  
「ティラミスは！？」もちろんよ？だけどねえ…」

ユ「ぜ…」

神よ…

ユ「ぜ…」

私目に…

ユ「是非とも着させて下さああああい！……！！！」

一時の幸せを下さい？

…フリフリエプロンのメイド服に留まらず…  
セーラースク水とかチャイナミニスカとかを着せられました…  
写真撮られました…ビデオ撮られました…鬱だ…死のう。



さっきの桃子さんを幼くしてツインテールにした女の子がいた。遺  
伝か？姉妹かな？そうだとしたら素晴らしいとおもった。

女の子はテーブルにティラミスを置くとすぐに店に戻っていった…

？「食べるのまっつてなの〜！！」

つて叫びながら…

？「お待たせ〜」

さっきの女の子が戻ってきた。トレーにはオレンジジュースとシ  
ークリームが乗っている。

ユ「もしかして桃子さんの妹さん？」

な「違うの〜！！なのはは妹じゃなくて娘なの まだ名前教えてな  
かったね？わたし、高町 なのは！小学3年生！」

ユ「分かった。」俺”の名前は御神 ユウタ。よろしくn「ふええ  
えええ！？もしかして男の子！？」…なんで驚くのさ…」

止めてくれ…その純粋な無邪気は俺のツギハギハートの破壊を促進  
する…

~~~~~  
…てなわけでツギハギハートのダメージを回復すべくティラミスに
がつついてる訳ですな

今までで一番美味しかったぜ！

ユ「ご馳走様…結構なお手前…」

結構どころかかなりなお手前だ！！

な「ユウタ君のお家はどこにあるの？／／」

ん？高町さん顔が赤い…

さつき相当慌ててたんだなあ。

ユ「翠屋の近く。今日はまあ、お隣さんへの挨拶ってところだった
…んだが…理不尽…」

な（さつきお母さんが持ってた写真かなあ？可愛いなあ〜って思っ
たらユウタ君だったんだ／／）

ユ「ご馳走様でした。美味しかったです！」

桃「私達もオイシイ思いしたからいいわよ？」

桃子さん…言わない約束…

ユ「…まあ、これからよろしくお願いいたします。」

な「そういえばユウタ君？」

ユ「？なんだい、高町さん？」

な「いろいろ話してて聞けなかったけど…ユウタ君の両親のこと…」

ん？なんだこの流れ？

ユ「両親はいないよ。ひとり暮らしだけど？それがな」
「あらそれは大変ねえ」
「…へ？」

嫌な予感がひしひしする！逃げたいけどなんかからだは動かないよ！？

するといつの間にか桃子さんが俺の肩を掴んでいた。

桃「ユウタ君、夕飯食べていかない？」

ユ「いや…大丈夫だ「食べていかない？」大じょう「食べていかない？」…分かりました…」

こんなんばかり…

今日は高町家で夕飯をいただく（強制連行）ことに…

漫画とかの主人公の苦悩が分かった今日この頃の俺…

第7幕「美味しいものを食べて苦い目に遭う」主人公なんてこんなもんかな？」

ユウタ「……………くそつたれえ…／／／／／／／／／／」

只今ユウタ（セーラー白スク水ネコミミver.）コスプレ中…

作者「ふふふ……………どうだこの野郎！」

ユウタ「ま…まだ…まだまだ大丈夫だぜはっはっはっ「きゃあああ
あああああああ！可愛い〜！！」「ぎゃあああああああああ
あああああああ！」

なのは、桃子強襲

作者「たくっ！ワシがそんなことでは終わるわけないだろ！！！」

？「まったく…なのはってばユウタになにやってんのよ…」

作者「アリサ…あんたは次までお預けだよ…」

ア「いいじゃない別に」

作者「作者的によろしくありません。」

ア「ふう〜…ケチ！」

第8幕「自分の能力確認を怠らないように」予想外だったりする」(前書き)

「作者的キャラ弄りコーナー」

作者「さあさあよつてらつさい見てらつさい！更新遅めな作者が送る、登場人物弄りコーナーだよ」

ユウタ「見たりしねえし寄らねえし、何より早く更新しやがれ…！」

サンライト「まったくですね。」

作者「んまあ今回はかぎかつこの使い方を紹介しようかな？弄る気分じゃないし…」

サンライト「まあ免許筆記試験でつまづいてるのが悪いですよね。」

作者「くそたれなすびいいいい！！！！」

名前「」 会話ノーマル

名前「」 念話

名前「」 デバイス会話

名前「」 デバイス念話(サンライト限定)

【能力】 能力名

「技名」技
「技名」技
技名呼び

第8幕「自分の能力確認を怠らないように」予想外だったりする」

やあ！みんな元気かい？ハッピーかい？

ユ「ふあ……朝か。」

俺はとりあえず、あの高町家で夕飯をいただきました。そのあとは説得の末に自分の家に帰りました。

だって…なのはさんのお兄さん、高町 恭也さん、喫茶「翠屋」店主にして桃子さんの旦那さま兼ストッパーの高町 士郎さんの殺気がひしひししてて寛げないし…食事も満足に取れない…苛めか？理不尽やねん…

サ《おはようございます、マスター！》

ユ「おはようさん！…今まで空気だったな…」

サ《言わないで下さいよ…》

それはさておき、サンライトを起動させたは良いけど…性能なり何なりを確認してないな。

エリリイが言っていた【小説内のキャラクターの力を使える能力】

…要は想像創造能力みたいな力？はまだお目見えしてないし…どうしようか？

サ「マスター、マスターはいつ？」ガッコウ」に行かれるのですか？」

ユ「ん、明日かな？確かどこかの大学附属小学校らしいが…」

そう、何かエリリイが気遣ってくれたみたいだけど…もう俺は小学校のみならず高校以上の知識を有してるんだぞ？

サ「なら起動して使えるフォーム、バージョン、技等の確認をしませんか？」

ユ「…だなあ。確認しないと戦うも糞も無いからな。ふふふ…楽しみだ！！」

俺は朝食を食べて（因みにメニューは、焼き鮭と白菜とキュウリの漬物、豆腐とワカメの味噌汁、白米のいたって和風）寝間着から着替えて家裏の道場に向いた。

………
時は遡り昨夜、なのはルーム

な「ねえ、ユーノ君…？」

ユーノ「なに？なのは？」

なのはは胸長のフェレットに変身できる少年、ユーノ・スクライアと話していた。話すとしても電話越しだが…実はこの二人は魔導師と呼ばれ、“デバイス”という武器を使い戦うもの。

数日前まで”プレシア・テストロツサ事件”と呼ばれる事件を解決？したばかりだった。

な「今日、もしかしたら私達と同じ魔導師かも？って子と仲良くなっただけ…」

ユ「どんな感じの子なの？」

な「私と同じ年くらいかな？名前は御神　ユウタ君って言うんだけど…」

ユーノ「そうなんだ…まあ、危険はないだろうから大丈夫。管理局は何もしないさ…クロノとかは分からないけど…」

な「大丈夫！もし何かしたら…O H A N A S Iなの」

ユ「ノは悪寒を感じたという…」

.....

戻って、御神家道場。

ユ「さあて、やりますかあ！！」

サ《今のマスターならset upとえば大丈夫ですよ》

ユ「分かった！煌めく太陽、サンライト！set up！」

サ《yes、my master！version、”H”set up！》

ユウタの体が煌めき、初めて発動した時と同じ格好になった。

サ《この姿がバージョン”H”です。速度重視の形態で主に拳での近距離、弾幕系の中距離、砲撃系の遠距離など、戦闘でのオールレンジ対応型です。わたしサンライトの基本形態とも言えますね。》

ユ「なるほど…なら基本この姿でいこうかな？」

サ《他にも有りますが？いかがいたしますか？》

うーん…他のもなかなか魅力的だが…

ユ「まだ基本にも慣れてないからしばらくはこれで！しかも拳だからやりやすい！」

サ《分かりました。では、次はフォームについてですね。

form”edge”…road!》

すると、籠手部分が変化して、指がまるで猛禽類のように鋭くなつた。すげえ…ヤバい！かつこいいい！

サ《これはエッジフォーム。主に相手が武器を持っていた時の補助的役割ですね。因みに基本形態はブローフォームといます。エッジ、ブローでは出せる技は微妙に異なります。》

ユ「爪と拳…ヤベエ…キタよ俺の時代！」

スゲーヤベエよ！かつこいいいしイカシてる！赤と金の装飾が何とも

…

サ《さて、これから戦闘について説明しますね。マスターは魔力ではなく、^{エネルギー}授天力”と呼ばれる力を使えます。属性はバージョンに

より異なります。》

ユ「さしずめこのバージョンは炎、だろ」

サ《…！…すごい！わたしが言う前に理解してしまうんですね　さすがマスター！…戦いかたは分かります？》

ユ「大まかにはな！…よし、技の確認から始めようぜ！細かい設定よろしくな！」

サ《いい忘れましたが…わたしにはカートリッジシステムに酷似した”装填”システムが有ります。》

ユ「装填システム？カートリッジシステムと同じでもそれが魔力が授天力かってところか？」

サ《…すごい…すらすらと吸収していきますね…では！実際に技を出して見ましようか！》

さあて、楽しくなってきたぜ！

第8幕「自分の能力確認を怠らないように、予想外だったりする」(後書き)

その頃、学校のなのは…

なのは「…!!」「ユーノ君…今の魔力は!?!」

ユーノ「わかんないけど…もしかしたらユウタって人かも知れないね!モニターで見てみるよ!」

なのは「…ぶう〜!!ずるいの!」

ユーノ「し…し…しょうがないでしょ!?!なのは、終わったらきちんと映像見せるから、ね?」

道場。

ユウタ「…?何か覗かれてる!?!誰だよ俺のこんなん見てるやつあ!!…気のせいかな?」

サンライト《うーん…私も嫌な目線を感じます。》

ユ一ノは何を見たのか!?
次回を待て!

此処等で主人公設定発表するか…ネタバレ注意BY作者 優氣凛々(前書き)

作者「まあ今さらだけでも」

ユウタ「まあ、いいか。今回は真面目だからな。」

作者「作者は筆記試験まだ引きずってます。不定期ですが…楽しく読んでくれたらな…と…」

ユウタ「…受かれよ！応援してっから！／／／／／」

作者「ユウタがデレた！…我が子は可愛すぎて禿げるうう？(バ
タツ」

血の海になりました。

此処等で主人公設定発表するか…ネタバレ注意BY作者 優氣凛々

() …転生後

「」…読み方 とします

主人公 御神 ユウタ「おがみ ゆうた」

年齢：19歳（9歳）

性別：男（男の娘）

身長：168？（130？）

体重：70？（30？）

容姿：黒髪でツンツンにしている。メガネ着用。そこそこイケメン？眼は両目黒い。体は適度に引き締まっている。

（白髪で肩甲骨まで伸びている。左前髪に青いメッシュをいれている。かなりの女顔、かなりの美形。眼は右が黄金、左が紅蓮。体も中性的で、くびれているせいでかなり女らしい。でもかなり鍛えているため引き締まっている。）

能力：空手と柔道。両方かなりの段もち。（小説内のキャラクターの力を使える能力。身体能力アップ++）

特徴：パラレルワールドの地球で神 エリリイの手違いで殺られる羽目となり、お詫びにと「リリカルなのは」の世界に転生した。時間枠は無印後A's手前。性格は優しく厳しい兄的な性格。そのお

陰で小さな動物や子供に良くなつかれる。

しかし、転生前に苛めを受けた影響で、あまり人を寄せ付けようとならない。ただそんなクールな一面に乗じて無意識なフラグビルダーとなる「年を問わずフラグビルダー」。神的鈍感。

何とかこのまま自分の世界に帰れないか試行錯誤している。

空手は5段、柔道は6段を有する御神家一瞬発力と体力が高い超人他にも剣もかじっている。

現段階で使えるバージョン、フォーム

〔version、H〕

ブローフォーム技

・焰拳：炎を纏った拳を打つ。「装填」一発で倍の威力。

・爆龍拳：炎を纏った拳を打ち、更に爆発を加える。焰拳と同義。

・劫焰灼掌：体に授天力を巡回させ、身体能力を格段に底上げし、目に見えない打撃を繰り出し、踵落としを叩きつけ、剛速で地面に墮ちる。「装填」二発技。

・コロナ・ブリッツ：手に授天力を溜めて相手に擦り込み、体内にダメージを与える。「装填」一発技。

・コロナ・バースト：授天力を収束し放つ砲撃。威力はなのはのデイベイン・バスター並み。

・ネオ・コロナ・バースト：コロナ・バーストの数倍の威力。なのはのスターライトブレイカー並み。「二重装填」二発技。

・砲閃火：火球を生成し相手に叩きつける。今のユウタは1000

0発まで可能（二重装填一発使用時）。

・龍星群：コロナ・バーストを複数繰り出して相手を潰す。「二重装填」二発分で5個。

・龍星破群：ネオ・コロナ・バーストを複数繰り出して相手を消し去る。「最終装填」使用時。

語句の確認

授天力：ユウタの力。神と契約し、神の力の一部を使用できる。ユウタは天空神「アマテラス」と契約し、太陽の力を従える。

「装填」：カートリッジシステムの授天力盤。片腕のみ。

「二重装填」：カートリッジシステムの授天力盤。両腕のグローブのカートリッジ部で行う。「装填」片腕につき三発まで可能。

「最終装填」：両腕全て装填三発消費する。

サンライト

AI性別：女

種別：授天力専用インテリジェントデバイス

性格：お姉さんのな性格。

モードは現在バージョン / H

ブローフォーム：グローブ
エッジフォーム：爪、猛禽類のような爪。

のみ。エッジはあまり使わない。

【御神家の人々】

御神 サキネ（21歳）

性別：女

身長：152？

体重：…潰すよ？（黒笑）

スリーサイズ：上から73、52、86

容姿：茶髪でボブカット。可愛いアイドル系。

特徴：ユウタの生前の姉。ユウタにベタ惚れ。ヤンデレても可笑しくない。格闘技に精通していて、男のユウタに破壊力だけは勝っていた。主に脚技がすごい。性格はまさに姉貴的な性格。優しく諭すのが得意。怒ると鬼のようだが：ユウタにはかなわない。"ユウタは実は怖い。

御神 カツリ（17歳）

性別：男

身長：170？

体重：90？

容姿：茶髪で後ろを縛っている。顔はイケメソ。ガチイケメソ。ユウタに羨ましがられるが、ユウタの方が整っている。

特徴：ユウタの弟で末っ子。ユウタを尊敬し、サキネの駒扱い。大概ユウタの救いの手が伸びる。性別はわんぱく、無邪気な笑顔が似合う。プロレスをしているので、ユウタの瞬発力を消してパワーに転じた感じ。因みにパソコン等電化製品の知識なら誰にも負けない。

御神 エリカ（41）

性別：女

身長：154？

体重：エリカタツクル

スリーサイズ：上から99、52、89

容姿：茶髪でのほん系のロングヘア。腰までで先の方を少し力
ールさせている。

特徴：言わずもながユウタ等の遺伝子の元、母親。性格は天然での
ほほん。料理の腕がたち、栄養士の資格を持ったため、ユウタ等の食
事バランスは。因みに薙刀のプロである。

御神 ユウト（41歳）

性別：男

身長：182？

体重：76？

容姿：黒髪でショートカット。かなり渋イケメソ。右目に傷がある。

特徴：ユウタ等の遺伝子の元、父親。性格は冷静だが、父親らしい

包容力がある。教訓めいたことをいい、若き少年少女を導く。エリカにデレデレで、新婚同然。剣を扱わせたら右に出るものはいない。愛刀は「枝下桜」道真”「

他は後々出したら説明します。

第9幕「学校へ逝こう！〜え？字が違っ？気にするな〜」（前書き）

長らくお待たせしました？

更新できなくてすみません？

能力説明はまた今度纏めてやりますので…本文中にもちらほらさせますが…

どうか生暖かい目でみてやってください？

第9幕「学校へ逝こう！〜え？字が違つ？気にするな〜」

やあ！みんな元気かい？ハッピーかい？

毎度お馴染み、最近自分が恐ろしく思う御神 ヌウタだ。

何で恐ろしいかって？

いやさ…修行してたはいいんだよ？いいんだけど…

〜〜〜回想〜〜〜

ユ「はああああありやあああああ！〜！！」

今俺は、一心不乱に>焰拳<を特殊なサンドバッグにたたみかけてる。>焰拳<は見た目炎を纏った拳何だが、炎はブースターみたいな役割を果たしているため、速くて重い一撃なんだよ！すげえだろ！？漢のロマンだろ！？

サンドバッグは授天力でコーティングされてるからちよつとやさこらじゃ破けない造りになってたりする。（因みに5個目）

ユ「だありやあ！〜！！」

…とまあ…いろいろありまして…てか、火事にならなくて良かったわ…

とにかく、午前中にそんなこんながあつたせいで午後は道場を能力で治しました。え？紹介にかいてない？知るかよ…「小説内のキャラクターの力を使える能力」なんてニアチートなものを書けつてのが難しいわな…だけでも俺は魔力はBくらいしかないよ。授天力がその分強いのかな？因みに道場を治した時の力は授天力だよとりあえず、基礎は固まりました、丸。

サ「マスター？マスター？ねえマスター！わたしの話を少しは聞いてくださいよ？」

ユ「…はっ！すまない！変な電波流れてた。んで？なに？」

サ「マスターの通う”ガッコウ”の制服、出したついでに着てみましょうよ！！」

そう、今は夜。子供が寝る時間（ユウタ感覚では8時くらい）である。時間省略は…お約束だもんね

んで、明日から通う「聖祥大附属小学校」なるところに出陣する支度をしてたんよ。丁度制服をハンガーにかけてるんだが…

今の俺の服装は寝間着のワイシャツのみ。動きやすいし、解放された気分になる。

ユ「明日着るから明日な！ドキドキだよ…転校かあ…友達はまたできないと仮定するか。」

まあ良いや

とりあえず今から俺も小学生！前の人生ではさんざんだったから今回
回は頑張ろう！

サ《ま…マスター…可愛い／＼》

それと皆様に朗報ですよ

サンライトが昨日からおかしい…あからさまにおかしい…

もしこいつがデバイスじゃなくて人だったら…私は確実に息の根を
止めなければならぬ。サンライトの。

そんなこんなで学校へのバスを待つためにバス停へ。

弁当持参らしいから朝3時くらいに起きて作ったZ E

…へ？起きるの早い？年寄りは大抵早いだろ？精神年齢80だなん
て伊達に言われてねえよ

？「あ！！ユウタ君なの！」

ん？どこかで聞き覚えが…

ユ「ん？って高町か。おはよう！」

そう、朝からツインテールピコピコさせてる高町 なのはがいた。
同じ学校とは…神様が何かしたか？

(ふえええん！何でユウタに女の子が近付いてるんですか！？許せないのです！！Byエリリィ)

ユ「高町も聖祥大附属の小学校なんか？」

な「うん！！ユウタ君は今日から？／／／」

ユ「ああ。まあ…同じクラスだったらよろしくな。」

な「よろしくなの！（ユウタ君…制服可愛いの／／／）」

何か空から声がしたり場違いな考えをしてみたりしたんだが…

幸先わりいな…だけど、転入前にダチになれそうな子がいて良かった！

ユ「そっいちゃ…高町。」

な「何？ユウタ君？」

ユ「制服可愛いな。似合ってるよ。(ニコッ)」

な「／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／あ…ありがと…
なの　／／／」

ん？正直な感想言っただけなのに…熱か？今は季節的には夏初め何
だが…確かにちと寒いか？

ユ「高町、夏風邪は質が悪いから気を付けろよ？」

な「う…うん（うーん…にぶちんさんなの！／＼ユウタ君の方
が質が悪いの／＼／＼）」

サ《（…前途多難ですね、マスター…）》

第9幕「学校へ逝こう！〜え？字が違つ？気にするな〜」（後書き）

〜次回予告〜

次回！第10幕「学校へ逝こう！！〜暴君少女とメカオタク予備軍〜」

ついにアリサとすずかが出ます！

ユ「俺の夢？それはな〜…」

次回をまてい！

第10幕「学校へ逝こう！〜暴君少女とメカオタク予備軍〜」（前書き）

遅くなりました？

アクセス数5000越えたので何か番外編やりますので…楽しみに
待ってください！

第10幕「学校へ逝こう！！」
2 暴君少女とメカオタク予備軍」

やあ！！みんな元気かい？ハッピーかい？

何度も諦めず同じ台詞を吐き捨ててる小学生になった御神 ユウタ
だ。

今俺は、学校へ向かってるバスの中何だが…

？「私はアリサ！アリサ・バニングスよ！なのはから話は聞いているわ。」

？「月村すずかです！なのはちゃんから聞いてたけど…ホントに男の子？」

上から、金髪？を手で払っていかにもセレブですけど？というオーラ全開のアリサ・バニングス。勝ち気な感じだが、悪い子ではなさそう。

下は、紫色の髪に黄色のカチューシャと、なかなか良い色合いのおとなしガールの月村すずか。積極的ではなさそうだけど、元気いっぱいだから心配要らなさそう。さらりと酷い。

ユウ高まつちゃんから何を聞いたか知らないけど…まあ自己紹介が省けて助かった。御神 ユウタだ。よろしくな。」

な「にゃ！？高まつちゃんって！？なのはだよ！！私はユウタ君っ

て呼んでるよ!？」

ユ「まあまあ…そんな急には呼べないから、許せよ？」

ア「まあ良いんじゃない？私達はユウタって呼ばせてもらっから。」

す「うん、私もユウタ君って呼ばせてもらっね？なれてきたらでいいから名前で呼んでね？」

ユ「わかった。…で？聞き分けが悪いのはお前だけだぞ？高まつちゃん？」

な「うゝゝゝ!!分かったの!でも高まつちゃんはやめてよゝ!？」

ユ「無理に決まってるだろ？良いじゃないかチャージングで。」

な「どこがなのゝゝ!？」

楽しい学校生活になりそうな予感になった俺だった。

学校に着いた。第一印象…でかすぎ!意味わからん!さすが私立と
いったところだな!

そんなことを思いつつ、アリサ達と別れ、職員室を目指す。

.....職員室.....

ユ「失礼します。今日から転入する御神 ユウタですけど……」

一番手前の女の先生が手を降っていた。

先「ユウタ君ね？私が担任の那由多よ。よろしくね？」

ユ「はい！よろしくお願いしましゅ……………」

先「……………大丈夫、誰にでも失敗するときはありますから……」

ユ「ううう……………／／／／」

そんなユウタをみて「何この可愛い生き物は／／／」と職員室の先生方が思ったのは余談だ。

.....廊下.....

やあ…御神 ユウタだ。

転校なんて初めてだから緊張するぜ…しかも職員室の先生方全員顔

真っ赤にしちゃって…どうしたんだろ？

あれから色々ありまして、今教室のドアの前にいるんだよ…緊張で
心臓が口からこんちわわ…！しそっ…

先「それじゃ、入って来てください！」

いざ…戦場へ…！！

ユ「えと…今日から転入することになった御神 ユウタです！よろ
しく願います…！！」

第10幕「学校へ逝こう!」2「暴君少女とメカオタク予備軍」(後書き)

ア「ちょっと!なによこの”暴君少女”って私のこと!?!?!?しかも言うに事欠いて出番少ないじゃない!?!?」

す「メカオタク予備軍…作者さん…カクゴデキテルカナ?」

その日作者は幼女二人になぶられ「あ ああ?」「…ごめんなさい?」

第11幕「学校へ行こう」なのはの秘密と俺の力」（前書き）

作者「ごめんなさい！…！更新できなくて！」

ユウタ「そつだそつだ！ず〜と放置しやがって！グレるぞ！」

作者「お前！俺だ、つまりお前は…！」

ユウタ「それ以上言つなあああ！…！」

サンライズ《始まります！》

第11幕「学校へ行くところ」なのはの秘密と俺の力」

やあ、みんなハッピーかい？なかなか長い時間放置されて無駄な時間を過ごした御神 ユウタだ。

さて、今は……

男「なあ、今までどこに住んでたんだ？」

ユ「まあまあ遠いところ。」

女「趣味はある？」

ユ「体を動かすこと。読書も少しは……家事も出来るぞ？」

男「さつきから気になったんだが……俺」って普通女の子使わないよ？」

ユ「やかましいわ！俺は男だっつの……！」

クラス「え〜！！！！？？？？男の子！？」

質問に自分なりに答えてました。しかし、かなりの女顔なのね……
お兄さん困るなあ……………年齢的にはまだまだガキンチョだがな……

ア「あんたすごいわね…普通転校生ってあたふたするものよね？」

お、バニングスさん…だっけ？呼びづらいよなあ……………そうだ！

ユ「まあそれは所詮」「こていがいねん」「ってやつさね”バニス”」

ア「ば…バニスって誰よ！？／／／／」

ユ「バニングスって長いだろ？呼びづらいことこの上無いんで、
バニス””って略してみたんだが…ダメだったか？」

ア「…………別に…嫌じゃ…………無いわよ／／／／でも！私はユウタって
呼ぶからね！！／／／（何よこれ…………心臓辺りがドキドキしてる…
病気…かしら？／／／／）」

バニングス、もといバニスは顔を真っ赤にして席を外していった。
…………最近の風はしつこいらしいな…手洗いしなよ？
お兄さんの…………約束だぞ

す「ユウタ君って、あだ名つけるの好きなの？」

すると月村さんが俺の顔を覗いてきた。髪の毛さらさらで綺麗だな

！なんか感心。

ユ「俺は誰がどんなことをする奴かを目で見極めてんの。相手の目は内面を見るための一番のファクターなのだよ？」ツッキー」？「

す「ツッキー」？「

ユ「そ。」ツッキー”。月村だからツッキーだ。質問に真面目に答えるなら、あだ名を決めた方が親しみやすいし。仲良くしたいって証明したいなもんだよ？「

ツッキーの顔が真っ赤になった。

そっぴやなんか…男子からの視線がひしひし痛いんだけど…

す「そ…そうなんだノノノいいね！こだわりがある人って（ユ
ウタ君って…かっこ可愛いなあ（

ユ「まあ、ただの独りよがりな気がするがよ…」

な「そんなことないの！ユウタ君って立派だなあ」

ユ「突然ビククリすんな高まつちゃん！？」

いきなり高まつちゃんが話しかけてきた。相変わらずツインテールがピコピコしてんな…すげ…

な「なのはだけ仲間はずれは嫌なの〜 だからユウタ君とも仲良しするの!」

ユ「仲間はずれにはしてないが…まあ、楽しければ何でもかんでもモーマンタイだぜ!」

俺は高まつちゃんに笑顔を見せた。なのはも笑顔で返してくれた。

な「うん!!!」

しかし、俺は…

ユ「バカ抜かせ。俺が立派ならみんな立派を通りすぎて天才だよ…」

みんなが話しかけて来ているのを聞き流しながら一人呟いた。

「なのはside」

な（やっぱり、リンカーコアがあるの……ユウタ君って…魔導師な

のかな?)

私はユウタ君に会って話を聞いた時から薄々気づいて、少し接近して様子を見ていました。

正直、分かりません。

リンカーコアがあるのはわかるんだけど、ランクが解らないよ……
にゃああ……

なのは「今日…聞いてみようかな?」

これは本人に聞かなきゃ駄目みたいなの……

side out)

まあ色々なことが起きてただいまショートホームルーム(SHR)
やって放課後だ。

小学生レベル…くそみたいに簡単だったな…

そんなこんなで、今は…

ユ「ん?今から俺んちに?良いけどきちんと”桃ちゃん”か”しろ
ん”に言っただぞ?”

な「し……」しろん”がお父さんで……”桃ちゃん”ってお母さん……だよね？「

ユ「ん！そゆこと！」

何でも、高まつちゃんが「俺んちに行きたい」らしくて、バニスとツッキーは習い事だそうであれないから高まつちゃん一人なんだとか。……まあ、近頃幼児を狙った悪質な犯罪もんがはびこってますから……帰り一緒だし、いいか。

な「わかったの！！じゃあ、一緒に帰る！！」

瞬間、男子からの視線がひしひし痛くなりました。理不尽だぞバカヤロー……

てな訳で、今日は高まつちゃんと帰ることになりやした。

ただ、何でも無い路面で転けそうになっかね？

帰りだけで三回は地面と熱烈キス未遂があったぞ！

あと、助けてやる度に顔が真っ赤になんのはなして？

な「うわぁ…広いの！」

んでもって到着。高まつちゃんは何か広いの？なんて言ってるが、広いのじゃない。ム・ダ・にただっ広いんだよ！

ガラガラ……

ちなみに扉は全てを横に引くタイプな？

ユ「まあ適当に上がってな？」

な「お邪魔します！！！」

とりあえずお茶出さねえとな！

俺が愛用してんのは和室なんだ。だから高まつちゃんも和室に招待した。

今日は温かい烏龍茶だ。風邪にもってこいなやつな。上手いんだ意

外に

お茶づけは…白玉だ。あんたつぷりの甘いやつ！
全部お手製だぜ 伊達に19年生きてないぜ？

ユ「はいよ、店の洋菓子もなかなかだがな…和菓子も乙なもんだ
ぜ」

高まつちゃんは目をキラキラさせてんな！なかなかいい反応だ！

な「うわあ、美味しそうなの！いただきます」

はむっ！

ユ「うまいか？白玉。」

な「ん〜 おいひいのお」

作り手冥利に尽きるぜ！嬉しいな

しばらく高まつちゃんと俺は白玉と烏龍茶に舌鼓していた。

ユ「で？なして俺の家に来たん？」

とりあえず、何で来たのかが解らないと埒が空かないからな…

高まつちゃんが突然真剣な眼差しになった。…何か似合わないな…

な「ユウタ君って……」魔法”って信じてるかな？」

ユ「……………ハハ〜ン…成る程な……」

多分高まつちゃんは俺のリンカーコアに気がついたけどモヤモヤするから聞いてみた訳か。

ユ「多分高まつちゃんは俺のリンカーコアに気がついたけどモヤモヤするから聞いてみた訳か。」

な「にや！？わかってたの!？」

おっと？もしかしたらもしかしなくても…

ユ「まさか思ったこと口ばしたか??」

な「それはもうおもいつきり呟いてたの!?!」

…どうやら俺はこっちに来て天然ボケが入ったらしいな……

ユ「はあ…まあ正確にはリンカーコアはあるよ。ランク？…強さ的にはデバイス曰く”Bランクくらい”らしい。てかランクってなんだよ？」

な「にははは…実を言う私もランクに関してはあやふやなの…でもユウタ君ってデバイス持ってたんだ！」

俺は高まつちゃんに腕輪を見せる。

ユ「ああ、サンライズって言うんだ。サンライズ、高まつちゃんに挨拶しな。」

サ《…》

あら？サンライズから言葉が出ない…故障ああああ「マスターがマスターがあ…」k確実に故障だなこりゃ。

サ《…はっ！も、申し訳ありませんマスター！貴方の職員室での出来事をリピートしまくってオカズにしたら意識が飛んでました！》

ユ「うん、意識のみならず本体ごと飛ばしたるかワレエ！気持ち悪いわー！」

サ《すみません。でも…可愛すぎるマスターもいけないんだぞ》

な「な……なかなか濃いAIのデバイスなの……あつ、こつちが私のデバイス”レイジングハート”!!!」

俺の目の前に赤い球が浮かび上がってにわかにな滅した。

レ《初めまして、レイジングハートと申します。以後お見知りおきを、ユウタ様。…サンライズ、少し落ち着きなさい…》

なんて優しいデバイス…サンライズに然り気無く注意を……おじいちゃん感激!

サ《レイジングハートさんはまだマスターの超プリチーな魅力に目覚めて無いです!目覚めてしまえば、目覚めさせてたまるか!!!…いけず…》

全く見習えよサンライズ!えらい違いだろうがあ!

ユ「高まつちゃんも魔法、使えるんだな!」

な「うん!!今は命中率と正確性を鍛えてるんだよ!!」

両手で握りこぶしを作ってガッツポーズをしている。子供らしいな。

第11幕「学校へ行こう」なのはの秘密と俺の力」（後書き）

おまけ

な「サンライズさん、その職員室での出来事の映像、レイジングハートに送れないかな？かな？」

レ《ま、マスター！？》

サ《出来ますとも！高画質で送りますか？》

な「うん」

レ《…ユウタ様、同情を禁じ得ません……あと、マスターの代わりに詫びを…ごめんなさい…》

ユ「レイたん”、苦労してるな…”

レ《レイたん？》

ユ「ん！レイジングハートって長いだろ？呼びづらいつつの上無いで、”レイたん”で！しかも女の子の可愛さを引き出すし…」

レ《…：…／／／サンライズ、映像を…》

サ《はい！！》

ユ「あるえええええ！？レイたん！？」

第12幕「修行開始とビデオレター」ユウタとフエイト」(前書き)

作者「グダグダは抜けないが、少しは読み応えが増えたので読んでみてちょ?」

第12幕「修行開始とビデオレター」ユウタとフエイト」

チユンチユン……チチチ…

鳥の囀りが響き、空気が澄んでいる朝、しかも早朝。

御神家の道場では……

な「アクセルシューター!!」

レ《アクセルシューター、セツト!》

高まつちゃんが一つの魔力球を作りだし、道場の天井に向けて缶を
放り投げ、

な「シュート!!」

缶に向けて魔力球を放つ。しかも一発では終わらず、何回も、何回
も…

レ《23、26、30、34…》

…レイたんが数えてらっしゃいました。

レ《48、50!》

な「アクセル!」

50回目を終えた瞬間に、高まつちゃんの魔力球のスピードが速くなり、缶にあたる回数も格段に上がる。高まつちゃんの表情が険しいあたり、コントロールが辛いんだね。

レ《68、75、86、98、100!》

100回目は高く缶を打ち上げ…

な「ラスト!」

ガン!ヒュウウウウ…カン!カランカラン…

な「あつうううう…」

ラストに魔力球で缶を道場の真ん中のゴミ箱に入れようとして、カ

ンがハズレ、缶が落ちた。……寒……

な「まあまあ上手くいったんだよね……」

レ《だいたい80点くらいです。かなりの命中率ですよ。》

な「ありがとうレイジングハート！……えと、ユウタ君は……」

俺？俺はお前見たいに遠距離攻撃派では無いから……

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ！！！！

ユ「ハアアアアアアアアアアア！！！！」

サ《授天力値上昇！サンドバグ保護授天力付加最大限！！》

炎拳でパンチを切り返し……

ユ「ハッ！！！！」

ガシャァン！！ジャララ！！

サンドバッグと俺の間に空間ができた。隙に左手に授天力と魔力を
8：2で混ぜた力を込め…

ユ「サンライズ！装填一発！！！」

サ《装填一発！！》

ガシャ！！

ユウタの左手のガントレットにあるカートリッジシステムを起動、
一発薬莖が吐き出された。

そして俺は、溜めていた力を一気に吐き出す！

ユ「喰らえ！「爆龍拳」！！！」

ボスウ！！！！ボアアアアアアアン！！！！…サアアア…

吐き出した刹那、サンドバッグを貫き、サンドバッグを爆破させ、
砂が流れ落ちた。いやあ…これが人なら……おえ…

な「ユウタ君…スッゴいの！！！！／／／／（横顔がかっこよかったの

…／／」

サ《これぞ！私とマスターの愛のk「言わせねーよ!？」…ニブチン…／／》

レ《…／／（さっきの横顔…記録しました…／／秘匿級のセキュリティを…／／／）》

…最近俺の身の回りから危険臭がするんだが…気のせいかな？

シャワーを浴びて汗を洗い流した。ちなみには朝の6時くらいかな？

高まつちゃんは「一端帰るの!」って言って帰って行った。なんだかんだでやっぱり友達同士家が近いといいもんだな…

てか「一端」てなんだよ…

ここは俺んちだろうがよ…高まつちゃんちはちげえだしよ？

ハア……そういや、高まつちゃんにやらなきゃならんものがあった

な…

結局こねえし……

仕方ないし弁当包んで学校に出陣致しますか…

ユ「おっ、うお〜い高まつちゃん〜!!」

な「ユウタ君!!改めておはよう なの!!」

なんと、高まつちゃんがバス停で待ってたよ……さっきの意味ありげな発言は違うんかい…

ユ「さっき一端って言ったろ!?待ってた今までの自分が恥ずかしいわ!!」

高まつちゃんはそれを聞いていい気になったのか、

な「もしかして〜…期待してたの?」

なんてにやけながらいつつ顔を近づけてきたから……やり返すしか無いな、やり返すよな?やり返せって?しかたねえな……

ユ「天誅〜」

バチコーン！！！！

な「にゃああああああ！！！！」

てな訳で、デコピンしてやりました。

な「ふえええええ…いたあい…」

高まつちゃんはさつきから額を押さえながら踞っている…
そついや、まだ要件を済ませてなかったな！うっかり八兵衛だ。

ユ「高まつちゃん、手、出してみそ」

な「ふええ？」

高まつちゃんは涙目で上目遣いしながら首を傾げて手を開いて俺の前に出した。

うん、年相応の可愛さだなあ…

え？なんか反応ドライだなんて？

…俺にこいつはもったいないねえよ…

カサツ…

俺は高まつちゃんの差し出してきた手に一枚の紙を置いた。

な「う？なにこれ、ユウタ君？」

ユ「開けてみな！」

高まつちゃんはおそろおそろ紙を開く。

おそろおそろて…何もしてねえよ…

な「あ……………これって……………

電話番号と…アドレスかな？」

ユ「そ！俺の携帯のな！」

な「ユウタ君の……………携帯！？」

俺はポケットをまさぐって黒い携帯電話（DOCCOMOF・06 B）を出した。高まつちゃんの目が何故かキラキラしていた。

な「わああああ……………ユウタ君の携帯カッコいいの〜！／／／（白い髪の毛に黒い携帯……………似合いすぎなの／／／）」

ユ「まあな 俺、携帯はスライドしか使わないからさ！スタイリッシュだろ？」（…しっかし…生前の携帯がこっちにきたから驚きだ…）

「

実はこの携帯は前世に使っていたもので、何でかデータそのままに
来た。（19歳ならではのあれな画像や動画は抹消されていた…
その代わり携帯でパソコンハッキング出来るよ…）

な（ユウタ君のメールアドレスと電話番号……何か一気に自分の携
帯がいとおしくなったの／＼）

106

「飛んで放課後…」

何？いきなり王の紅蓮するなって？まあまあいいじゃん？
今に始まって無いだろ？こんなこと！

で、SHRも済ませて、いざ我が家へ！…と洒落こむつもりが…

ア「ユウタ！ビデオレター撮るわよ！！！」

ユ「何で？俺は関係n「なくないからいつてんの！！」わかったわかった！だからと言ってバニスよ、なぜ身構えた！！完璧にタックルかますつもりだったろ！？」

見ればバニスがアメフトよろしくセツト！的な格好でこちらを逃がさんとばかりにいらんでいる。

人生経験上ああいうのには従わないと痛い目見る…しかたねえな…

ユ「じゃあないな…で？誰にだよビデオレターって…？」

ビデオ”レター”だし誰かに贈るんだな…でも、このクラスには入院したりしてる奴はいないし…宛がねえよな…

す「名前はフェイト・テストロッタちゃん。外国にいるのはちゃんのお友達！」

な「うん（ユウタ君聞こえる？）」

うお…！？いきなり高まつちゃんの声が脳内に…高まつちゃんはテレパシー少女だったのか？

な「（これは”念話”って言うの、ユウタ君心のなかで念じてみて

なのー!」

ユ「(ユ…ユウつか?)」

な「(うん 上手いなあ…でね?ユウタ君には言っておきたいんだけど…)」

高まつちゃん、その先はなんとなく察せるぜ?

ユ「(魔法関連か?)」

な「(うん…)」

ユ「(わかった。詳しくは後でな メールでも構わないよ?)」

高まつちゃんの顔があからさまに笑顔になる。やっぱり元気な子供は笑顔が基本だ!!!

そこ!俺が同年代だからおかしくね?って思ったろ!?
精神年齢は自称80歳だ!!

しかし、子供は同時に無邪気だから…

な「わかったの！ユウタ君、後でメールするね！！！」

ア、す「ユウタ（君）とメール！？」「」

…空気を察せる人なら分かるだろ？あの高まつちゃんが無邪気に念話解いてポロリと口に出したから…何故かバニスとツツキーがすごい勢いでこっち見てるよ……齢80歳の神経でも…怖い…

ア「ちょっと！！！け…携帯持つてるなら私…たちにも教えなさいよ！！！！／／／」

す「ユウタ君……駄目かな？／／／」

バニス落ち着け、あとツツキーはその年でなしてそんな艶やかな声出せんの……他の男子にやったら明らかにあれだよな？

ユ「バニス落ち着け、あとツツキーはその年でなしてそんな艶やかな声出せんの……他の男子にやったら明らかにあれだよな？…って、ありゃ？」

目の前にいたお二人さんが固まってる……また俺、思ったことを口に出したか……

するとツツキーが近づいてきて……耳元で…

フ「あ、リンディさん！」

扉からアースラ”艦長”リンディ・ハラオウンが入ってきた。エメラルドグリーンの髪が綺麗な女性だ。リンディはなのは達が撮ったビデオレターを持って来ていた。

ク「すまないな…こんな形でしか会えなくて…」

エ「仲よしだね」

そして、リンディの後ろから、黒髪のショートヘアのクロノ・ハラオウンと茶髪のショートヘアのエイミィ・リミエッタが顔を出す。

フ「クロノ、エイミィさんまで…どうしたの？」

リ「実は、『このビデオレターはぜひリンディさん達も』って書いてあったの。だから一緒にみましょ？」

フ「フェイトはとて面白い笑顔になった

フ「はい…！」

くビデオレターく

な「フェイトちゃん久しぶり！高町なのはだよ！！今日は、新しい友達を紹介するね！！」

- - - - -
フ「新しい友達…どんな子…か…！！！！」

ク「んな！！！！！！」

リ「あらあら」

エ「かわいいく…！！」

- - - - -

ユ「初めまして…私はk「あなたはからかい過ぎよ！！」

バシン！！！！

いたっ！！！！バニス！！！！痛いだろうが！！！！」

ア「きちんと挨拶くらいしなさい！！！！」

ユ「わかってるってば…御神 ユウタだ！…友達は今のところなのはただけだ！…友達に…なるうぜ！」

第13幕「KIZUNA」戦いを通してつながるもの」（前書き）

作者「なかなか上手く書けん…」

ユウタ「いつもどーりだな〜」

作者「そっぴや、ユウタちゃんよ。最近な、この作品におけるいわゆる”テーマ曲”を決めたのだよ！）、）、（キリッ」

サンライズ《考えるなら少しくらい内容に回しません？》

ユウタ「まあ、一応聞いとくか。」

作者「仮テーマ曲は”アンティック・珈琲店”の”スノーシーン”だ<（^・<）キラーン」

ユウタ「言うだけならまだしも、何ゆえ寒いのか？」

作者「何故なら…俺が…寂しいからさ）、〃〃、（？ハア…」

ユウタ「…頑張りたまへ…」

第13幕「KIZUNA」戦いを通してつながるもの」

やあ、みんな元気かい？ハッピーかい？最近出番多め＋何故か体に精神が引つ張られ始めつつある御神 ユウタだ。

あれから数日後、今日は学校が休みだ。：かといってやることなんてこれっぽちも無いから、とりあえず体を鍛えるために走り込みをして、今は道場にいたりします。

ユ「時間制限10分！どちらかが撃墜されるか、武器を取られたら負け……いいな！」

な「ユウタ君：負けないの！！」

今、まさに一触即発な空気になってるのは、これから高まつちゃんとの模擬戦をしようとしているからだ。
魔法の扱いに慣れてる高まつちゃんに対して、近接的な技術しかない俺：正直負ける気しかない……

ちなみにレイたんの合図で始まるんだ。

レ《マスター、ユウタ様、よろしいですね？》

ユ「さあ……行くぜ!!!」

な「……!!」

今…

火蓋が

レ《3…2…1…始めっ!!!》

落とされた!!!

ユ「行くぜ!!!」「砲閃花」!!!」

な「手始めに…」「アクセルシューター」なの!!!」

俺の周りに8つの火球が、高まつちゃんの周りに桃色の魔力スフィアがうかんでいる。

先に切り出したのは高まつちゃんだ。

な「シュート!!!」

魔力スフィアが俺目掛けて飛んできた…しかも、

ユ「……………!!」

やっぱりアクセル言うだけあって速いな……………なら!

ユ「撃ち落とす!!…!行けえ!!」

俺は撃ち落とすべく砲閃花をアクセルシューター目掛けて撃った。
しかし…

な「待つてたよ!相殺することは想定済みなの」

ギョーン!!…!!

アクセルシューターが砲閃花を避けて向かって来やがった!?高まつちゃんの癖に!!…!

ユ「ちい……………!!しかたねえな!!…!ハアアアアアアアアア!!…!
!…!!」

俺が導き出した答え……………

撃つのがダメなら……………肉弾戦だ!!…!

俺は能力「身体変化能力・エレメントブレイブ」で肩に羽を作つて高まつちゃん目指して……………突っ込んだ!もちろん……………

ドカン！バコン！ボアアアアアアアアアアア！

ユ「ハアアアアアアアアアアアア！！！！」

な「ふええええええ！？」

アクセルシューターぶっ壊しながらな！！

そしてあつという間に高まっちゃんに接近して…

キイイイイン！！

接近…して…

目の前に何故か魔力の塊が…

な「デイバイイイイイン…」

ユ「ちい！！！！サンライズ！装填一発！！右手だあ！！！！」

サ「一発…装填！！！！」

ガシャ！

おれも右手から薬莖を一発飛ばし、魔力の塊に迫りつつ構える…！！

な「バスタアアアアアア！！！！」

高まつちゃんの癖に……

デイベインバスターに飲み込まれ、壁に当たったと同時に視界が…
暗くなった……

ユ「……なかなかやるな……」

な「エッヘンなの」

今は道場で結界を解いて、バリアジャケットも解除して休んでいる。
俺は大の字で寝そべり、高まつちゃんは俺の顔を覗きこみながらニコニコして勝ち誇っている。
高まつちゃんも……考えながらやってんだな……いつもぼやぼやしてるから気づかなかった……

ユ「…よいしょ……っと！」

俺は大の字から首のバネと反動を利用して飛び起きる。そして道場を後にしようとする。

な「ユウタ君……」

高まつちゃんが心配そうな顔してるな…おそらく、俺の自信を砕いたから申し訳ないなんて思ってるんだろ？
けど…違うぜ…高まつちゃん…

俺は道場の出口で足を止める。

ユ「負けねえよ。」

な「ユウタ君…!」

サ《マスター…?》

高まつちゃんがびっくりしてるな…サンライズ、心配してくれてありがとう…

ユ「今回は負けた。完敗だ。けど…絶対強くなって…お前も、お前の仲間も…全部…守ってやるからな!だから…」

俺は高まつちゃんに…いや、なのは)……(と向かい合う。

ユ「だから…特訓に付き合えよ、なのは)……(」!

な「…!いま…な…なのはって!なのはって呼んでくれたの!？」

ユ「ああ…俺はなのは…」心が強いな”って思う奴を名前で呼ぶんだよ!」

にっ！

俺は心から笑顔を作った。なのは…お前は強いな…まぶしい位に…

なのはも、俺の笑顔に合わせて笑顔になった。

ユ「さあ、模擬戦の後に食べようとおんみつを用意してるから、一緒に食おうぜ！」

俺はなのはに手を差し伸べる。なのはも俺の手に手を乗せた。
温かい手だな……

な「うん！！ユウタ君！！／＼／＼」

ユ（この温かさ…守ってやるからな…例え…

俺が死ぬような目に会っても…な！）

俺はなのはやみんなの”温かさ”を守る為に強くなることを誓った。

レ、サへ(さ…さっきの笑顔…：永久保存です…／／／／／／／
ユウタ様…^{マスター}…素晴らしいです／／／／／》

…場違いな奴らが約2名…いや、約2機いなりや最高なんだが…

第13幕「KIZUNA」戦いを通してつながるもの」（後書き）

オマケ

な「ん」 あんみつおいひいの 「

ユ「だろ？そしてあんみつにゃ、緑茶が合つて……和むの」 「

な（なんだか精神年齢が年上なのはうなずけるの……。）

サ、レ《（和んでるユウタ様^{マスター}……こちらが和んでしまいます……／／
／／／）》

ユ（あれ？おかしいなあ……顔は笑顔なのに心がいたあい……）

A・S編第1幕「襲撃者」俺の強さ……見せてやんよ……」(前書き)

作者「更新遅れちゃった!!お・ま・た・せ」

ユウタ「待ってねえし……人気無いじゃん……これさ……」

作者「人気がなくても……めげないもん!!!!!!」

サンライズ《執念ありますね……》

A・S編第1幕「襲撃者」俺の強さ…見せてやんよ！…！」

やあ、みんな元気かい？ハッピーかい？なかなか環境に馴染めず不幸全開の御神 ユウタだ。

はてさて、あれから数ヶ月経った訳なんだが……変わったことと言えばバニスとツツキーをきちんと”アリサ”と”すずか”って言うようになったことくらいですな。

時間飛ばされたのは釈然といかんが、ああだこおだいても仕方ねえし、余りにも普通だったから話す必要ないしな。省くぜ？

今日も学校に行く前に軽くミット打ちしていく。一応朝の日課となっているわけだ。なのはとの鍛練は週末を利用してるんだ。

ダン！！ダンドンダン！！ダンドンダンダン！！

ユ「ハツ、ハツ、ハア！！！」

一定の型でサンドバックに叩き込んでいく。一応空手とかやってたし、それなりに体力を全盛期まで持ち込んだし、それなりに負荷を掛けてんだよな。

サ「はい！！マスター！……今日は体育は「ねえよ！！！」……ちえ〜！！！！」

…本気でサンライズ、メンテナンスしようか…？

聖祥大付属小学校

な「あ、おはようなの ユウタ君！」

ア「おはよう、ユウタ！」

す「あ…おはよう、ユウタ君／＼」

ユ「おはよっす！！なのは、すずか、アリサ！今日も三人揃ってんな？」

今日も教室に入るとなのは、すずか、アリサの三人娘が出迎えてくれる。何故かって？……

俺の席、この前の席替えて三人娘の間って言うまさかの位置に……俺に死ねと？

よくよく考えたらさ…変わったこといっぱいあんじゃないよ…

ア「何よその”三人でワンセット”見たいな言い方は!？」

な「まあまあアリサちゃん!捉え方の違いもあるの!」

す「そっだよアリサちゃん!柔さかは大事だよ?」

アリサ…確かに二人の言う通りだぜ?

ユ「そうそう、俺はそんな意味で言った訳じゃねえよ

とりあえず”三人で一人前”的な?」

ア「天誅!?!?!」

ブン!?!?!(アリサが何処からか出したハリセンを振る音)

ひよいッ!?!?!(ユウタが避けました)

ユ「朝から素振りお疲」「残念!!」「へぶっ!?!」

バシィン!!…いん…いん…(エコー)

アリサのハリセンが…顔面にクリーンヒット…痛い…

まあ、こんな感じで1日が始まるわけだが…男子からバシバシ目線を浴びている……
そっちのケは無いぞ?わりいな…

夜、海鳴市上空

?「見つかったか?」

ノースリーブのパワーシャツと青のズボンをはき、両手に銀のガンレットを着けた動物耳の青年が尋ねた。

?「ん…いるような、いないような……チラチラ反応はあんだけどよ…」

赤いゴスロリチックな服を纏い、手にはハンマーを携えた少女が青年に応えた。

ぽふん…

? 「まあまあ、確かにこの辺だね? とりあえず別れて探そうか?」

そんな少女の頭には手をおいて、純白のジャケットにパンツ、そして黄金の翼を広げた、青髪の少年が言う。

? 「……うん、わかった! / / /」

? 「……………」

少女は手を置かれているのが嬉しいのか、笑顔を少年に向ける。
青年は、かなり不機嫌そうな顔をしていた。

? 「んじゃ、僕とヴィータはあっち、ザフィーラはあっちね?」

少女、ヴィータには優しくそうに、青年ザフィーラには明らかに除け者のように言った。少年の顔が若干にやけていた。

ヴィ「わかった! / / /」

ザフ「……了解した。しくじるなよ、闇の書は預ける。」

ザフィーラが少年に”闇の書”を渡した。

？「はあ？ザフィーラ、誰の心配してんだよ？手前えは手前えの心配だけしてりゃいいんだよ！！」

ザフ「……！！」

少年は明らかに態度を悪くしてザフィーラに言う。ザフィーラは悔しがるように拳を握りしめていた。

？「さあ、行こうか！ヴィータ！！！！」

ヴィ「うん！！咲哉！！！！」

ヴィータは少年、咲哉の後に続いて飛んでいった。

ザフ「あの男……おそらくヴィータをただの女としか見てないな……」

ザフィーラは自分の無力さに齒がゆい思いが募った……

その頃、御神家

ユ「…よし!!」この”バージョンもなかなかいい感じだ!!」

俺は今日最後の鍛練が終わったところだ。

”この”ってのは、またのお楽しみだ!まだまだ調整段階だしな
因みにバージョン”H”のフォームは完璧に把握したぜ!

サ《…マスター!魔力反応を感知しました!!…これは不味いで
すよ!!…!》

突然サンライズが騒ぎ出した。

サ《魔力反応のなかにはなのはさん(…………)がいます!!…!》
ユ「っ!?何だと!?!…行くぞ?」

俺は家を勢い良く飛び出す。…待ってる、なのは!

な「何!?!どこの子!?!どうしてこんなことするの!?!」

私はいま、私くらいの女の子と男の子に魔法攻撃を受けています……
女の子ならまだましなんだけど……男の子の攻撃は重くて……しかも目
線が不快なの……

ヴィ「……」

咲「……(なのはちゃん ヤバい!可愛すぎる 絶対俺のものに
するんだ)」

ブオン!

女の子の手にあった鉄球が赤い魔力を纏っていて、男の子は……まだ
不快な眼差しを消してくれません……嫌らしくてやなの……

バシユン!!!

鉄球が……放たれたの!!!

な「話を……」

レ《《アクセル……》》

なのはも負けずに、スフィアを作って…

な「聞いてっつてばあああああ！」

レ《シューター！！！！》

当てるのおおお！！！！

ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！

やった！全弾命中なの！！相手の鉄球は4、私のスフィアは8…勝ちな

ヒュン！

残り4つであの二人に…牽制なの！！

ヴィ「くっ…！！？」

咲「…！！？」

よし！！体勢を崩したの！！今なら…イケるの！！

な「デイバイイイイイン……！」

レ《バスター！！》

ドオオオオオオオオオオオオ！

私のデイバインバスター、そうそう簡単にはふせげないの！

私は女の子のほうにデイバインバスターを撃つたの！

ヴィ「危ねえ！」

ああ！？受け止めずに避けたの！卑怯なの！！正々堂々勝負なの！
！（誰もやりません。BY作者）

ビリ………

あ、避けた時に軽くなつたみたいで帽子が落ちたの…
同時に女の子の目の色が変わってしまいました…
避けたのがマイナスなの！！（何様だよ…BY作者）

ヴィ「アイゼン！カートリッジロード！！！！」

咲「…ロンギヌス、カートリッジロード。」

あれはユウタ君と同じ……だとしたら……不味いの…

女の子のデバイスのハンマーがピツケルにジェットを付けた感じに…
男の子の槍のデバイスは三ツ又の槍になったの…

ヴィ「ラケーテン……」

咲「デメテル……」

女の子は体を軸にして回転して、男の子は槍を回してるの……今のうちに！

な「レイジングハート…！」

レ《ラウンドシールド……！》

防御しとかないと…！

ヴィ「ハンマー……！」

咲「ストライク……！」

な「か……………はあ……………」

私はビルに叩き込まれてしまいました…
バリアジャケットが弾かれて…レイジングハートが…

レ《……………》

スタ…

ヴィ「終わりだあ！！！」

咲「ふふふ……………苦しんでるのも可愛いな……………」

女の子がハンマーを振り上げ、男の子が槍を構えてるの…

私…このまま終わりなんて……………やだよ…

ユーノ君…フェイトちゃん…アルフさん……………

ユウタ君……………

ゴオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！

ヴィ、咲「「な！？ウワアアア！！！！！！」」

…真つ赤な光線が、二人を呑み込んで隣のビルに叩き込んだの…光線が放たれた方を見てみると……………

ユ「2対1とは…卑怯極まりないな！！外道ども！！！！」

紅蓮のコートを着て、バリアジャケットを展開しないまま赤い翼を羽ばたかせているユウタ君が……………空中に立っていたの…

続く……………

A・S第2幕「襲撃者」許されない、赦さない」

ユウタサイド
海鳴市上空

やあ、ただいま不機嫌まっしぐらな御神　ユウタだ。

なのはの様子をマツハで見に来たら…二人の男女に滅多打ちに殺られていた……

ユ「もう少し……早ければ……くそ！」

ゴオオオオオオオオオオ！！！！

俺はなのはのいるビルにめがけ…授天力を溜めて、巨大な球体を作った

ユ「断罪の炎を！！コロナ・バーストおおおおおおおおお
！！！！！！」

その球体に溜まった授天力が爆発し、砲撃となってビルに向かう…

女の子はヴィータ、男の子は咲哉って言うのか。咲哉、ヴィータ…
いい名前だな！！

でも…なのはを滅多打ちにしたのは別だぜ！！！！

ユ「ハアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

キ「イイイイイン！！！！！！

咲「…な！？」

俺は咲哉に一気に詰め寄る。女の子は女の子同士が良いし、「女の子はやむを得ない場合を除いて攻撃は御法度！」だってじいちゃんから教わったからな！

ブオン！

ガキ「イイイイイイイイイイイイン！

咲哉の三ツ又の槍と俺の拳が切迫する。

ユ「お前…何故なのはを襲った！？」

咲「てめえに話してなんになんだよ!!!!」

キイイイイン!

ちい……こりゃ分が悪いな……

海鳴市上空（三人称サイド）

ユウタと咲哉が切迫したと同時にヴィータは動き出した。

ヴィ「今のうちにあいつを……そうはさせない!!!!」「……!？」

バチイイイイイ!!!!

しかし、いきなり現れた雷球により行く手を阻まれてしまった。

雷球が飛んできた方を見ると、金髪をツインテールにして黒のバリ
アジャケットを来た女の子が飛行していた。

周りを見てみれば、さっきの女の子の近くには茶髪ショートカット
で民族染みたバリアジャケットをきた男の子と、緋色の長い髪を
なびかせ、いぬ耳をはやし、尻尾がある女性がビルに立っていた。
ヴィータは金髪の女の子を殺気を出しながら睨んだ。

ヴィ「あんだてめえ……あいつらの仲間か!？」

ジャキ……

フェ「時空管理局委託魔導師……フェイト・テストロッサだ!!そして……なのはは……友達だ!!」

女の子、フェイト・テストロッサは黒一色の杖を構えながら名乗った。

フェ「管理外世界での無許可魔法の使用、民間人への武力攻撃……どれも軽い訳じゃない……武装解除して事情を聞かせていただ……」

ヒュン!ヒュン!ヒュン!ヒュン!

フェ「くっ……!!全部は無理そう、バルディッシュユ!!」

バ《ラウンドシールド!》

ガキン！ガキン！

ヴィータはフェイトの話を聞かんとばかりに鉄球を飛ばしてきた。つまり、「話す気はさらさら無い」ことを表していた。

フェ「そっちがその気なら…あなたを倒して事情を聞きます…!!」

ビル内

？「なのは！しっかりして！」

茶髪ショートカットの男の子がなのはに魔法をかけていた。

な「あ…ユーノ…君？」

ユ「うん、なのは。大丈夫かい？」

男の子、ユーノはなのはを気遣いながら魔法をかけ続ける。

？「やあなのは！久しぶりだねえ！」

な「アルフさん……」

緋色の髪的女性、アルフがなのはに笑顔で挨拶する。が…すぐに真剣な表情になる。

ア「しっかし、あいつらなにもんなんだい？」

ふるふる…

な「分からないの…いきなり襲われて…」

なのはは首を横に振る。つまり心当たりはないらしい。

ア「まあ、その内の一人はうちのフェイト相手だし心配ないよ！あたしは少しフェイトのところに行くてくるね！」

そういつてアルフはビルから飛び立った。

残ったのはユーノとなのはだけだ。

ユ「でも…なのは、流石にビルをこんなにしちゃダメだよ？ディ
バインバスターでしょ？これ！」

言うのを忘れたが、なのは等のいるビルはなのはの前、ビルの中央
に風穴見たいに穴を開けている。

な「ううん、違うの……」

ユ「じゃあ…誰が？」

海鳴市上空、ユウタVS咲哉

咲「アブソリユート…ツイスター……！」

ギユイイイイイイイイイ！

咲哉のデバイスにドリルみたいなものが出来、凄まじい勢いで回転
している。

ユ「一発装填……！爆…龍…拳……！」

咲「アハハハハハハハハハハ！！何？非殺傷だと思った？ダッセ
エエエエ！！！」

ユ「……このぐらい！！！！」身体変化能力・エレメント・ブレイ
ブ……！！！！」

ユウタは左腕を変化させ、サンライズをセットアップさせた感じに
戻したが、血は止まっていない。

咲「ちっ、しぶてえな！！！」

ユ（くそ……一応出来たが……長くは持たねえな……）

ユウタがそんなことを思っていると……

咲「お前さ……間違いなく”転生者”だな？」

ユ「！！！？？」

いきなり咲哉が話しかけて来た。しかも……ユウタを”転生者”と見
破った。

咲「反応からして凶星みたいだな？」

ユ「貴様…なにもんだ!!!」

咲「なあに、俺も転生者だからな？」

ユ「……なるほど……いま気付いたよ…貴様から感じる気味悪い氣の流れ……俺以外にいてもおかしくはないな。」

ユウタはまた咲哉に向き直る。

ユ「目的は何だよ？」

ユウタは聞いてみたかった

他の転生者が何を目的としているのかを……

ユ「俺の目的は”守りたいものを守る”こと。お前は？」

咲哉はニタアと嫌らしい笑顔を作り……

咲「この物語に出てくるメインキャラ）……………）を俺の奴隷にして毎日犯すことだ！……！」

ユ「……！！（物語？メインキャラ？）」

わからないことばかりだが……おそらくメインキャラなるものになのは等も入っているだろう……とユウタは悟り、さらにどうしようもない怒りが込み上げた。

ユ「ふざけんな……！そんなの神々が許すわけ……！」

咲「ああ神ね、そいつも色っぽくってさあ……………たっぷり犯した後には能力がっつりもらって殺したよ……名前は……」

エリリイ「……だったか？」

ユ「……………エリリイ？」

ユウタの頭が一瞬真っ白になり、更には……

エリ『ごめんなさい……！』

A・S編主人公、追加転生者説明（前書き）

作者「設定追加だぜ？」

ユウタ「見たくなければみなくてもいいが、みたほうが楽しめるぞ
！！！ネタバレ注意だ！」

A・S編主人公、追加転生者説明

御神 ユウタ

設定はすでにあるのでそこに追加するところだけ紹介します！

サンライズ無しでできる技

○フレイルム・インパクト

手に授天力を溜めて正拳のように打ち込み、内部攻撃をする。

○鳴神流剣奥義”乱時雨”

居合い抜きで縦横無尽に切り刻む抜刀術。父親の技”舞桜”を真似たもの。

サンライズ

新バージョンを紹介します！

・バージョン”K”

…スピードがある程度落ちるがパワーが未知数。剣を軸にして戦う。

○ソードフォーム

長い日本刀”極”を使う。授天力カートリッジ装填限界は6発。

○エクスカリウムフォーム

巨大な西洋剣”エクスカリウム”を使う。ソードフォームとあまり変わらないが、パワーは桁違い。

使用技

○火鳥風月

風、火の授天力を組み合わせ、火の鳥と風の衝撃波を一振りで放つ。範囲は対象のみだが威力はユウタのバージョン内最強。バージョン”K”での奥義。装填三発もしくは二重装填一発。

○火鳥風輪

火鳥風月の範囲版。威力はいささか落ちるが、かなりの広範囲に攻撃が可能。装填一、二発技。

○風林火山

剣を地面、空中に突き刺し、剣を空間に馴染ませる。対象の真下広範囲に陣を展開し、火柱と風刃を叩き込む。奥義二個目。二重装填二発技。

○疾風迅雷

パワー、スピードが組み合わされた怒濤の攻撃。目にも留まらない速さで相手を切り刻む。装填無し。

○風神十字閃、炎風神十字閃

剣で十字を描き、衝撃波を放つ。防御はほぼ紙。どんな防御も突き抜ける。例外は氷属性のバリア”ミハエル・フリード”のみ。最終装填技。授天力を込める属性で名前が変わる。

新たな転生者

名前：神無かみなし 咲哉さくや

年齢：14（転生前23）

身長：170

体重：60キロ

容姿：青い髪をショートカットにして、アホ毛がある。顔が整っていて、イケメン
体はスラックとしていて無駄な贅肉がない。

詳細：もう一人の転生者。転生前は風俗通いのニート。アニメが大好きで、”リリカルなのは”の世界に行けると信じ、自殺。

エリリイを脅し、犯し、殺した張本人。

最強の魔力をもらい、あらゆる魔法を使えるようにしてもらった。
使える武器は槍。

デバイスと言い張るが、エリリイの最後の抵抗として”御神 ユウ
タにしか真の力を使えない”ようにした。つまり、現在は名がない
ただの”魔力伝達が良い機械”に過ぎない。

デバイス（真の力を使えるようになった状態）

名前：ムーンライト

詳細：サンライズと対照的なデバイス。AIは少年。ユウタ史上主義。形態は槍と銃の2つ。

○ガンフォーム

デザートイーグル”ライジングホーク”に変換する。弾数はマガジン一つにつき200発。オートマチックシステムを付けている。

技

・ジャツジブラスト

追尾をつけて威力を高めた弾丸を叩き込んでいく技。属性、授天力付加可能。授天力を加えると”ギルティブラスト”と名が変わる。

・神鳴かみなり

200発分を全て使った砲撃。属性、授天力付加可能。授天力を加えると”ゴッドバースト”と名が変わる

○スピアフフォーム

槍”月詠”ツクヨミと変わる。対象の防御を無効化する”月詠乃纏”つくよみのまといを使用する。咲哉はこれしか使えない。

技

・デメテルストライク

咲哉の技。相手の技を打ち消し、貫く。この技に殺傷非殺傷はなく、

すべてを傷つける。

・ラファールストライク

デメテルストライクのユウタ版。授天力を加え、防御を展開しながら突貫する。コンビネーションに適した技。

・アブソリユートツイスター

回転しながら魔力を纏い、あらゆるものを破壊する咲哉の奥義

・冥王突旋

アブソリユートツイスターのユウタ版。周りの魔力を集め、回転させて威力を上げ突貫する。

A・S 編第3幕「襲撃者」新しい力」（前書き）

作者「戦闘は難しいな…文才欲しいよ…」

ユウタ「ぐだってるしな。」

作者「…お腹壊してないよ?」

ユウタ「それは下ってる…」

作者「なんも食べてないよ?今は…」

ユウタ「それは食らってる………」

煙が断ち切られ、中から咲哉が顔を出す。頭から血を流し、肩で息をしていた。

咲「知らねえよ！！！！てめえの事情なんか！！！！いいじゃねえか！！女はそういうことをさせなきゃ（・・・・・・・・・・・・・・・・）存在価値ねえからなあ！！！！！！」

ユ「……きつさまアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！エリリイに！！！！エリリイに謝れ！！！！」

サ《三発装填！！！！爆龍連拳！！！！》

ガキイイイイイイイイイイイン！！！！！！

また槍と拳が切迫する。しかし、押されぎみなのは咲哉だった。

ユ「エリリイはな！！！！みんなを幸せにするために生まれたんだよ！！！！！！俺も幸せにしてもらった！！！！これから恩返し………出来ると思っただのに！！！！！！貴様は………貴様はアアアアアアアア！！！！」

咲「はっ！知ったこっちゃねえよんなこと！！！！！！お前の幸せ？んなもん俺の幸せに比べたらちやつちいだろ！！！！！！お前は俺がヤツテんのを指加えてみてろよ！！！！！！」

ガキイイイイイイイイイイン！！！！

ゴオオオオオオオオオオオオ！！！！

ユ「サンライズ！最終装填して維持しろ！！！！俺の授天力根こそぎ使っても構わない！！！！」

サ《……！！！！あなたは死にたいのですか！！！！？？最終装填だけでも体の負担が大きいのに！！！！》

授天力は体にかかなりの負担がかかる。大抵の場合は武器に通して負担を限りなくゼロにするが、今は”身体変化能力・エレメント・ブレイブ”中。体を武器化させて使用しているため、負担は計り知れない……

ユ「死なないさ！！！！俺は……俺はここで本気出さないと……後悔する！！！！俺は……」

ザッ……

ユウタは咲哉に向けて拳をつきだす。

咲哉はユウタに目を向ける。そこには…

ユ「鳴神流剣奥義…」乱時雨」……」

サ「バージョン”K”…システム、オールグリーン!!マスター!
!完璧です!!!!」

黒のタートルネックタイプのアンダーアーマーに黄金のラインが入り、肩には密着型の肩当て、手には籠手をはめられ、長い日本刀の太刀が握られている。腰には武装の鎧部分が付けられた、まさに騎士甲冑のユウタが…

ユ「お前の罪……俺が裁いてやんよ!!!!」

ジャキン!!!!

咲哉に太刀の矛先を向けていた。

ビル近辺

ヴィ「咲哉…咲哉ー!!!!」

ユウタの”龍星破群”はこっちからでも見えていた。凄まじい衝撃波をその場全員に届き、防御せざるを得なくなった。

フェ「今のは…まるでなのはのスターライトブレイカーが4つあったみたいだった。」

アル「なんだってんだい！！？」

フェイトもアルフも砲撃には驚いていた。そこに…

な「あれは…ユウタ君の”龍星群”かな？」

フェ「な…なのは！！大丈夫？…ユウタって確か、ビデオに入ってた…」

な「今はなんとか……だけど、あの男の子…かわいそうなの！！！」

なのはの言葉にフェイト、アルフが疑問を持った。

フェ「どうして？」

な「ユウタ君の恐ろしさは…バージョン”K”になってからなの…

…」

海鳴市上空

咲「ふん！！！雑魚がどんな武器をしようと無駄だ！！！雑魚は雑魚らしく……死ねえ！！！！」

咲哉は再びデメテルストライクで突貫しようとしている。

ユ「……忠告しとこうか？

どい豊にんとうてんの……空っ」

咲哉は背中に悪寒が走り、とっさに移動した。しかし……

キイイイイイイン！！！！

地面、いや、自分のいる空気中に不意に陣が展開された。

咲「…な!？」

ユ「喰らえよ……二重装填二発……」

ユウタは放つ。闇夜の中に灯される火柱を…闇を断ち切る風の刃を…

ユ「風林火山！！！！！！」

ゴオオオオオオオアアアアアアア！！！！

咲哉の下の陣から火柱と無数の風の刃が襲いかかる…

ブシュ……

ユ「がは……ゴフッ」

咲「バリアジャケットも……な」

ユウタは腹を槍で貫かれた…腹からは血が止めどなく流れている…
手にも怪我をしているユウタにとっては失血してしまう危険性すら
あった…

ユ「へ……へへ……」

咲「なんだあ？もしかしてお前はマゾなのか？痛くて感じてんの？」

ユウタは貫かれても笑う…むしろ不気味なくらいに…
しかし、ユウタにとってはこの状況はむしろ嬉しかった…

ガシッ！

咲「ん？」

ユ「welcome my territory!!!!!!」(よく来てくれた!!!俺のテリトリーに!!!!!!)」

ドゴツ!!

ユウタは咲哉の顔に正拳突きをかました。もちろん咲哉は…

咲「がはっ!?!」

顔を殴られたため、バランスを崩し、槍から手を放す。

ガシッ!

咲「は!!!!?????」

ユ「さあ……今度はこっちの……」

バリイイイイイン!!!!!!

結界が弾けた。

ユ「なんだ!!!!?」

咲「いまだ!!!!」

キュン!!!!

ユ「!!!!? なっ! 待て!!!!!!」

ユウタはついつい目を離した。咲哉は隙をついて転移魔法を発動して逃げてしまった……

ユ「ちくしょう……逃がした……か?……」

ユウタは緊張の線が切れたのか、地上に降りてビルに体を預けていた。

ユ「はあ……………はあ……………血を…失い過ぎたか？……………」

そして、長い長い夜の戦闘は…

なのは、フェイトの負傷、及びデバイスの破損、ユウタの惨敗にて幕を閉じた。

A・S 編第4幕「調査本部」ケジメと引っ越しと」(前書き)

作者「全くなかなかに良いのが書けない!!!」

サ「まあ小説ですから、気軽に行きましょ? 作者さん!」

作者「サンライズ、出番なかなか作れなくてごめんな?」

サ「さあて、作者さんの恥ずかしいムービー、ネットに撒き散らしますかあ...」

作者「ごめんなさい...ちなみに後半はアブナイので発狂してしまう人は閲覧注意で?」

A・S 編第4幕「調査本部くケジメと引っ越しと」

？

ユ「…知らない天井だ…」

ユウタは辺りを見渡す。白いしきりのカーテン、白い布団、白いシ
ーツ…白い天井…

ユ「清潔感がいいが…目が痛い…」

ユウタはまた天井を見上げる

ユ（負け……たんだな……エリリイの仇…取れなかった…）

ユウタは布団を握りしめた。割られた左手で（…）…

ユ「いつ…！…弱いなあ…俺…」

ユウタは落ち込んだ。咲哉の”技を消す技”デメテルストライク…
威力と回旋力が凄まじいアブソリュートツイスター…
あれを越えなければ…

シヤアア…

看「あ！！気付かれましたか！！」

しきりのカーテンが開けられ、ナース服の看護婦が出てきた。

ユ「あ…はい。あの…ここは？」

看護婦は元気なユウタに安心したのか笑顔になった。

看「ここは次元航空艦”アースラ”の医務室ですね！！お体は大丈夫ですか？」

看護婦はユウタに水銀式の血圧計を付けた。

ユ「まあ…本調子では無いですが大丈夫です（何で水銀！？次元航空艦ならデジタルでしょ！？）」

プシュ…

看「うん！バイタル安定ですね！！ですが……

いったいどうやったら腕が縦に両断されるのですか！？」

ユ「！！！！！！！！」

ユウタは思い出している。あの…爆龍拳をアブソリユートツイスタ
ーで決られる様子を鮮明に…情けない…そんな気持ちに滲んでき
た…

ユ「看護婦さん……」

悪いけどさ…喉が渴いたから…飲み物欲しいな…！」

看護婦は笑顔で

看「はい！！今取って来ますね！！！」

看護婦はユウタのベッドから離れて医務室から出ていった。

医務室外、廊下

な「ユウタ君…大丈夫かな？」

フェ「ユーノが運んだからいまいち状態が分からなかったからね…！」

なのはとフェイトが医務室に向かって歩いていった。

つい先ほど、”闇の書”というものがこの事件の鍵で、戦った人たちはヴォルケンリッターという守護騎士らしく、対処するための本部を海鳴市、なのはの家近辺のマンションになったことを聞かされた。

なのはとフェイトはユウタのいる医務室へ行き、報告しようとしている。

運ばれた時、ユーノとアルフに「来ちゃ行けない!!」と言われて仕方なく許しが出るまで待っていたのだ。

看「あら、貴女はフェイトちゃん？」

フェ「看護婦さん！ユウタの様子は？」

ちょうど、医務室から看護婦が出てきた。フェイトは医務室にお世話になったことが何度かある為、顔見知りなのだ。

看「ユウタ君っていうの？あの子、今しがた意識を取り戻したわ！今飲み物欲しいなって言ってたから買ってくるから、中に入っても良いわよ！」

な「ありがとうございます!!!」

なのはとフェイトは看護婦に会釈して、医務室に入ろうとした時……

ユ「うわあああああああ！！！！！くそ！！！！くそ！！！！くそ！！！！何で……何で負けた！！！！くそおおおお！！！！！！！！」

なのはとフェイトはびっくりしたが意を決して中に入ってしきりのカーテンを開けると……

純白のシートが真っ赤に染まり、ユウタの左腕から血が出ていた。

ユ「俺が……俺が気付いてやれば……くそ……」

ユウタはシートを握りしめ、赤と金の瞳から涙を流していた。

な「ユウタ君！！！！？」

フェ「ユウタ！！！！」

なのはとフェイトはユウタを止めるために手と足を押さえた。

ユ「…なのはあ……フェイトお……」

ユウタは泣いてたせいかわずついていた。

な、フェ（か…可愛い／＼／＼／＼／）

ユ「……聞いて…たの……？」

な「…うん……あ！ユウタ君、手は！？」

なのははユウタの手に目を向ける。包帯には血が滲んでいる。

ユ「……また縫合してもらわないと……でも今は……”身体変化能力
・エレメント・ブレイブ・”！！」

な「にゃ！？」

フェ「うわ！！」

ビリビリ……！！

ユウタの左手の包帯が弾け、鎧でコーティングされた腕が姿を出した。

な「ユウタ君の手が…変わったの……」

フェ「まさか…レアスキル!？」

ユ「まあ……そうだね…レアスキルだよ。」

ガシヤ、ガシヤ……

ユウタは手を握ったりはなしたりしている。

ユ「怖いだろ?こんな化け物じみた「怖くなんてないの!!!」「え、あ…おい、なのは!!!」

キュッ…

なのははユウタの武装された手を握りしめた。

な「冷たいと思ったのに…暖かいの」

なのははユウタの手にを握りしめながら笑顔で言った。

フェ「…私も！」

キュッ…

フェイトもユウタの手を握る。じんわりと脈動と温かさを感じた。

フェ「ホントだ…優しい温かさだね…」

ユ「え、いや…なのは？フェイト？／／／／／／／／／／／」

な「ユウタ君…さっきから暗いの……」

フェ「私たちに話してみないかな？私たち、”友達”だよね？」

なのはとフェイトはユウタの目をじっと見つめる。

ユ「…ちょっと医務室の外で待ってて？看護婦さんには悪いけどさ、

医務室から出ようかと思って思ったから、着替えたいし？」

ユウタは二人を見ながら言う。そして、

ぼすん……

な、フェ「へ？」

手を二人の頭に置いた。

ユ「……頼む……すぐすむから……」

ユウタは真剣な表情でなのはとフェイトを見ていた。

な「わ……わかったの／＼／」

フェ「……／＼／」

なのはとフェイトは顔がトマトより赤くなっていた。しかし、ユウタは首をかしげるだけだった……

現在医務室にはユウタただひとり。ユウタは手のひらにサンライズを乗せている。

ユ「…なあ、サンライズ……」

サ《何ですか？マスター？》

ユウタはサンライズを握りしめ、胸へと当てる…

ユウタ「決めたんだ……俺の力の在り方をさ……《？》

俺は神の力の一部を使わせてもらっていて、エリリイがくれた最高で…最後の贈り物だった…だからさ…
エリリイ並みとは言わない。小さなことからコツコツ積んで、いつか”人を幸せにするため”に役立てたい！」

サ《マスター…！！》

ユ「だからまず……咲哉を越えなきゃならない！！」女”を唯の”性処理道具”なんて思っただけやがるあいつを……

サンライズ…力を貸してくれないか？」

サ「もちろんお貸ししますよ！！！！私たち（・・・）の力で……マイスターエリリーの分まで！！！！」

…？

ユ「ん？たち（・・・）って？サンライズは一機だろ？」

サ「後のお楽しみです！！！！／／」

シユル……バサア！！！！

ユウタは、さっきまでの医務室の着物から、黒を基調とした赤いラインのジャケット、中は黒のタートルネックシャツ、ズボンも黒という格好になった。

そして…

ユ「…よし!」

ユウタはケジメとして……

ジヨキン!!

純白の長い髪を……切った。

ウィーン……

な「あ!ユウタ……く……!!」

フェ「あ……」

ユウタが医務室から出てきた瞬間……なのはとフェイトは見惚れてしまった。

ジャケットをなびかせ、純白の髪に青のメッシュ、そして……赤のハチマキを額に巻いている。

要するに、まるでボーイッシュな女の子なのだ。しかもかなり可愛い系の……

ユ「さあ…気持ちも引き締まったし、フェイトのいうリンディさん
だっけ？に会いに行こうぜ？」

俺も…この”物語”とやらに…入ってやんよ…咲哉…！！」

な（ユウタ君が……りりしいの…！！／＼／＼）

フェ（ほえ…／＼／＼／＼）

なのはとフェイトが再起動したのはそれから5分ぐらい後だった…

海鳴市マンション

ユ「おゝいエイミィ！これはここでいいのか？」

エ「うゝんとね……うん！バッチリ！！」

あれからアースラの人らに自己紹介して、今は支部となるマンションに機材を持ち運んでいる。

ユウタはターゲットルネックのみで腕を捲っている。

ジャケットは腰に巻き付けている。

茶色のショートカットの女の人、エイミィはユウタの問いにサムズアップで答えている。

リ「でも凄いわねえ…一時的にでも腕を変質化させて止血するなんて…」

ユ「俺は回復に力を回せないから…気休め程度の応急措置さ…本来は武器だし？」

段ボールから荷物を出しながら翡翠色の髪をしたリンディさんと話していた。ユウタの左腕は黒い武装が黒光りしている。

ユウタは窓に目をやる。そこには…

な「わあ！！ホントに近いの！！！！」

フェ「ホントに？」

フェイトとなのはが仲良く話していた。

な「ほら、あそこが私んち！！！！んで、あそこが……ユウタ君んち！！！！」

ズササー！！！！！

ユウタは盛大にずっこけた。

ユ「なのは！なあに人の許可なしで人んち教えてんだよ！！！！」

な「え？……あ、忘れちゃったよ！！ごめ「ごめんですんだらな
んとやらだこなくそー！！！！」にやああ！！いひやいいひやいほお
！！！！」

ミヨーン！！！！

ユウタはなのはの頬を引っ張った。まるで餅みたいに伸びてちよつと楽しかった。

遡り深夜、八神家

ヴィ「ん……………さく…やあ……………」

咲「クツクツク……………これでヴィータは俺の物だな」

八神家の一室……………そこにはヴィータと咲哉がいた。

ヴィータは健やかな寝息を立てて寝ている。生まれたばかりの姿で……………

咲「ああ…やっぱり女は楽しいなあ!!」

咲哉はヴィータの寝顔から足先までをなめ回すように見た。

咲「次は……シャル辺りかな」

咲哉の不気味な笑いが闇夜に響いた。

夜はあける…

続く

A・S編第5幕「異世界協定」ユウタとアラン」(前書き)

作者「今回は魁斗さんの青葉アラン君が来てくれます!!!」

アラン「魁斗よりかはましだね…ユウタ、魁斗と交換しない？」

ユウタ「お前作者にも容赦なしか!!!…魁斗さん!!!…こいつはツンデレでしたよ!!!」

アラン「…いい度胸だね……噛み殺すよ？」

ユウタ「殺れんなら殺ってみな!!!焼き尽くしてやるよ!!!」

作者「魁斗さ〜ん!!!何をどおすればこんなデンジャラスチャイルド生まれんのおおお!？」

ぼかアアアアアアアアアアアアアアアアん!!!!!!

作者「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!？」

A・S編第5幕「異世界協定」ユウタとアラン」

海鳴市 ユウタ宅

ユ「ハアアアアアアアアアア！！！！！」

ズバアアアアアアアアアアアアアア！！！！

今ユウタは道場で独り修行していた。

ユ「俺に足りないのは……反動に耐える体と緻密な授天力コントロール……一発装填……」

ユウタはバージョン”K”で装填を施し、また振り始めた……

ユ「あいつに勝つには……集中力と授天力コントロールを利用して……
両断するしかない……」

にしてもさ……なんでなのはとフェイトと一緒にやってくんねえかな
？そんなに怖いか？このバージョン……」

なのは一緒にバージョン”K”での特訓しようと誘ったら…「ユウタ君はもう少し実力を考えて!!」とか言われ…フェイトとは一回やったが…「ユウタって…見た目以上に強いし、謙遜しすぎてるとかでやんわり断られてしまった。」

ユ「だ〜チキショー!!!ひとりじゃ効率悪くてちっとも練習にならねえ!!!…どうしようか」なら僕がしたげるよ…噛み殺さない程度に…ね?」!?!誰だ!!!」

バリーイイイイン!!!!

突然空間が爆ぜた。中から…青のショートカットの髪をなびかせ、かなり美形の少年が出てきた。少年の手にはトンファーが握られている。

?「やあ…転生者くん…いや、御神 ユウタくん?」

ユ「俺を知ってる?…貴様誰だよ…何気カッコいいから嫉妬しちゃまっわ!!!」

?「僕は…名乗るならアラン。アラン・レイヴィル。」死を司る神”だよ?」

ユウタは身構えた。ユウタはさつきからなんでか違和感が拭えなかった。

ユ「アラン……………？あー！！夢で見るなんか意味不明な技とか使
うトンファー使いに似てる！！！」

アラ「それはおそらく、君を僕の能力で見た時の時空の歪みだね
……………僕の能力を少し共有していたみたいだ。多分君の夢で見たトン
ファー使いならば「オリヤア！！！！！」

ガキイイイイイン！！！！

ユウタの剣とアランのトンファーが火花を散らす。

ユ「丁度よかった！！手伝ってくれんだろ？なら早速打ち合おうぜ
！！どれくらい耐えられるか試すからさ！！！！」

アラ「…僕が噛み殺さない可能性はないとも限らないんだよ？一応
君も、転生者だし……」

アランはユウタに殺気を飛ばすが、ユウタは動じない。

ユ「お前より弱いのは分かってる……………だけど！俺には…やらなきや

いけないことがあるからな！！！お前を越えられれば……強くなれる気がする！！！！」

ユウタの目は真剣そのものだった。アランは黙って聞いている。

アランは正直驚いた。ユウタはエリリイを殺されたことにより、本当のクズになっているかと思っただら……いつにも増して覇気がある。

ユウ『強くあるには、強者に立ち向かい、負け、弱点を知り、鍛練するしかない』……俺の父さんの口癖……今がまさにそれだ！！！！」

アランは柄になく微笑んだ。

アラ「ふふ……そこまでいうなら……せいぜい抗ってよ？ユウタ！！」

天神の力を受け継ぎしものと死を司る神が軽く試合を試合をしてみること……に……

ユ「ぜえ……ぜえ……てんめ……ぜえ……なん……で……息切れして……
ねえの？……はあ」

アラ「『大嘘つき（オールフィクション）』で”疲れ”と”ダメー
ジ”を無くしたからね……ふふふ」

ユウタは今まで道場だったところで大の字になっている。アランは
ユウタのそばで座っていた。
道場は跡形もない。原型が今までなかったかのようにまっさらであ
る。

アラ「まさかこんなに強いなんて……思わなかったよ？ユウタは強い
んだね？」

ユ「……なあ、”技を消す技”にはどう対処したらいいか……分か
るか？」

アランはユウタの目を見たが、すぐに目を離し、立ち上がった。

アラ「それを含め、今日は話に来ただけ……さすがに君さ……女
性が上半身晒すのは良くないよ？」

ユ「は？」

ユウタは上半身裸になっていて、しかも体つきが女らしいため艶かしい……

ユ「あのな……俺は男だぜ？」

アラ「……そう……／＼少し気にしたら？」

するとユウタはアランに近付き、肩を組んだ。

ユ「あれれ？アラン君は照れてるのかなあ？」

アラ「……噛み殺すよ？／＼」

ユ「ハハハ！まあまあ、話なら家で飯食いながらにしようぜ？アラン！せっかく来たんだしなー！」

アランは苦笑いをした。だが、内心転生者にこんなに興味が沸いたのは初めてだった。

アラ「わかった……不味かったら噛み殺すよ？」

ユ「なゝ…男の一人暮らしバカにするな!!!」

アラ「君は女の子として生きてたら？その方があってるからさ…お邪魔します。」

ユ「なんだとお!!!しかも世帯主より先に入んな!!!」

今日は少し賑やかさがまじたらしい。

続く…

A・S編第6幕「復活と聖騎士（パラディン）ユウタの守護騎士たち」（前

作者「更新遅れて仕舞いました……」

ユウタ「まったく……目を離せばすぐにこれだ……」

サンライズ《いつものことです……》

A・S 編第6幕「復活と聖騎士（パラディン）（ユウタの守護騎士たち）」

（海鳴市 ユウタ宅）

アラ「…普通……」

ユ「人の飯にいちゃもんかよ……」

ユウタとアランは屋内のリビングで夕飯を食べ、ゆったりとしていた。因みに律儀なもんで「…不味くなかったし、片付けはやるよ…」とかいいながら片付けは二人でやっていたりした。（因みに因みに、ユウタとアランの姿が美男美女だったため、なかなか構図となっちゃっていた。）

アラ「それじゃ……本題だね…」

エリリイは僕が生き返らせてあげるよ。」

ユ「!!!???は!?!?」

アランは目を瞑り、語り出す。

アラ「ユウタ……君さ、まさか怒ってんのが一人だけ（・・・）だと思っただかい？」

言っておくけど、あの咲哉とかいう転生者……全ての神々の怒りがかつてるんだよ？エリリイは”幸福と自由の神”と呼ばれていて、かなり上の地位でありながら周りにも気を配れる優しいお姉さんだった……」

ユウタは黙ってアランの言葉に耳を傾ける。

アラ「そんな優しいエリリイを陵辱し、しかも殺害した……赦されないんだよ……あいつは……」

アランはかなり怒り心頭しているせいか、手を握っている。握りすぎて血が滴れて、真っ赤になっていた。

アラ「本当のところ、僕が今すぐに噛み殺したいくらいだけど……今回はユウタ……君がやらないといけない……君は、エリリイが初めて（・・・）転生させた……」

エリリイと同等の力を得る存在だから……」

ユ「エリリイの初めての転生者……俺がか？」

アランは言葉を発せず頷いた。すると……ユウタの顔が少し暗くなっ
た。

ユ「なら……後悔しただろうな……俺、弱いしさ……何を言ってるんだ
い？」「……？」

ユウタの言葉にアランが声を荒げて反論する。

アラ「君は自分自身を見下し過ぎて、逆に実力を出しきれていない
ね？本来、君の実力は僕に匹敵するくらいなんだよ？君はただ、力
を使って傷つけるのが怖いんだよ……使って暴走したらどうしようっ
てね？」

ユ「ああ……俺は力を得たけど……怖いんだよ……誰か仲間を……傷付け
ちやいそつで……不安なんだよ……」

ユウタは大粒の涙で顔を濡らしていた……
いつものアランならば……罵声を浴びせるが、今回はユウタを手伝っ
ている。だから……笑顔で

アラ「だから……神々はユウタを応援する。そのために僕は来たんだ。

「

ユ「……ありがとう……マラン……」

ユウタは涙を拭い、エリリィ復活の話へと移る。

ユ「……んでっどうやるのさ？エリリィ復活。」

アランはびーん……と唸っている。どろぢぢららくつかプランがあるらしい。

アラ「よし、これでいっしょ。」

パチン！！

アランが指を鳴らしたとたんに、頭上に巨大な円陣が現れ……

ズシン！！！！

黒い棺桶が出てきた。

アラ「この中には、エリリイの死体が入っている……今から僕の死神の力を使って復活させるけど……ひとつ、条件がある。」

ガタン……………

棺桶をあけると……………

綺麗な顔をして冷たく横たわるエリリイがいた…

ただ、心臓部分が抉られたか、風穴がぽっかり空いていたが……………

ユウタは泣きそうになりながらも堪えている。

アラ「死神の力を使って復活させるのは良いんだよ。でも、無いもの(……………)を作り直すことはなかなか難しい……………そこで、

ユウタ「エリリイの痛みの6割でいい、引き受けて(……………)くれないかい？そうすれば”痛み”を代価にエリリイを万全の状態で復活させられるよ？」

アランが棺桶からユウタに視線を変える。

ユウタの目からは決意が溢れんばかりにたぎっていた。

ユ「何を言い出すかと思えば……………」

腰まであるウェーブがかった金髪をおろし、三対の純白の翼を広げ、
青い瞳が綺麗な…

ユ「エリ……リイ？」

エリ「はい ユウタ！」

エリリイが膝枕をしていた。

ユ「え……え……エリリイ……！！エリリイだ！ハハ……！！エリリイが復
活したあ……！！」

だきっ！

エリ「あん……ゆ……ユウタさん……」

ユウタはエリリイに抱き付いて…

泣いていた。

ユ「ご…ごめん…ねえ…俺…気づいて…あげられなかつたよお…」

エリ「別にあなたが悪いのでは無いです…また…貴方に…会えました…それだけで…嬉しい…です…／＼／」

きゆ…

エリリイも抱き締め返した。

そして、ユウタとエリリイは二人で飽きるまで泣いた……

泣きに泣いて、ようやく落ち着いた時、ふと気づいた。

ユ「あれ？アランは？」

エリ「あ、アラン君から手紙を預かってるです」

『ユウタへ

エリリイは無事復活したね？こっちとしてはあの屑も噛み殺したかったけど……自分の世界でまた屑が暴れてるらしいから……帰るよ。

技を消す技を倒す方法はエリリイに教えたからね。

じゃあね。

P・S．また遊びに来たときは……本気で噛み殺すよ？せいぜい頑張ってるね？神見習い君？』

ユウタはその手紙を読んで少し元気が出た。

ユ「アラン……いいぜ……お前と次会うまでに……腰抜かすくらい強くなってるじゃんよ！……！」

エリリイ「……ユウタ……復活するためとはいえ……むちゃくちゃです……」

エリリイが俺の胸を指でなぞる。実は、ユウタが引き受けた痛みは”9割”で、まだ抜けきれていないのだ。

ユ「…別にいい……これは…俺の覚悟の証だ！」

エリ「ユウタ……」

ユ「アランは……」ユウタはエリリイと同等の力を得る存在だ”って
言ってた……だからせめて……”これから頑張る！”って証のような
証が欲しくて……お前を……守れなかった戒めもあるし、弱い俺への
気付け薬の役目もあるよ。」

エリリイは……ユウタを優しく抱き締めた……

エリ「無理……しないでくださいね？……心配なんですから……」

耳元でエリリイが呟く。ユウタは顔を赤くして俯いている……

エリ「そこで……私からささやかな……贈り物を……」

ユ「………？」

エリリイは手を前にかざした。すると、ユウタの目の前に巨大な円陣が現れた。

エリ「我は望む…全てを切り裂く剣を……」

我は誓う…全てを見極め、彼の者に勝利を掲げると……

我は願う……晴天の下、全ての者達の平和を……

さあ…集え、聖騎士の猛者達よ……」

すると、円陣から人が現れた。

一人は背が高く、翡翠色の髪をミディアムにしている。顔は整っている。だが、目付きが怖い。

もう一人は青の髪をポニーテールにしている。顔はまだ幼げ。

もう一人…ユウタとまるで瓜二つな感じだった。

その3人はユウタの目の前で膝を付き、頭をおろした…

3人「パラディン」聖騎士、ただいま推参した！」「」

ユウタは驚きで声が出なかった…なぜなら、

3人はユウタの”小説内のキャラクター”なのだから……

すると3人のうち、瓜二つな子が……

？「やっと会えたよ！ユウタ！！！／／」

抱き付き、さらには、

？「あゝ…！神ちゃんずるい…！私も…！ユウタさ〜ん…！」

ポニーテールの子も抱きついてきた。

？「すんまへんなあ…ユウタ…こいつらあなたに会いたいてうるさくてのお…」

翡翠色の子はひどく冷静だったらしい…

続く…

A・S編第7幕「騎士団結成！〜勇気の心、絆の力〜」（前書き）

作者「今回は長めに作りました！〜！〜！ぐだぐだですが見てくださあ
あああい！〜！〜！」

ユウタ「うざい……」

作者「別にいいじゃんよ……」

ユウタ「まあ……いつものだな……」

A・S編第7幕「騎士団結成！〜勇氣の心、絆の力〜」

ユウタ宅

ユ「う……ん？…朝？」

やあ、みんな元気かい？ハッピーかい？エリリイ復活に驚きと嬉しさが込み上げている最中、新たな仲間が加わった御神 ユウタだ。

昨日はエリリイや、後に出てきた人達と談笑してたよ。久しぶりだしね？

いつの間にやら寝ていたらしく…俺はベッドで目が覚めた。
時計…3時？…なるほどね、確かに朝だ。

ユ「さあて……起きよう…か……な？」

あれ？金縛りみたいに動かないな…
因みに知ってるか？金縛りは”頭が寝ている時に体を動かす”からなるんだぜ？

だけどね、何で体が…

エリ「うう……ん……ユウ……タあ……」

動かないか今判明しました。

とりあえず動く首でからだの状態を確認すると……

エリ「うう……ん……」

エリリイが左腕、

？「むにゃむにゃ……」

瓜二つな子が右腕、

？「すう……すう……」

ポニーテールだった子は髪を降ろして右足をホールド。髪長いね……

？「うな……むにゃ……」

翡翠色の髪の子は左足をホールドしていた。

ユ「……………まあ、たまにはいいかな？こつこつ…楽しいことも…」

俺はとりあえず、このホールドをどう解こつかと悩んでいた。

（道場内（AM4：00、三人称））

ユ「……………」

ユウタは道場の真ん中で目を瞑り、剣を構える。居合い抜きで構えてたたずんでいる。

周りには辺り一面竹とわらで作られた的がかなりある。

静まり返った空間……………あるのは木枯らしと鳥のさえずり…

ある一枚の枯れ葉が地面に降りた刹那…

ザアア……

ユウタは構え直し、居合い抜きのまま、体勢を低くする……

ダアン！！！！

ユ「ハアアアアアアアア！！！！」

ザザザザザザザザザザ！！！！！！

ユウタは的に向かって地を蹴った。フローリングがめちゃくちゃになっっている。

ユ「鳴神流剣連撃奥義……」とらかがり「虎箒」！！！！」

ザザザザザザザザザザザザン！！！！！！！！

ユウタの居合いの一太刀が辺りの的を……横風ぎにした。

この鳴神流なるかみじゅうは、ユウタが作った流派で……”気持ちの良し悪しで変わる”がコンセプトな流派である。

ユウタがふと、壁掛け時計に目をやった。

ユ「なるほど……5時か。そろそろ朝飯だな！」

ユウタは切った的を授天力で燃やし、道場を後にした。

リビング、AM6:00

?「ふあゝ……うーん……マスタあ？」

ユウタに瓜二つ（違いは髪の毛の色。ユウタは白+青。この子は水色。）が寝癖がひどい髪をそのままにリビングまで覚束無い足取りで来た。

ユ「お、やっと起きたか！」かみね“神音”“!!”

神「えへへ……おはよう マスター！」

瓜二つな子の名前は東寺 神音。聖騎士の一人、”晴天の将”と呼ばれるリーダー的たち位置らしい。因みに、性別はきちんと女の子です。

ユ「みんなは？」

神「ナハハ…まだ夢うつつだよ…」

ユ「そか あと少して朝飯できつから、ちよつとソファアでくつろいどけ？」

ユウタはフライパンとヘラを持ち、野菜を炒めていた。すると…

むぎゅー！

神「マスタ〜ぬくぬく」

ユ「ちよつ…離れろつてば！！／／／／」

神音はユウタに抱き付いた。因みにユウタが9歳に対し神音は15歳くらい（見た目）なため、ユウタの頭はちよつど女の子特有の膨らみの部分に当たる。

よつて…

ユ「恥ずかしいからやめい！！！！！」

神音「いゝやゝだ」

身長的に負けているユウタは抗えない。

ガスン！！

？「何をしてるん！神音！」

神音「いったあい！！！何すんのさ！！」仙”ちゃん！”

神音の背後には…翡翠色の髪をした子、聖騎士”炎風の剣士”切山
仙が仁王立ちしていた。眼鏡をかけ、関西弁で話す女の子である。

仙「神音え…少しは我慢せえな…マスターは朝ごはん作ってくれて
るんやから…」

神音「はあーい…」

神音はユウタを名残惜しそうに放した。

ユ「ありがとうな、仙。」

仙「主と長をきちんとさせるんもうちの仕事や！任しとき！」

ユ「うん！…そういや、エリリイと”海里”は？」

海里…本名水谷 海里。聖騎士の”真海の槍士”である。藍色の髪をポニーテールにしているのが特徴なんだが…

仙「あそこ見てみ？」

ユ「……………お、いたいた。」

仙が指差している先…ソファーに、仲良く海里と話しているエリリイと海里がいた。海里は瞼が常に重そうな感じだが、すごく活発な女の子だ。

ユ「よし、朝飯できたっど……………仙、運ぶの手伝ってくれねえ？」

仙「朝飯前や！！」

ユ「……………」

朝飯を食べ終わり、今日は学校なため、ユウタは制服に着替えていた。

ユ（…どうすれば…良いんだよ？あいつのデメテルストライクを打ち破るには…）

制服を身に纏い、ユウタは学校へのバスに乗るため家を出た。その際、「服を買っておきなさい」って事で少しお金を渡して行くことを忘れずに…

~~~~~

な「あ、ユウタくん！」

フェ「ユウタ…！」

バス停に行くと、なのはとフェイト（…）がバスを待っていた。



ユ「はれ？フェイト…もしかして…」

フェ「うん…これからよろしく…ね？／／／／」

フェイトはスカート裾を握りながら恥ずかしそうに言った。普通の男子ならイチコロな行動でも…

ユ「おうよ！…よろしくな、フェイト！」

普通に受け流してしまうユウタである。

な「ユウタ君昨日はごめんなさい…訓練誘ってもらって断っちゃって……」

なのはは「自慢のツインテールをふにゃっとさせながら謝る。

ぽふん…

な「ふえ？」

フェ「！」

ユウタは笑顔でなのはの頭を撫でる。なのはは驚き、フェイトは少

しむすつとなった。

ユ「気にしなさんなよ、なのは！仕方ないさ。んな小さなこと考え  
てると老けんぞ？」

な「にゃ！？ほ、本当に！？」

ユ「そうそう……っ！」

ドクン！

な「？どうしたの？ユウタ君？」

ユ「いや、何でもねえよ？（！……？……ちくしょ……9割はさすがに辛  
いな……）」

な「……？」

なのはは無邪気に首をかしげる。可愛いがユウタには今だけはそんな  
余裕がない。無慈悲にもユウタにエリリイ復活に払った代償の”  
痛み”が襲った。さすがに死ぬほど痛い痛みが所々で出るのはちょ  
っときついものがあった。

もちろんなのは達は知らないし、エリリイも知らない。

ユ（そう…これが戒めだ…みんなには心配を掛けてたまるか……ばれる前に…強くなってやる！）

フェ「ユウタ？」

ユ「んお？何だ、フェイト？」

気がつけば、フェイトの顔が目の前にあって少しびっくりした。

フェ「バス来たよ？乗ろう！」

ユ「お、おっ…」

その日の午前中に、4回は心臓の痛みが来た。しかも、授業中の中間辺りに。

ユ（あはは…痛くて寝られない…）

誰か絶対楽しんでんな？さすがにタイミング良すぎだ…（）

更には…その行動だけで…

アリ（あいつが…起きてる？しかも、突っ伏してるとき…

胸を……おさえてる？）

鋭いアリサ・バニングスに、あっさり疑いをかけられていた。

聖祥大学附属小学校、屋上

アリ「ねえ……あんたたち…気がついてた？」

な「ほえ？」

すず「何が？アリサちゃん？」

フェ「…ユウタのことだね？」

只今昼休み……ご飯を食べながら、アリサ、すずか、なのは、フェイトはユウタの奇行について話し合っていた。

アリ「そう…フェイトは薄々気付いていたのね？実はあいつ…

今日、授業中寝てないのよ…」

な、す、フエ「」「へ？」「」

寝ないことが普通です。

アリ「しかも…

あいつがふて寝みたいに突っ伏してるとき、胸を……おさえてたのよ。まるで、胸が痛いと言わんばかりに…」

すず「確かに変だね……そうだ、確か…

私が移動教室のとき、忘れ物して取りに戻ったら…

### 回想

すず「いけない…ノート忘れちゃった！」

タタタ…

?「ぐっ……くそ……ゲホッ！」

すず「!?(誰かいる?)……

あつ！！（…ユウタ君？）

回想終了

って事が…」

な「そんな…ユウタ君…」

フェ「…ユウタ…」

アリ「どうせあいつは自分からは何も言わないわ。なら…」

私たちから聞きに行きましょう！！」

同所、裏の大きい木の下

ユ「ふい〜…あいつらにはばれることはないかもな…多分…」

ユウタは木の下で木にもたれかかっている。額には大粒の汗が滲ん

でいた。ユウタは苦しそうに目を閉じている。

ユ「何であんなにタイミング良く……くそお……おかげさまで授業中寝そびれた……」

？「へえ、何でかしら？」

ユ「何でって……心臓痛くて何でか吐血までするわ……って、あれ？俺、誰と……」

ユウタは謎の声なんなのかわからず、目をあける。すると……目の前には……

アリ「……………」

ユ「……………おおう……やっちゃまった……」

アリサの顔が至近距離にあった。

な、す、フェ「……………ユウタ（君）（？）」「」

ついでになのは、フェイト、すずかの姿もあった。

放課後

ユ「わかった……一から話してやるよ……俺のことをな。今から話すことは他言無用だからな？」

放課後、教室にはアリサ、すずか、なのは、フェイト、ユウタがいた。

ユウタの言葉に耳を傾けながら、みんなは頷く。

アリ（こいつがどんなンでも関係ないわ……なんたって、ユウタは……）

すず（ユウタ君……なら、私も教えないと……ユウタ君限定で……）

な（これで少しはユウタ君に近づけるの！）

フェ（会って間もないけど……ユウタのこと、強さを知りたい！！）

みんなそれぞれ、思いがあるがユウタは……

ユ「まず……」

俺は……一回死んでるんだよ。」



自分をさらけ出した。

ユウタは全てを話した。エリリイや聖騎士等をのぞいて…力のこと、前世のこと…

4人「……そんな……」

ユ「これら全てが事実だ。…だが、俺は…転生者は一人ではなかった。」

な「どうして……？」

ユウタはいつもの口調から急に大人っぽくした。こっちがユウタの素である。

ユ「咲哉……あいつは…確かにこの地球を”物語”、そしてなのは達は”メインキャラ”として…

犯したいらしい。お前らを。」

すず「犯すつて……嫌だよ……」

すずかは不安になり、震えていた。ユウタはすずかに歩み寄り、手を握りしめた。

ユ「安心しな。俺が……あいつから守る盾になるから……!!」

ユウタの顔から子供らしさが抜け、大人っぽくなった。すずかの顔が真っ赤になった。

すず「は…はい／／／／／」

三人「「む…!!」「」」

ユ「もちろんお前らもな！」

三人「うん!!!!／／／／」

しかし、ユウタの顔に影が見えた。

ユ「でもさ、気持ち悪いだろ？別にもう……関わってくれんでも……」

4人「……気持ち悪くない!!!!!!」

ギョツ!!!!!!

ユウタは4人に抱きつかれた。4人の顔には涙が伝っている。

アリ「私たちは……受け入れるわよ……」

すず「ユウタ君は……気持ち悪くはないよ?」

な「ユウタ君は優しく、強くて、かっこいいの／＼／＼」

フェ「何でも言っただけ?聞いてあげられるから……」

ユウタは……嬉しかった……受け入れてくれた……みんなに……そして……

ユ「ありがとう……みんな……」

絆の力を再確認した……

A・S 編第8幕「騎士団結成!!」ユウタのリベンジ」(前書き)

作者「さあ…今回はユウタの仕返しターンです!!」

ユ「あららてがすべった(棒読み)」

サクッ

作者「いたあ!!?手が…手が…手があああ?!

ユウタ「目じゃないし、いつもの仕・返・し?」

A・S 編第8幕「騎士団結成!!」ユウタのリベンジ」

聖祥大学附属小学校、教室

ユ「さて、話は以上だぞ？帰ろう」待ちなさいよ……」「……ぜ？」

日の光が傾き、赤に染まった空が煌めく教室……ユウタはアリサ、す  
ずか、なのは、フェイトの4人に自身の秘密を話した。

しかし帰ろうとしたユウタをアリサが、夕日のように顔を赤く染め  
ながら裾を掴み阻む……

アリ「まだ……あなたが心臓を痛がった理由、聞いてないわよ……」

ユ「まあた妙なところ覚えていやがって……」

な、す、フェ「」「あ!!すっかり忘れてた!!」「」「」

アリ「……はあ……。」

ユ「まあ……その……頑張れ？」

なんだかアリサが無性に可哀想に見えた。どうやら、ユウタの話が印象的過ぎて忘れたいらしい。

ユ「……………戒めさ」

アリサ達はユウタに目を向ける。ユウタは、儂い笑みを浮かべていた。

ユ「仲間を守れなかった戒め……………なんだ。」

アリ「……………あんまり……………ムチャするんじゃないわよ……………」

すず「そつだよ……………ユウタ君……………」

な「一人で背負ったらダメなの！！みんな心配するよ？」

フェ「ユウタ……………溜め込んだじゃダメだよ……………」

暖かい……………ユウタはみんなの一言一言を噛み締めた……………。

ユ「ありがとう……みんな……」

ユウタはみんなに背を向け、歩きながら涙を流した。胸は痛い、その隙間を縫う暖かさを心地よく受けながら……

ところ変わり、時空管理局デバイスルーム

エ「はい！レイジングハートとバルディッシュだよ！この子たちは主想いのデバイスだね！」

な「レイジングハート！」

レ《只今戻りました、マスター！》

フェ「バルディッシュ……また頑張ろうね？」

バル《はい……サーの力になれるのは嬉しいです。》

時空管理局でなのはとフェイトは修理が完了した己の相棒を受け取った。エイミイは二人を温かく見守っていた。

エ「実はね、その子たち……」

ビー！！！！ビー！！！！

な「またヴォルケンリッターさんたちなの！！」

警報の後現れたのは、街中で管理局員を襲うヴィータと…咲哉だった。

エイミイはバツが悪いと言わんばかりに顔をしかめた。

エ「んぐ…！！ぶつつけ本番になっちゃうけど…行ける？なのはちゃんにフェイトちゃん！！」

二人「はい！！！！」

二機《《はい！！！！》》

エ「ならまずは…クロノ君！！！！」

すると、モニターに変化が起きた。上空からナイフが大量に落ちてきている…

クロ「ステインガーレイ…！！」

クロノの技が決まると誰もが思った。しかし、咲哉はわかっていたかのように…





ユ「さあ……リベンジマッチだ!!!」

クロノの前で剣を構えながら、咲哉を見下す、ユウタの姿があった。

海鳴市上空

ユ「大丈夫か？」

ユウタはクロノに目をやる。クロノは少し驚いていたが……一応ユウタを知っているみたいでありあわてていなかった。

クロ「はあ……はあ……ありがとう……しかし、あの技は……？」

ユ「”技殺しの技”デメテルストライク……あれは魔力などの全てを殺す……バリアジャケットも例外じゃない。」

驚いた……技を殺し、技を繰り返す……まさに最強の攻撃である。

ユ「あのヴィータとか言うやつはとりあえず管理局側で……なのは辺りがやってくれるだろうから……咲哉には手を出すなよ……」

あいつは……仲間の仇だ……」

ユウタは剣を居合いの型に構える。クロノはユウタの殺気にくらついたが、なんとか踏ん張りユウタを注意した。

クロ「ユウタ……だったか？なるべく殺しはなした。管理局にいない以上……あまりカバーしきれない……」

ユ「……前向きに検討する……（まあ、殺さなきゃいみないし……実験台になれよ？咲哉！！！！）」

ユウタには今回秘策があった……咲哉のデメテルストライクに対抗できる可能性を秘めるものが……

回想（教室の件のあと、ユウタ家「ユウタサイド」

ユ「身体……強化？」

帰って来てから、俺はエリリイ、神音、仙、海里とこれからの戦闘について話していた。

エリ「はいです。あの子にあげた…いや、盗られたデバイスでは…  
おそらく魔力とかは突破できても身体能力や武器の性能まではキヤ  
ンセル出来ません…」

神音「だ・か・らあ、身体能力強化して、とりあえず翻弄しながら  
牽制して、隙を見てズバンと!!」

仙「授天力を使ってやけど、体内循環やし大丈夫やと思うわ！」

海里「どうする？」

皆は身体能力強化をすれば大丈夫と言うが、正直不安は抜けない。

ユ「…まあ…ダメ元でやって見るか…」

そっぴや…俺の力…【小説の能力の具現化】なら…イケる!!も  
しかしたら…

と…思った矢先…

エリ「こ…この…ねっとりへばりつく気持ち悪さ…ユウタ…咲哉ですう…」

エリリイが震えて弱々しい声で言う。多分…いや確実にトラウマになっただな…あいつ、赦せない！

ユ「とりあえず俺は出る！！聖騎士のみんなはここで待機！！エリリイをなだめててやってくれ。だけど一応、いつでも行けるようにしといて！！！」

神音「りよゝかい！！！」

仙「気いつけてな！！！」

海里「負けるなあ！！！」

三人が応援してくれる…なんかいいな、こづいつの…！

エリ「ユウタ…」

必ず…無事に帰って来て…ですう…！！！！／／／

エリイがうつむきながらも心配してくれる…こんなに優しく、  
力強い神様を……悔しいな……でも……

ユ「任せとけ！……絶対……戻ってくつから……！」

次こそリターンマッチだぜ……！！

回想終了「三人称サイド」

ユ「ハアアアアアアアアアアア……！！……！」

ユウタは授天力を体から放ち、体に密着させるかのように纏わせる。  
そして、効果を示すように……

ズズズズ……

純白の髪の毛が……漆黒に染まっていった。青のメッシュ部分は紅  
蓮の炎の如く赤くなった。

ユ「我が力を……戦を勝ち抜く力へ……！！授天力……」  
戦王哮来<sup>せんおうせうらい</sup>”……！！  
……！！

そして、ユウタの体は紅蓮の授天力を纏い、赤く輝いていた。

咲哉はユウタをみて、小バカにするように嘲笑い、槍を肩に担ぐ。

咲哉「はっ！雑魚がいくら吠えようが……俺には効かねえよ！！！」

「！！」  
ヴィ「そつだそつだ！！！！お前みたいなゴミには負けやしねえよ！！！」

ユ「言つとくが……」

隙だらけだぜ？」

ヴィータと咲哉が気づいた時には、すでに遅かった。

ユウタの手はヴィータと咲哉の懐に入っていた……手には既にサンライズがバージョン”H”に換装されていて、炎が手を包んでいた。

そして…

ドゴオオオオ！！！！！！

バゴオオオオオオオオオオ！！！！！！

ヴィ「ガアアアアアアアアアア！！」

咲「雑魚……の……くせ……にiiiiiiii！！！！！！」

ヴィータと咲哉を吹き飛ばし、ビルに激突した。

ユウタは地上に降り、アスファルトを踏みつけた。アスファルトはまるでかべがへこむかの様に……クレーターを作った。

ユ「さあ……始めようぜ！！！！リターンマッチだ！！！！」

今……海鳴の戦地に……黒き髪の破壊神が降り立った……



続く  
⋮

A・S編から登場する聖騎士やユウタの新能力説明…まさか無限になるのでは-

作者「聖騎士のみんなの説明だよ　ちなみにスリーサイズは…妄想  
してください！そして皆さんの意見を感想に…！！！」

神音「優氣凜々さん！やめてよそんなのお！！！！…私、胸結構  
あるほうなんだよ？／／／／」

ゴチーン！！！！x2

仙、神音「大きいだけじゃ胸じゃ（や）ないやい（で）！！！！」

神音「キユッ……」

名前：御神 ユウタ

言わずもなが主人公。

最近なのは達に自分の過去を話し和解。かなり自分をさらけ出す様になった。

性格は温厚。優しく厳しい兄のような寛大な心と包容力がある。男の娘。

能力：今までと同じ部分は省きます。

○鳴神流 なるかみりゅう

ユウタが確立した、全ての武器に対応する” 想いに左右される” 万能格闘流派。

「誰かを守る」などの正しい想いならより強く、「ただ人を殺したい」などの邪な想いならより弱くなる。

今のところ剣使った” 鳴神流剣技” のみ。力を使わない、身体能力重視の流派。

技：

【乱時雨 みだれしぐれ】

抜刀術。縦に薙ぐ様に剣を目に見えない位速く振り抜き、前の障害に” 雨に打たれるくらいに多すぎる” 斬撃を繰り返す。

いくらかバリエーションもあり、” 煌” くわう ” 舞椿” まいつばき ” 轟” こう 等があるが、出たときに随時紹介しよう。

【虎簀とらしかがし】

抜刀術。横に剣を振り抜く居合い術。目の前だけではなく、振った速さ、範囲によって威力、範囲が変わる。乱時雨との連続奥義として使うことが多い。

【万象輪廻ばんしょうりんね】

音速を越え、光速の境地に至ったユウタの究極絶技。光速の踏み込み、光速の斬撃により”まるで鎌鼬にやられた”と錯覚させる。光速の境地に入るため、使用後の反動として1週間くらい寝込む。

○身体能力強化”王臨おうりん”

ユウタの身体を授天力と氣で強化する、ユウタの隠し技。使う能力により髪の毛の色、肌の色が変わる。

【戦王哮来せんおうせうらい】

ユウタの最低ランクの強化。髪は漆黒に染まり、メッシュ部分は紅蓮に染まる。倍率で表すなら約1.5倍くらい。しかし、1.5倍といっても”前世での最盛期”の1.5倍なので、かなり強くなる。

【鍊王凱哮れんおうがいせう】

ユウタの中ランクの強化一つ目。システム的には戦王哮来と同じ。髪の毛の色が完全な漆黒になり、メッシュ部分が無くなる。強化倍率は2倍。（戦王哮来の上乗せにより3.5倍になることも可能）

## 聖騎士のメンバー紹介

名前：東寺ひがしでら 神音かみね

年齢：15歳

性別：女

身長：149センチ

体重：女の子に聞かないんだよ／／  
称号：聖騎士”晴天の将”

詳細：ユウタを守るために生まれた”拳”を司る聖騎士。格闘技が得意。ユウタと瓜二つな顔をしていて、違うのは性別、年齢、髪の毛の色くらいである。

性格は天然。なんとものほんとしているが、将らしく意志がはっきりとしていて他の聖騎士を指揮している。

戦闘については、ユウタのバージョン”H”を司るために、バージョン”H”を参考。

好きなもの／こと：

ユウタ、和風、甘味／鍛練、ユウタと過ごすのんびりお茶タイム

嫌いなもの／こと：

ユウタを傷つけるもの、悪逆非道／他の男に体を触られること

特殊能力：授天力超覚醒能力アルティメッター  
授天力を覚醒させ、爆発的な力を発揮する。まず、これをやらせる前になんとかしなければ相手にとっての積みである。音速の拳撃、炎の砲撃の餌食になってしまつからである。

名前：切山きりやま 仙せん

年齢：15歳

性別：女

身長：156センチ

体重：… たたつきるで？

称号：聖騎士”炎風の剣士”

詳細：ユウタを守るために生まれた”剣”を司る聖騎士。剣技を極めるために日々精進している。関西弁で話すが意外とシャイな一面を見せる。ユウタを”主ぬし”と呼び、神音を普通に呼んだり”長おさ”と呼んだりする。

戦闘については、バージョン”K”に依存するため割愛。

好きなもの／こと：

ユウタ、座禅、小動物／ユウタとの打ち合い、長風呂

嫌いなもの／こと：  
ユウタを傷つけるもの／覗き（ユウタはいいらしいが、本人は嫌がる）、ユウタを傷つけること

特殊能力：多重属性付加能力<sup>モア・エレメント</sup>

複数の属性を操れる。主に増幅し合う属性を好み、炎、風、雷を組み合わせる。

仙は自分の剣を信じるため、これくらいがちょうどいいらしい。

名前：水谷<sup>みずたに</sup> 海里<sup>かいり</sup>

年齢：15歳

性別：女

身長：138センチ

体重：…串刺し…

称号：聖騎士”真海の槍士”

詳細：ユウタを守るために生まれた聖騎士。槍を杖にしたり薙刀にしたり多彩な戦術を使い分け、簡単な治療もできる。  
髪の毛はロングヘアで深い藍色をしている。いつもポニーテールにしている。目が常に重そうだがそれが正常。かなり幼児体型。

性格は天真爛漫。かなり無邪気な海里だが、甘えん坊なのがたまにきず。ユウタを”ユウちゃん”と呼ぶ。

好きなもの／こと：

ユウタ、甘味、遊び／ユウタが髪の毛を洗ってくれること、ユウタの膝枕

嫌いなもの／こと：

ユウタを傷つけるもの／お化け、ホラー、ユウタを傷つけること

特殊能力：思考同時展開能力

通常のマルチタスクは2～3の情報しか把握出来ないが、海里は50～70の情報を整理、分析、予測出来て、それが射撃だったり砲撃だったりの正確性をあげている。しかもこれのお陰で砲撃もトリッキーに動かせる。軍師向け。

海里が依存しているユウタの新バージョン”M”

バージョン”M”

”遠距離砲撃特化”のバージョン。防御、補助も出来るが、その分戦闘能力がいくぶんか落ちる。

【ランスフォーム】

槍のようには見えない杖を使う。授天力を纏わせることにより、刃を形成する。

技：水泡閃

すいほうせん



水の塊を形成、そのまま投げてもよし、設置して起爆するもよしの技。多彩な戦術に使える。装填無し〜3発技

水泡壁  
すいほうへき

水泡閃の防御版。装填により強度、範囲が変わる。

装填1〜二重装填2発まで。

剛海斬刃  
ごうかいざんば

授天力で巨大な刃を作り振り落とす、まさに豪快な技。二つあるうち一つ目の打撃技。二重装填1発技

鋭海突閃  
えいかいとっせん

授天力で三ツ又の槍を作り、突撃する。二つあるうち二つ目の打撃技。二重装填2発技

海王竜閃牙  
かいおうりゅうせんが

授天力で作った竜を相手に飛ばす。バージョン”M”では最高攻撃で、一又竜、八又大蛇、百又龍とがある。二重装填1発、2発、最終装填技。

A・S編から登場する聖騎士やユウタの新能力説明…まさか無限になるのでは-

オマケ

神音「ん？

またブラが合わないよ…」

仙「なんなんやねん！その成長！？うちにも分けて！！！！」

神音「なら…ほい！！」

仙「…なんで胸を差し出すん？」

神音「吸えば大きくなる成分分けれるか「この小説をあぶない読み物にする気か！！？」むう……ならマスターに吸って揉んで「バカちん！！！！／／／／」キュ〜……こんなんぱっかりにや〜…」

仙「…ん？…主……主ー！！！！うちね…

胸をおつきくしたいからうちの吸って揉んで「頭冷やせ!!!」  
／「キュ」……」

ユウタ「ったく……／／／」

キュ……

ユウタ「……まさか？」

海里「…私も、おつきくなりたいのお」

ゴチーン

海里「うな」……」

ユウタ「はあ……もうやだ……」

A・S編第9幕「騎士団結成!」〜闇夜に煌めく十字、雨中の悟り〜 (前書き)

優氣凛々「長くなった……なんかノリと勢いで書いたけど…大丈夫かな?」

ユウタ「まあいいんじゃない?たのしけりゃモーマンタイだ!」

神音「もう!!!マスター!?!早く神音の胸を「またか!!!!!!」にや〜……」

A・S 編第9幕「騎士団結成！〜闇夜に煌めく十字、雨中の悟り〜」

???

？「くはははは……これで俺は最強になれる……あいつらの技……癖……  
全てが俺の手に……！」

常闇の中、少年は猟奇的な笑みを浮かべていた。

？「しかし……かなり手こずったな……」

？「ぐ……貴様……これが目的か……！」

少年が振り返ると……白銀の髪をおろし、異形の十字架に縛られた  
女性が少年をにらんでいた。女性の体はボロボロになり、アザが何  
個もあつた。息も荒い。

？「ああ……あのくそ忌々しい転生者……ユウタ（……）だったか  
？あいつを葬るために……」

だから……お前も……エリリイ（……）みたいに……よがって死ね  
よ？



ギユイイイイイイイイ!!!!!!

咲哉の槍に魔力が纏い、捻れ、回転しはじめた…

咲「アブソリユートオオオオオ…ツイスタアアアアアアアアアアア  
!!!!!!」

咲哉はユウタに突っ込む。その回旋力は前の比ではない。

しかし、ユウタは何故か居合いの形から立ち止まり、目を閉じていた。

ユ（集中しろ…あいつを…あいつを切り刻むことを…考える…  
…）

咲「死いいいいいねええええええええ!!!!!!」

ユウタにアブソリユートツイスターが迫っていく…

あと少しでユウタにぶつかるところで、ユウタは動いた。

ユ「っ！！！！」

ユウタは瞬間的に体勢を低くし…

ダアアアアアアアン！！！！

地面を蹴った。

咲「な……に！！！！？？」

咲哉には予想外だったらしく、アブソリュートツイスターは方向を変えられない…

ユウタは咲哉の懐に潜り…思い浮かべる。

咲哉の体に余すことなくきずをつけることを…  
まるで、空に舞う…無数の椿の花弁のように…

ユ「喰らえ……鳴神流剣奥義……”舞椿”！！！！！！！」

ズバアアアアアアアアアアアアン！！！！





剣を振るった。すると、衝撃波が生まれて周りに波が伝わるかのよう  
に迫り来る。

咲「そんなものオオオオオ!!!」

咲哉はデメテルストライクを衝撃波に向けたが……

バチイイイイイイン!!!!!!

槍が…弾かれた。

咲「な……そんな……」

ユ「それはただの（・・・）衝撃波だ。お前のデメテルストライク  
じゃ……」

止まらない…止められない!!!」

ズバアアアアアアア!!!!!!



海鳴市上空

な「きゃー！！じ……十字架なの……！！」

フェ「あの十字架……まさかユウタが！？」

レ《生体反応確認！！ユウタ様です！！！！》

バル《あと一名誰かは分かりませんが生体反応！！》

なのはとフェイトはいきなり現れた十字架に驚いていた。

ザフ「まずい！あつちには咲哉はともかく、ヴィータが！！シグナム……！！」

シ「わかっている……！！ヴィータアアアアアアアアアアアア……！！」

パワーシャツを身につけた青年ザフィーラと、赤紫の髪をポニーテールにしたシグナムが十字架に向かい飛んで行った。

な「あ！！待ってなの！！」

フェ「なのは！！！！」

なのはとフェイトも、十字架に向かい飛んで行った。

### 市街地

ヴィ「お前！！！！何で……何で咲哉を！！！！咲哉を殺した！！！！答えろ！！！！」

ユウタのバリアジャケットの襟をつかみ、ヴィータはユウタを壁に叩きつけた。

ユ「あいつは……俺の恩人の仇だから……で？こたえたぞ？それがどうした？」

ユウタはあくまでも冷静に答えた。ユウタにとっていまここにいた（……………）咲哉を殺したところで何の感情も抱かない。

ヴィ「それがどうした？だとオオオオオ！！？ふざけんな！！咲哉は……咲哉は人殺しなんてしない（……………）！！優しく強い……私の大切な……何が”大切な”だ！！！！」きや！！！！」

ズガアアアアン！！！！

ヴィータを壁に押し付ける。しかも、まだ”戦王哮来”を解いていないお陰で、かなりの力が入り、壁を穿つ。

ヴィ「うぐ……」

痛がるヴィータに顔を近づけた。ヴィータは驚いて目を見開いた。

ユ「てめえ……さっきから咲哉咲哉って……そんなに大切なら……」

てめえは……!!何で……!!その”大切な”咲哉の表面しか見ねえんだ……!!答える……!!」

ヴィ「お……表？」

ユウタはヴィータが騙されていることすらわかっていないことに怒りが込み上げた。

ユ「お前は……!!ぱつと現れた男をただ”優しい”だの”強い”だので信じたのか……!!はっ……!!お気楽でよろしいなあ、え、え……!!？」

”人の本心”を見ずにみすみす騙されて……好きに成りました？馬鹿馬鹿しい……!!んなもん捨てられんに決まってる……!!……!!

お前は……!!どこまで咲哉を見た……!!」

辺りは雨が強くなっていく。しかし、ユウタの声は市街地全体に広がっている。

ヴィータは…ユウタの言葉を聞いて、ただたどしく答えた。

ヴィ「優しくくて……強くて……あれ？…あ……あたし…咲哉にそれしか……」

ユ「言わんこつちやねえ！！！！馬鹿かお前は！！！！あいつは…あいつは転生者と呼ばれ、お前等を手玉にとつてハーレムを作りたいんだとよ！！！！良かったなあ！？悲しい犠牲者第1号だなあ！！！！」

ヴィ「そんな……じゃあ…わたしに言った言葉は……？」

ヴィータは傷付いた。あんなに優しくしてくれて、強い人に惹かれて添い遂げようとも考えたのに、相手には、

ただの道具としてしか思われていなかったのだから……  
すると……

ユ「馬鹿が……」

ぎゅ……

ヴィ「な……馬鹿！！はな「別に信用得ようとか、お前を利用しよ

うだなんて思っちゃいねえよ」「……！！！！」

ユ「今は泣け……騙されて……汚されて……今思えば、お前は一生懸命、愛していたんだな……」

だが、相手が悪かった……ただそれだけだろ？騙されちまったのは仕方ねえ……

人生なんてそんなものだ。きちんと見極めて……信用出来るやつを探せばいいさ……

敵とか云々は関係ねえよ……今は、一人の悩める人間と、聞いてやってる人間ってだけだ。」

ヴィ「う……う……う……」

ユ「それに……あいつは……しぶと過ぎだな……」

まだ”どこかで”生きてやがんぞ？」

ヴィ「……！！……？？」

ユ「斬ってわかった……あれはあいつの分身……本体は……おそろくどこかで力を蓄えてる……」



ヴィータはユウタの言葉に顔を上げた。ユウタと目が合う。赤と金の瞳は澄んでいて、意志がはっきりしていた。

騙されていたことを考えたら、急に怖くなって、体が震えた。

ぎゅうううう…

ユウタは抱きしめる力を強くした。

ユウタだから…気持ちを整理する意味を込めて…泣いとけ…思う存分な…

吹っ切って、人を見る目を養って…二度と失敗しないように…な？あいつの顔を…そのハンマーでぶっ叩いてやれよ。」

ヴィータはユウタの暖かさが心地よく感じた。

今のヴィータにならわかる…

ヴィ（こいつ…敵なのに…心配してくれてる…）

ユウタが…心の底から心配してくれていることを…

ヴィゅうううううううう…

うわあああああああ！！わたし…ったし！！あんなに好きだったのに…愛していたのに！！騙されて…たのかよおおお！…！ごめんなさい！！ごめんなあああああ！！！！」

ユ「まったく…世の中つてなあ…上手くいかねえ…なあ？」

ユウタはヴィータから目を放し、さっきから近くで見ていた仲間らしき3人と、なのは、フェイトに目を移した。

「しばらくお待ち下さい」

シ「…済まなかった…」

赤紫の髪をポニーテールにしたシグナムがユウタに頭を下げた。

ユ「なにがだよ？俺、なんかしたか？」

シ「ヴィータを…忌々しい咲哉から救ってくれたことだ。」

ヴィータはザフィーラにせおわれている。

ユウタはシグナムに背を向けながら答えた。

ユ「別に……結果的に……まだあいつは殺れてねえからな……

まあ、だいたい隠れ家は検討済みだが。」

な「え！？ユウタ君わかるの！？」

フェ「どこに！？」

なのは、フェイトは驚いて、さらに見えないが……管理局側も驚いていた。

ユ「そこだ……

その金髪姉ちゃんの持つてる魔導書……そこに咲哉の気配がピンピンすんだよ……」

指を指した先……そこには闇の書があった。

シ「しかし……我々は闇の書を……完全させなければ……」

シグナムの目には、かなりの熱い思いがあつた。本当に望んでいる。そんな目だつた。

ユ「ふうん……わかつた。なら今回は見逃すから早く逃げな？」

ユウタの発言に待つたをかける人は誰も……

クロ「ふざけるな!!! そいつらは重要参考人だ!!! 管理局として……」

いました……

ユウタはクロノを殺気を込めてにらむ。その殺気はクロノだけでなく、周りにまで及び……

ユ「そう……なら……（いいぞ来ても……）」

いつの間にか……

クロノは槍を突き付けられ、



するとシグナムがまたユウタの目の前に立った。

シ「お前とはいずれぶつかり合うだろう……そのときは……」

ユ「真剣勝負……だろ？」

シグナムはふつと笑みをこぼし、転送準備に入った。  
そして、ヴィータがその間に目を覚まし……

ヴィ「おい！！！！／／／」

ユ「ん？」

ヴィ「私は鉄槌の騎士ヴィータ！！お前は！？／／」

ユ「御神 ユウタ……この3人の主だ。」

ヴィ「ユウタ！！！！」

ありがとう……！」

そういつて…シグナムたちは転移していった

降り続いた雨は、すでに上がっていた…

???

リ「く……ユウタとやら……聞こえるなら……」

リインフォースは十字架に磔になりながら、弱々しいこえで呟いていた。咲哉の暴力により、体がボロボロになっていた。

リ「わたしを…主はやてを……助けてくだ…さい……」

常闇に哀しき白銀の女の弱々しい救難信号が虚しく響いていた…

A・S編第10幕「騎士団結成!〜晴天の将の想い〜」(前書き)

優氣凜々「ようやく……騎士団編終わらせられた……」

ユウタ「こんの駄作者アアアアアアアアアアアアアア!?!?!なにやら  
すかアアアアアアアアアアアアアア!?!?!」

優氣凜々「ははは!ひがむなひがむ」…灰にされるか「まじごめ  
んなさいもうやらない……からさ?」

ユウタ「手が滑ったっちゃ」

ゴチーン

優氣凜々「いたああああい!?!?!」



A・S 編第10幕「騎士団結成！〜晴天の将の想い〜」

ユウタ家、道場

神音「……………守られっぱなしなのは……………ダメだよね？」

道場の真ん中で…神音が佇んでいた。ユウタを守るために…生まれ  
たのに……………役に立てているのか？ユウタが傷付いているなか…安全  
な場所にいるボクたちは…

神音「…守り…たい……………」

マスターが……………ユウタが…好きだから…  
痛がる姿は……………見たくないよお……………」

早朝4時、道場

ユ「お？神音？珍しいな！朝早いなんて……………」

ユウタは何時もの早朝練習をするために道場を訪れた。道場には既に神音がいた。

もうこちらでは冬、かなりさむい。  
そんななか…神音は武装を施してあり、体から蒸気が上がっていて、既に体を動かしたあとだろうと思わせる。

神音「マスター……………」

ユ「ん？どうした…………？」

ユウタは道場に漂う異様な…悲しいような空気に黙りこんでしまっ  
た…

神音「マスター…何で一人で傷つくの？」

何でボクたちを使ってくれないの？

ボクたち…役立たずかな…？」

ユ「な！？そんな訳ないだろ！！俺は「なら…！！」「…！！！」

神音は止まらない…

この想いを…受け止めて欲しいから…

神音「ボクたちも…闘わせて！」

あなたを守りたいの！！ただただ傷付いていくマスター…ユウタを…ボクは見たくない！！！！

ボクを生んでくれた…大切な男ひとだから…

あなたの背中を…任せて欲しいの…」

神音の顔には大粒の涙が流れている。

神音「だから…ユウタ…」

ボクと…勝負してよ…別に勝ち負けなんて気にしない…  
ボクを…貴方の目で見極めて…あなたを…貴方の背中を預けるに値  
するか！！！！」

ユ「……………」

神音の独白をただ聞いていた。

知らなかった…ユウタは…守りたい人が増えて…嬉しかったが…  
…彼女にとっての”幸せ”ではなかったらしい…

ユ「それが…神音の”幸せ”…なのか？」

彼女は首を縦に降った

ユ「わかった……だけど勝負は勝負だ！……本気で行かせてもらおうぜ！……！」

神音「ユウタ……！！……うん！！望むところだよ……！」

ユ、神「お前（君）を俺ボクの力でボコボコにしてやんよ……！！……！」

朝、6時

ズウウウウン……ズウウウウウウウウウン……！！

仙「ううん……なんのこっちゃ？」

海里「……う……う……るさいのさ……！」

朝、異様な振動によって仙と海里は目覚めた……。ちなみにエリリイはというと……

エリ「ふみゅううう……zzz……！」

熟睡中でした……



ああああ！！！！！」

同じく上半身がさらけ出され、ボロボロになっているユウタが……。髪が漆黒に染まっている所から”錬王凱哮”を使っているらしい。

ガシユン！ガシユン！ガシユン！ガシユン！ガシユン！ガシユン！

サンライトに装填が両手に3発、最終装填が施される。

両者の周囲に…巨大な炎球が漂う。しかも一個ならまだしも……5個もある。

仙と海里は…嫌な予感をひしひし感じていた。

仙、海里「ま…まさか……」

神音「我が焰よ！！悪を穿つ太陽となりて罪を滅せよ！！！！」

ユウタ「最終装填……龍星破群…の打撃版……」



神音「面目無い……でも、ボク不安で……」

あのあと仙と海里は神音とユウタを問い詰めたが、あまりにも二人が真剣だったため不問（道場の片付けはやれ）になった。

とりあえず、今は神音を海里が回復させている。ユウタは「別にたいた傷じゃないし、ほっときゃ治るさ」と、意外に元気に自室に入って行った。

仙「…あれ？主は学校行かへんの？」

神音「今日くらいサボっても大丈夫だい！！！！って言ってたよ？」

凛々 学校にはきちんと行くこう！！お兄さんとの…約束だよ BY優氣

神音「それに…大事な話があるんだって！」

海里「ふうん…で、かみちゃん？いったいいつの間になんか？」

神音「ボクたちは心が繋がってる……キヤ」



…実際は戦いの最中にユウタが口にしていました。

### ユウタ家リビング

バン!! x 5

神音達がリビングに降りてくるとテーブルにはまるでバン!!とかいう擬音が出てきそうな感じでビニールが置いてあった。

ビニールに包まれていて、神音達の名前が書かれている。

ユ「やっと来たな!! 待ってたぞ!!」

ユウタはテーブルに座っていた。横にはエリリィがニコニコしながら座っている。

神音「マスター? なにこのビニール……名前書いてあるし?」

ユ「まあまあ座りなさいな……これから話すから。あと神音? 呼び方は別に気にしてないからな?」

神音「あうううう… / / / / /」

ユウタが真剣な眼差しで言ったのが効いたのか、神音はみるみる顔を真っ赤にする。

とりあえず、みんな着席した。

ユウ「うっし…：…ならみんな、自分の名前が書いてあるビニール袋を取って開けてみな？」

がさがさ…

神音「？」

仙「ん？」

神音「う？」

エリ「服…ですかぁ？」

ビニール袋の中には…

黒を基調にした服が入っていた。みんな共通したデザインで、黒の基調に赤のラインで縁取られ、背中には開いた翼をイメージしたエンブレムが掲げられていた。

しかし、個人的に見てみると、服のデザインは一緒だが、服の種類

が違つ。

神音のは丈が短い長袖のジャケットと同じデザインのホットパンツに、白いハチマキとグローブが。

仙のはロングコートとパンツ、新しい刀を納めるためのベルトが。

海里のはフリルがついているスカートとミディアム丈のジャケット（袖フリル）、海里の武器「ポセイディア」の改良型が。

エリリイのはロングスカートにミディアム丈の七分丈ジャケット、羽の装飾の腕輪が。

神音「マス……ユウタ…これは？」

海里「うわ〜！…可愛い！！」

仙「かつこええ！…でも、何でや？」

エリ「腕輪…ですか？しかもこれ、軍服みたいですよ…」

するとユウタが真剣な目になったため、みんなは黙った。

ユ「ああ、エリリイの見解で間違いはない。それは…」

俺が今まさに、作りたいと思っている組織の…団服だ。」

神音「……え？」

みんなは目を見開き驚いた。当たり前だ。組織を作りたいなんて9歳は普通思わない。

ユ「そうすれば…神音の問題も解決する。」

神音「え？私の？」

ユ「そう……俺はみんなを”守る対象”としか考えていなかった……

だけど、みんなは…俺を”守る”ために生まれてきてくれた……こんな……自分勝手な俺を……」

仙「な……！！別に主は自分勝手なんか「自分勝手なんだよ！！……俺は……」……主……」

ユウタは目に涙を溜め込んでいた。

ユ「俺は……自分の力を……自分のためにしか……使えてねえ……  
エリリイの敵討ちもそう……俺の独りよがりだ……」

だから俺は！！この力を……” 助けるため” に使いたい！！！

俺の我が儘だったのは百も承知だ！！だけど……だけど……

みんなを…仲間を…友達を……” 守るために” …力を……貸してくれないか？」

エリ（ユウタ……初めてあった時より……強く、優しくなったですう……これなら……）

ユウタは涙を落とし、みんなに頭を下げた。すると…

ギョ……

神音「ユウタ……」

ギョ……

仙「主……」

ギョ……

海里「ゆづちゃん……」

ユ「……みんな……」

神音「貸すもなにも……ボクたちからもお願いするよ……」

ボクたちの力を……存分に使ってください……」

仙「かつこええ……主……主のその粹な心構え……受け止めたる……！！」

海里「これでゆうちゃんと……思いつきり戦えるよ……！！」

ユ「……エリリイ？」

ユウタはエリリイを見た。エリリイはニコニコしたまま、団服を抱き締めている。

エリ「ユウタ……私、神界に帰るですう……！！」

ユ「……え？……そうか……」

ユウタが暗い顔をした。しかし、エリリイは続ける。

エリ「私は曲がりなりにも神様……優遇は許されないう……！！」

だから私、この団体の支部を神界に作ってみるですう」

エリリイ以外「……は？」「」「」

さすがのユウタもすつとぼけた顔にならざるを得なかった。

エリ「こんなに素晴らしい団体は広めなければ！！天照にもゼウスお姉さんにも話して、神界からもサポートするですう！！」

私も…この団体の一員ですから！！！！」

ユ「は……ははは！そうだぜエリリイ！！！！」

俺らは、たとえ神様だろうが…もう”仲間”だからな！！！！」

しばらく、ユウタ家に笑い声が響いていた。

エリ「して、この団体の名前はなんですか？」

ユ「みんなを助ける……救いの騎士……騎士団ナイツだ！！！！」

夜…ユウタ家

エリ「では…ユウタ、私、神界に帰ります…ね。」

ユ「…ああ…」

海里「エリリイさん…」

神音「エリリイ…元気だね…!」

仙「達者でな…エリリイ…」

エリリイは神界にかえってしまったため、みんなで送っている。準備はできていて、空間が裂け、中から神々しい光が漏れていた。

エリ「ユウタ…頑張ってください!!応援します!!」

ユ「ありがとうな!!エリリ…」

ユウタは動けない…エリリイの顔が異様に近くて、唇に温かい感触が…

エリ「ん…ちゅ…んは…んん…」



ユ「ん!?!? ちゃ…………え…りりい!?!? ちゅ…………」

神、海、仙「……な……!!?!??!?」「……」

エリ「ぷはぁ…………ユウタ……ごちそうさまですう / / / /」

ユ「ぷはぁ…………は!?! / / / /」

エリリイは上機嫌で空間に入って行った…

エリ「それじゃぁ…………またな〜ですう」

そしてエリリイは帰っていった…

全員「……」はぁぁぁあ!?!?!??!?」「……」

まったく問題児なエリリイでした……

A・S 編第10幕「騎士団結成!〜晴天の将の想い〜」(後書き)

おまけ

神音「ねえ〜ユウタあ…////」

仙「ぬ…主…//」

海里「ゆうちやあああん////」

ギギギギギギ……

ユウタ「な…ナンドスカ?」

3人「」「ボク(うち)(私)もキスウウウ!!!////」

ユウタ「? ¥@ @# ÷&!?!?!よるなあああ!?!あれは  
不意討ちだあああああ!?!」

A・S編第11幕「邪神覚醒〜騎士団の実力〜」（前書き）

優氣凛々「か…書いてて自分が興奮してしまった…!!…!!…やっべ…  
キタ (> <) …!!…!!」

ユウタ「お前なあ…どうせ明日の埋め合わせだろうが…」

優氣凛々「ばっ…お前なあ!!…かなりキングダムゾンした気がし  
なくもないが…ヤバイだろ!?!このシチュエーションは…!!…!!」

ユウタ「鼻息荒い…キメエ…」

優氣凛々「むう…(=) (=)」

A・S編第11幕「邪神覚醒〜騎士団の実力〜」

海鳴市市街地（翠屋付近）

よっ！！名もなき転生者から騎士団にランクアップした御神 ヌウ  
タだぜ！

今日はクリスマスイブ……え？それまで何してたかって？

俺の家を騎士団海鳴支部に仕上げてたぞ？機材とか色々運んだりしてたからな……おかげさまで管理局泣き泣きなプログラムと機材になったぜ！！因みに「騎士団神界支部ができた」って通信がエリリの部下の”プリンシバリティ”さんからきたんだ。やったぜ！

んで、今日はクリスマスイブだってんで……あの3人にケーキでも……  
って思ってたよ！！日頃の感謝を込めてな！！

桃子「いらっしやいま……あああ！！ユウタ君髪切っちゃったの！！??？」

ユ「桃子さん……これはケジメなんで！！！」

桃子「……あ、そつだ！ユウタ君、頼まれてくれないかしら？」



神音「…で、なのはにそれを渡すの？」

海里「ゆうちゃん、それだけなの？それだけなのに…」

仙「どうしてうちらまでなん？騎士団総出やし、団服つけてるし…」

ユウタは”病院にサプライズ訪問しているなのはにケーキを届ける”ために神音、海里、仙と行動している。しかも、騎士団の団服を着せて。ユウタはなぜか浮かない、しかも、なにかを警戒しているような顔をしている。

ユ「さつきから奇妙な気が漂ってる……しかも、病院に近づくに連れてそれもだんだん増す一方だ…だから騎士団総出で、何かあった時のカバーをな……」

ユウタが言っていたので、少し集中し出す海里。海里は名前の如水属性。しかも思考同時展開能力を使えばある程度の分析ができる。

海里「……ゆうちゃん、かみちゃん、せんせん？病院に濃密な魔力の塊を発見……なのはとかフェイト、クロノ、アルフ、ユーノの反応あるよ？」

-----

- - - - -

？「……また…破壊を…もたらすのか…私は…」

病院が崩れ、その中枢には白銀の髪をなびかせた女性が膨大な魔力を放っていた。

なのは「はやて…ちゃん？」

フェイ「闇の書が……覚醒した!!」

なのはとフェイトが驚いていると、女性は手を空高く上げた。

闇の書「逃がさん…爆ぜろ、デアボリック・エミッション……」

？（くくく……はやてが寝ている……幼女……」

もはやはやては俺の人質!!!ユウタは…殺す!!!)

- - - - -

ユウタたちは病院に向かって歩いている。しかし、急に歩行者が…消えた。

騎士団「「「な!!!」「」「」」

ユウタ「ちい………結界か……!!」

神音「ユウタ………なんか病院から禍々しい魔力を感じる!!!」

海里「ゆうちゃん、魔力の塊がチャージ開始!!!でかいの打たれるよ!……!」

仙「主………どうします?」

ユウタは苦虫を噛んだような顔になった。みんなの顔も優れない…

何故なら、この魔力に覚えがあるからだ。

そう、ユウタの仇敵の咲哉だ…

ユウタ「授天力を展開して病院へ!!!その攻撃を防いで…その根源



を……潰すぞ！……騎士団総出の初仕事……やるぞ……！」

3人「……了解……！」

ダアン！！ダアン！！ダアン！！ダアン！！

ユウタたちは地面を蹴り、空を駆ける。

海里「ポセイディア……展開だよ……！」

海里は自分の相棒の槍、ポセイディアを呼び、藍色の授天力を纏う。

仙「行くで……緋乃柄……風切……！」

仙は自分の得物、赤い刃の緋乃柄、翠の刃の風切を展開。朱と翠の授天力を纏う。

神音「アルティメッター授天力超覚醒能力……発……動……！！……！」

神音は武器がない。ユウタからもらったグローブをはめ、アルティメッターを発動。金色の授天力を纏い、金色の翼を生やした。

ユウタ「サンライト……バージョン”H”でセットアップだ……！！……！」

サン「久々にしゃべりましたが……やりましょうマスター……！バ  
ージョン”H”……雪辱戦です……！」

ユウタは「バージョン”H”を展開……そして……」

ユウタ「王臨”……戦王哮来……！」

ユウタの髪は漆黒に紅蓮のメッシュとなり、騎士団総出で魔力をたどり、現地に向かった。

.....

### 神界、騎士団支部

エリ「地上の様子は……！」

プリン「闇の波長確認……！あの……あなたを殺めた転生者と同じ波長です……！」

通信係の天使、プリンシバリティが告げた。

騎士団支部は騒然としていた。仮にも神を殺めた男……警戒に越したことはない。

エリ「くっ……あの男です……部隊の方は……！」

プリン「只今調整中……！！！！」

エリリイ支部長！！！！授天力の波長確認！！！！……東寺元帥、切山元帥、水谷元帥……お……御神統帥！！？騎士団最高勢力が闇の波長に接近中！！！！」

支部に激震が走った。ユウタは立案者として、統帥の地位に立ち、神音ら聖騎士は元帥となっている。聖騎士のことを”三大元帥”と呼び、神界でも尊敬の的。そんな人達の登場に支部は安堵の空気がなった。

しかし、エリリイは声を張り上げた。

エリ「支部の皆聞け！！！！火力があれど、回復と防御がままならない御神統帥らを誰が！！！！守ると言うのだ！！！！」

大至急防御要員を集めよ！！！！我々の長が身を挺しているのだ！！！！」

支部「了解です！！！！」「防御班聞こえるか！！！！」「回復要員急げ！！！！」

エリ「ユウタ……待っててですう！！！！」

病院

闇の書「デアボリック・エミッション……」

なのは「ふえ〜!? 広範囲なの!?!」

ユ一ノ「広範囲殲滅魔法!? あんなのまともに食らったら……」

フェ「一旦離れよう!?!」

なのは「私たちは、デアボリック・エミッションに当たらない範囲まで下がるうとした。しかし……」

闇の書「遅い……滅せよ……」

運命は残酷に、闇の魔法が放たれんとした……

ユ、神「コロナア……バースト!?!?!」

海里「水…泡…閃!?!」

仙「火鳥……風輪!?!?!」



4人の戦士が…煙を薙ぎ払い、闇に向かい牙を剥いた

続く…

A・S編第12幕「邪神覚醒」やつは余計なものを……」(前書き)

優氣凛々「スライディングDOGGEZA!!!!!!」

ユウタ「アランよ……このくそ作者が勝手に名前を出したこと……謝るぜ……どうしても出したかったらしいぜ？前のお前の話が嬉しくて嬉しくてたまらなかったらしい。」

優氣凛々「ファイティングDOGGEZA!!!!」

ユウタ「DOGGEZAつけりゃ何でもいいのか!？」

A・S 編第12幕「邪神覚醒」やつは余計なものを……」

海鳴市上空

神音「あの女の人から……いやらしいオーラが漂ってるよ……」

仙「せやな……十中八九咲哉が何らかを使ってあのアマをあやつってんやな……」

海里「女の子操るなんて……最低野郎だ!!!」

海鳴市上空……時空管理局の面々と異様な魔力を纏う女性が向かい合うなか、ユウタら騎士団が横から割り込む形となった。

ユ「おゝいなのは!!!この姉ちゃん誰だ?」

な「ユウタくん!!!この人は闇の書さんだよ!!!」

ユ「わりいなのは!!!聞く相手間違えたわ!!!」

な「にや!?私は間違ってるの!!!」



ユ「書物があんなになるわけねえだろ！……常識で考える常識で  
！……！」

な「私たちには既に魔法っていう非常識があるの……！」

ユ「……あゝ……なるほど……！」

闇の書「……芝居は終わったか？」

なのはとユウタの漫才を闇の書は妨害せずに待っていてくれた。

ユ「律儀に待っててくれたのか……」

なのは達に手を出そうとしたら？なんでだ？」

闇の書「……主の為だ。主の幸せを汚すものを……排除するために！  
……！」

ユウタは闇の書の言葉を聞いて、瞳を閉じた。手は固く握りしめられて  
いる。

ユ「主の為に動く忠義……称賛に値する……」

だが、人様に迷惑被らせんなら……命令じゃねえ！！！ただの……ありがた迷惑だ！！！！」

ガシユン！！ガシユン！！

ユウタの両手から薬莢が吐き出され、手に炎が籠る。

な「ユウタ君のいう通りなの！！さすがに命令の度を越えてるの！！」

フェ「だから……貴方を……止める！！！！」

ガシユン！！

ドギユン！！

なのはとフェイトのデバイス……レイジングハートとバルディッシュからも薬莢が飛び出す……

神音「私たちはユウタに仕えてるけど……ユウタは私たちにそんなバカなことはさせないよ！！！！」

ゴウウウウウウウウウウ...

神音の体から金色の授天力が吹き出る。

仙「主従の関係でも……やってええことと悪いことがある……あんなはいま……悪いことしてるんやで……!!」

チャキ……

仙は緋乃柄と風切をかまえ……

海里「ゆうちゃんは私たちを大事にしてくれてる……大事にする気持ちがある人がそんなこと頼まないよ!!」

キイイイイイイイイイイ……

海里のポセイディアに授天力が込められ、刃が形成された。

闇の書「……戯れ言を……吐くな!!主の命令は……願いは絶対だ!!」









なのはとフェイトの渾身の一撃が闇の書を包んでいた…

しかし……

闇の書「滅びよ……星の閃光と共に……」

ユ「ちよっ……あれはなのはのスターライトブレイカーじゃねえか！？」

闇の書がいまだ健在、しかもなんでかなのはのスターライトブレイカーまで出そうとしていた。

な「わ…私のおんなにえげつないものじゃ……」

ユ「なのは…あの攻撃自体えげつないから自然になのはもえげつなく……」

な「ユ「君……OHANA SIするの？」

ユ「「や……やだな？」

ユ「となのはのやり取りにユウタはイライラし始めた…



ユ「ええい！！ごちゃごちゃ夫婦漫才してんじゃねえ！！！」

レイ《そうですマスター、スターライトブレイカー軌道上に一般人の反応が…》

な「それはいけないの！！それに私はユーノ君のお嫁さんじゃなくって……その……ユウタ君の……」

海里「ゆうちゃん！あの砲撃……なのはちゃんのやつより……威力が違  
うよー！！」

なのはの呟きは無視されて、海里が横入りしてきた。…顔がドヤ顔  
なのが気がかりだが…

ユ「ちっ……聖騎士と管理局側は一般人とやらの救助だ！！！！おれ  
は……」









闇の書「咲哉の魔力……なんと心地よいのだ……／／／／」

グシュ……

ユ「……が……はぁ……」

闇の書の銀の髪が黒に染まり……

ユウタの腹を……闇の書の手が貫いていた。

そう……闇の書は……咲哉の無限の魔力を受け……ユウタを勝ったのだ。

皆は声が出なかった……

そして……

闇の書「攻めての情けに……恒久の夢に微睡んでいるがいい……」

ユ「……………は!!!」

ゴオツ!!!

ユウタは闇の書に頭突きをした……

ユ「夢に微睡んで……いろ?……てめえ……操られて……んのによく大層な……ことがい……えるな!!!」

闇の書「……………!!!」

ユ「俺は……お前を……必ず……助けるからな!!!!!!」

ユウタは言い残し……

闇夜の夢に……姿を消した……

??????

アラン「……どうやら……ユウタが困ってるみたいだね……操るとか卑怯なやり方気に入らないなあ……」

噛み殺そうかな?…親友を傷つけたんだし…

いや……ユウタなら…やれるか…  
ユウタも…僕ほどじゃないけど強いから…」

どこかで、ユウタの親友も…ユウタの危機を察知していた…



A・S編第13幕「邪神覚醒〜夢と現実の狭間〜」(前書き)

ユウタ「今回は俺の夢……みんな……」

優氣凛々「ぐだぐだ感マックスですが……どうぞー!!」

A・S編第13幕「邪神覚醒〜夢と現実の狭間〜」

sideユウタ…

?「……きて」

んあ?誰だよ?楽しい夢見てんだからさ…

?「…た…きてよ!」

だアかアらア…

ユ「うるさいって」起きろっていつてんでしょ!……!……!お目覚めのキス欲しいの?／＼／＼／＼!……!起きるから……!の前に……!なんだよ……!何でいんだよ……!

サキ姉……!」

訳わかんねえよ……

何で目の前に俺の姉…御神 サキネがいんだよ!?

サキネ「何いつてんの?あんたの家だよ?当たり前じゃない?……  
あ、もしかして心配させて私に甘えたいの?ノノノノノ」

…しかもまんまかよ…

サキネはなんでか俺に甘い…全く、毎日退屈しなかったが…疲れてたな…

ユ「……朝飯だろ?」

サキネ「むう……でも、素直じゃないユウタも…なかなかだよ?ノノ」

ユ「うるせえやい……」

トイレで鏡をみたが、転生後のままだった。何で…わかったんだ?

リビングに来てみると…

？「……おはよう…ユウタ」

？「おはよう！…ユウ兄！！！！」

？「おはよう！…ゆうちゃん！」

父親にして俺の師匠、御神 ユウトと、柔らかい物腰で実は薙刀の名手である母親御神 エリカ、俺の弟にしてプロレスのことと電子機器については誰にも負けない御神 カツリがテーブルにいた。

しかも……そのままの容姿で。ただ…何故みんなから”授天力”を感じるのかが不思議だ……

ユウト「…ユウタ、早く朝飯を食べよう…お前も腹が減ってるだろ？」

エリカ「そうよ お母さん、頑張ったんだから」

カツリ「早く食おうぜ！！ユウ兄！！！！」

なんだか…二度と味わえない生活を送ってるみたいだ……



ユ「まあ、そんなこんなで遂にはこんなとこに来たんだよ……」

ユウト「…ある程度事情は把握した。授天力については…聞く限りお前が持ったことによつて俺ら（・・・）にももたらされたらしいな。」

親父の言葉に耳を疑つた……俺ら（・・・）にも？

ユ「……じゃあ…カツリも……サキネも…母さんも父さんも…授天力使えんのか！！！」

カツリ「むしろ世界でつて言つた方がいいよ！」

サキネ「そうね…私も使えるし……」

……なるほど、俺が…因果を変えちまつたから……

ユ「……ごめん…俺のせいだ……」

エリカ「ゆうちゃん……大丈夫！私たちも頑張つてるから！！！」

ユウト「……ユウタ、お前はカツリやサキネと違って…人を頼らなかつた…今苦しいなら……」

ぽふん！！！！x4

俺は、家族に抱き締められた。すごく…暖かい……

ユウト「泣いておけ……言っとくが…俺たちは闇の書とかいうやつ  
が作った幻影ではない……」

ユ「…は？……夢…じゃない？」

カツリ「夢は夢だけど……またユウ兄に会えた……生きてるのも知  
れたよ……」

サキネ「ここは夢を共有してできた世界…なのかも……」

ユ「…本……物…カツリ、サキ姉……」

俺は今にも泣き崩れてしまいそうになった…でも……やらなきゃな  
らないことがある。

エリカ「行くのね……ゆうちゃん……」

ぎゅ  
……

母さんの抱き締める力が強くなる。

ユ「…俺にもやらなきゃならないことがあるから…」

ユウト「…持っていけ…ユウタ」

スチャ…

父さんの手に握られていたのは…鞘も鏢も真つ黒な刀だった…

ユウト「神刀…」黒鋼<sup>くろがね</sup>…家の家宝だ…」

ユ「…！！！！バカ！受け取れないよ！！第一「お前は十分強くなつた…これは”鳴神流”だったか？…設立記念だ…」父さん………」

父さんの顔には…一筋の涙が流れていた。

ユウト「黒鋼には…空間を切り裂く能力があると……伝記には書いてあった……これに授天力を込めて…断ち切れ！！…己の障害を！…守るべきもののために！！！」

父さんは黒鋼を俺に差し出し出してくる。みんなは自然と父さんの後ろにいた。

カツリ「行けえユウ兄！！！！ユウ兄が誰かに負けるなんてあり得ねえからな！！！」





俺はその空間に入る前に…

俺はみんなに向き直り…

ユ「みんな！…！…！…！…！…！…！…！」

笑顔で…二度と言えないと思った言葉を…口にした…

A・S編第13幕「邪神覚醒〜夢と現実の狭間〜」（後書き）

オマケ

ユウト「…行っちゃったか…」

エリカ「…なんか、一回り大きくなってたわね……ゆっちゃん。」

カツリ「ゆ……ユウ兄…生きてるんだな……！…やった……！！！」

サキネ「……ユウタあ……／／／さらにかっこよくなって……はう……  
／／／」

朝、御神家では笑顔が増えたという……

優氣凛々「感想いただいたりしているなかに、”能力の説明を…”とか”神様が死ぬなんておかしい”など、素晴らしい意見ありがとつとございます!!!」

能力の説明はぼちぼちしていきますが…今はこのままで…

神様が死ぬなんておかしいっていうのは……まあ…伝説上でも死んでたりするので書いてみました…気に食わなければすみません…」

ユウタ「まあ神様も万能な奴はいねえしな…」

そついや、天照さんとか…苦手なもの…あんのかな？」

優氣凛々「…意外にアレルギー体質で花粉症とか蕎麦アレルギーとかになってたりしてな…（・x・）」

ユウタ「……………花に弱いのか？天照さん……………春先大変そうだ……………」





神音「…夢へ…誘った？」

闇の書「そう…主と同じく、自分が幸せな生活を送る”夢を見ているのだ…”」

神音はそれを聞いて安心したのか、微笑んだ。

神音「なら大丈夫だね…」

ユウタは……”人の幸せを願う”人だから！！！！”

ギィィィィン！！！！

闇の書との間にまた距離を置く…

距離を置いた瞬間に…

青と桃色の砲撃が闇の書を迎えた。





闇の書「五月蠅い……穿て、ブラッディダガー」

闇の書の周りに血の色の短刀が浮かび…仙とフェイトに向かっていった…

ヒュヒュヒュヒュヒュン！！！！！

ガガガガガガキン！！！！

仙がギリギリのところまで刀で切り裂いた

仙「大丈夫かいな！！？フェイト！！」  
フェ「助かったよ……」

神音「…埒が明かないわ……どつすれば……」

その時……

闇の書「うぐ……」

何だ？この……腹のなかを切り裂かれる感じはああああ！！！！」

闇の書が何故か苦しみ始めた……気づけば……闇の書の目の前に巨大な陣が展開されていて……

ズドオオオオオオオン！！！！！！

黒い衝撃波が陣から出てきた……

そして、中から……

ユ「はあああああ！！！！そとに出れたぜえええ！！！！」

黒い刀を肩に担ぎながら……

騎士団の統帥が闇の夢から舞い戻った……しかも……



はやて「いややー!!夢の中にはいかへん!!!!」

はやてが闇の囁きに反論した。

?「な…何故だい?ここには…幸せな生か「そこや!!!!幸せな生  
活なんて上手い話はあらへん!!!!」…ぐう…」

はやての言葉に闇の囁きがぐずり始める……動揺しているらしい…

はやて「しかも…あんたの声が聞き覚えがあるんや…

この…無駄にいやらしいこえ…

咲哉やな!?!」

咲哉「…く……さすがにばれるか…」

その声の主は…ユウタの仇敵、咲哉だった…

はやて「咲哉……あんたはとんだアホやな!!!早くここから出し  
い!!!」

暗闇から次第に咲哉の姿が露になる…漆黒の服に身を包んでい  
かにも「私が強い」と言い表す服装だった…

咲哉「くくく……嫌だね?お前は俺の人質……くくく…ハハハハハ  
ハ!!!」

はやて「……今だけ…動けん体を恨んだるわ……くう……」

はやては身を縮めた…少し体が震えていたのが咲哉にばれて…

咲哉「はっ!!!さっきの威勢はどこいった!!!最初からそうしと  
けば「主に何をしているのだ!!!」……な!？」

そこには……ところどころ傷ついている闇の書の……夜天の書の管  
制人格がいた…

咲哉「な…何故お前が…お前はあの十字架に縛って魔法の通じないところに閉じ込めたはずだ!!!」

夜天「…確かにあのあとは絶望的だったかな…」

【回想し咲哉とはやてが話す前】

夜天「…主…すみません…」

夜天の書は涙を流しながら十字架に磔にされていた。

その十字架は魔力を打ち消すため…魔法を封じられている…

その時…

スパアン…

空間が突然切れた…すると中から漆黒の髪に赤いメッシュを入れた美少じ…美少年がいた

そう、それは間違いなく夢から舞い戻ったユウタである。

ユウ「あつれ〜？道間違えたか…っておい！！あんたどうしたんだ

!？」

ユウタは夜天に気付き、急いで駆け寄った。

ユ「今助けるからな!!!待ってるよ!!!」

夜天「お…お前は…？」

ユ「御神 ユウタ…みんなの幸せを願うただのガキだよ…」

夜天「御神…ユウタ？」

夜天は驚いた。こんなに小さな男の子なのに…やけに大人びている…しゃべる言葉も子どもではなく、大人な空気を漂わせる…

ユウタは枷に授天力を一発装填し、腕枷を外した

夜天「ユウタとやら…お前は子どものはずなのに…何故大人びているのだ…？」

ユ「…手短にいうと…俺は転生者だから……つてのが妥当だ。」



夜天は転生者と聞いて身構えた。咲哉も転生者…警戒してしまうのも無理もないのだ。

ユ「その反応、咲哉になんかされたら？」

夜天「咲哉に……防衛プログラムを奪われた……私は……主を助  
けたい……しかし、あいつには私では勝てないのだ。」

ユウタはそれを聞くなり、さっきまで夜天を縛っていた手かせ足かせを溶かし、一本の長いロープにした。

ユ「これで咲哉をふん縛って、咲哉をそとに出しな。あいつは闇の原因を取り込んだのか？」

夜天「うむ……防衛プログラムにバグが発生して、破壊のみになったから……おそらく……」

ユウタはそれを聞いて笑顔になった。

ユ「なら……奴ごと闇を消してやる……だから、そのロープで魔力封じて外に出しな……」

俺が咲哉を……殺すからな!!」

夜天はさっきから驚きっぱなしだった。咲哉とは違い、人の話をよく聞いて…助けてくれる…

夜天「お前は…咲哉とは違うんだな。」

ユ「当たり前だ!!!!あんな奴…いたらみんな”不幸”になるからな……」

ユウタはそれだけを言って、元の穴に戻っていった…

【回想終了】

というわけだ…」

咲哉は顔に憎悪を浮かべ、歯ざしりし、手に力を込めた。

咲哉「ユウタアアア……憎い……あいつ……殺してやるううう!!」



はやて「怒ってへんよ別に。それより……ここから出たいんやけど……どうしたらええ？」

夜天ははやてに目線を合わせるように立ち上がった。

夜天「なら……私に新たな名前を……それからは私が……あの咲哉を書きから切り離せば脱出できます。」

はやては瞼を閉じ……ゆっくり開けた……

はやて「名前……」

みんなを励ます祝福のエアール……祝福の風”リインフォース”や！  
！！」

リイン「分かりました。リインフォース……認識完了です！防衛プログラム……咲哉を……切り離します！！！」

その時、空間が明るくなっていった……



突然、闇の書がひかりはじめ…徐々に収まっていく…すると…

はやて「リインフォース…私の杖と甲冑を…」

リイン「はい……主はやて…」

黒と白が互い違いの羽…黒と白を基調としたジャケットに金の装飾  
…騎士甲冑を身に纏い……闇夜に浮かぶは…

最後の夜天の王……八神 はやてと、夜天の書から生まれ変わった  
…祝福の風”リインフォース”だった……

続く…

A・S編第15幕「邪神覚醒」終焉への鎮魂歌（レクイエム）」（前書き）

優氣凛々「まあ毎度毎度毎度毎度の如くぐだぐだなんだが」

ユウタ「毎度しつこい!!!」

優氣凛々「言い足りないんだが…」

今回と次回でA・S編終了します!!!お楽しみにく（＾・く

」

ユウタ「ぐだぐだだって言ったのに楽しみにしてるかよ!!!」

優氣凛々「並びに今回も魁斗様のアラン君が出ます！勝手に能力こ  
んなんかな？つてつけちました!!!すみません!!!」

ユウタ「さりげなく手首にカッター置かないの…」

A・S編第15幕「邪神覚醒」終焉への鎮魂歌（レクイエム）」

海鳴市上空

はやて「おいで……私の騎士たち……」

そうはやてが呟くと……周りに4つの魔方陣が現れ、中からシグナム、ザフィーラ、シャマル、ヴィータが出てきた

なのは「ヴィータちゃん!!」

フェイ「シグナム!」

しかし、やはり知らない奴等は……

ユウタ「……………はれ?シグナムさんとかが魔方陣から出てきたぞ?」

神音「どつちやら私達聖騎士と似てるらしいね……ボクも驚いたよ……」

仙「……まあ……そつやね……」



海里「…仙ちゃんが驚くなんて珍しいね……でも……何でもありね……魔法って……」

かなり驚いていたらしい。

シグ「…主はやて…申し訳ありませんでした。身勝手ながら……」

はやて「ええよ……みんな、お帰り……」

ヴィー「ううう……うわぁぁん……！……はやてえ……！ごめんなさい……！……！ごめんなさい……！……」

はやて「よしよし……」

はやてはヴィータが泣きついて来たため、抱き締めて宥めていた。

なのは「ううう……感動なの……」

フェイ「うん……」

ユウタ「まあ…これも幸せの形の一つだな!!」

すると、はやてがこっちに気づいて近づいてきた。

はやて「あんさんがユウタ君……でええの？」

ユウタ「ん？ああ、俺が御神　ユウタだが……どした？」

はやてはユウタに向かって頭を下げた。

はやて「ありがとう……夜天の書を……リインフォースを助けてくれたんやろ？……ほんま、ありがとう!!」

ユウタ「…頭を上げて…」

はやてはユウタのいう通り頭を上げた。

ユウタ「別に俺は助けてねえよ!!」

あの女の人…リインフォースだっけ？リインフォースは自分で幸せを勝ち取ったんだ。俺はちょこっとお手つきしただけ。

だから、助けたいと思ってボロボロの状態を引き摺って頑張ったりインフォースにお礼をいいな…！」

はやてはユウタの言葉に涙を浮かべた。しかし、顔は笑顔だった。

はやて「ほんま…ありがとう…！」

ヴィー「あ…！ユウタだ…！ユウタ…！」

すると、ヴォルケンリッターの面々も歩み寄って来た。ヴィータはかなりハイテンションだが…

ユウタ「たしか…ヴィータだっけ？吹っ切れたみたいで何よりだな！」

しかし、次第にヴィータの顔が青くなっていき…

ヴィー「ユウタ……その体……」

ユウタは体をよくみた。腹には貫かれた部位が痛々しくあった。

ヴィー「だ……大丈夫なのかよ……ユウタ……」

ヴィータはユウタを見てかなり心配しているようで、涙を目に溜めている

ユウタ「うーん……まあ”エレメンタルブレイク身体変化能力”使ったから応急措置はして止血したから……大丈夫じゃ「ダメです!!」……ほえ？」

ユウタは声のした方を向くと……白い魔方陣が浮かび上がり、中から銀髪で翼が二対ある女性が出てきた……しかも……

ユウタ「……エリリイ？」

エリリイと瓜二つな顔つきで。さらには……

？「私はエリリイの妹……アベルです！ユウタさん！！お会い出来るのを楽しみにしてました！！！」

ぎゅむう…!!

抱き付いた。何だか妹なだけあって姉に似てしまうのかと一瞬思った。

ユウタ「な!! やめるバカ!!」

カアアアアアアアアアアアア!!

アベルの体が急に光り…ユウタの傷が瞬く間に回復していった…

もちろん、周りの方々はいきなりだったので黙っています。(約2名が何故か殺気立ってますが…)

アベル「私、エリリイお姉ちゃんより回復向けで…回復させるついでにユウタさんにおさわりしたくて来ました!! / / /」

ユウタ「何で？俺は唯の”転生者”じゃないの？」

アベル「ユウタさんが知らないのも無理ありません……」

ユウタさんは既に……

神界でも有名な”天照の化身”として認められたんですから……！  
本人も承認しましたよ……！

アベルの言葉にユウタは驚いていた……周りの方々には何を言っているのかわかっていない……  
しかし、聖騎士は……

神音「ユウタ……すごい……あの堅物が認めるなんて……」

仙「せやな……あん人は何かあるとすうぐ引きこもるもんなあ……」

海里「沸点低いもんね……あの人……」

天照大神が怒って穴に引きこもったのは有名ですね。

するとそこに、

クロノ「盛り上がっているところ済まない……時間がないから早く作戦をたてないといけないんだが……」



クロノ「……同感だ……」

その場一同はあきれていましたとさ……

クロノ「プランとしては二つ。一つはみんなの一斉攻撃による破壊。これはかなりギャンブル性が高いか「いや採用だな……！」人の話を中断しないでくれ……！」

クロノがプランをいうなか、ユウタは一つ目で採用しようとして提案した。

クロノは渋い顔でユウタを見て、改めて続ける。

クロノ「気を取り直して……二つ目は……魔導砲アルカンシエルの使用だ。」

ヴィータ「ダメだ……！！！！アルカンシエルなんて使ったらはやてん家吹っ飛んじやうよ……！！！」

ユウタ「なあ、シグたんよ？アルカンシエルって威力高いのか？」

シグ「な……シグたんとは何だ……！！！！！！！！アルカンシエルは半径100キロ圏内を空間もろとも破壊する砲撃だ。」



シグナムはシグたんと呼ばれ、少し戸惑ったが…気を取り直して説明した。

海里はそれを聞いて思考同時展開能力を使い、ある答えを導いた。

海里「もしかしてさ、アルカンシェルって宇宙空間とかで撃てない？」

バツ！！！！（全員で振り向く。）

全員『それだ！！！！』

クロノ「どうやら、計算上問題ないらしい……分の悪い賭けだが…やらないよりはましだな！！！！」

という訳で、なのは・ヴィータ、シグナム・フェイト、はやて・ク

ロノ、海里・神音・仙、ユウタと決まり、ユウタはちょうど対象のはるか上空でみんなが攻撃をするのを待っていた…  
実際、ユウタは満身創痕から幾分かはよくなったが…エリリィの代償が引き摺られ、正直応えていた…

すると……

？「…楽しそうだね…僕も混ぜてもらってもいいかい？」

ユウタ「……！！アラン！！！」

アラン「やあ、ユウタ。」

空間を裂いて死の神アランが現れた。

アラン「ユウタ……聞いたよ、騎士団とかいう団体を作ったらしいね。しかも…アテネ…天照大神からも認められた”天照の化身”…通称”破壊神”となったって…」

ユウタ「……まあ…な？」







闇の書コアは転送されて…しばらくしたら…

エイミィ「アルカンシェル発射完了… エネミー反応…ゼロ…！」

お疲れ様…！闇の書コア破壊完了です…！」

すべてが……終わりを告げた…

A・S編第16幕「旅立ち」さよならなんか似合わねえだろっ」(前書き)

優氣凛々「A・S編最後の巻！！感動的に仕上げた…つもり！！」

ユウタ「まだ終わりじゃないからな！！StS編も続くぜ！！」

二人「俺に”さよなら”なんか似合わねえだろ！！」

A・S編第16幕「旅立ちくさよならなんか似合わねえだろっ」

ユウタ家

やあ、みんな元気かい？ハッピーかい？  
この挨拶も久々だな…御神 ユウタだ。

あの忌まわしき転生者の事件…”闇の書事件”から大体1週間くらいが経ったよ。今までに、事件のあと、クリスマスパーティーの時に…なのはは家族と友人等に魔法のことを話したよ。全部ね。

まあ…フェイトが最初なのはと敵だったとこに驚いたよ。戦闘見たがよ……今より荒削りだから両方”龍星群”一発で沈められるね。

そして俺も話した。自分のこと。アリサやすずかはわかってたから驚かないのは分かるだろ？桃子さんと士郎さんらは驚いてたよ？

んで…今は…

キイイイイイイ…



サン「そのまま維持ですマスター！！！」 錬王凱哮”維持2時間経過です！！」

ユウタ「ふう〜……………」

病養を兼ねて身体強化……”王臨”を強化中だ。因みに”小説内の能力を具現化する力”はエリリイに返した。その代わり、授天力をきちんと使えるようにしてもらった……

んだがよ……………

回想〳騎士団神界支部〵

俺はエリリイに頼んで神界までつれてきてもらった。ついでに身体検査をして……

エリリ「…あれ？これは……………」

ユウタ「どうした？エリリイ？」

俺はエリリイに能力を返し、授天力を使えるようにしてもらった。しかし……………

エリリ「ユウタ……………神化しんかしてる……………ですっ！！！！！！すごいですっ！！

「!!」

エリリイは予想を斜め上に行く発言をした。

ユウタ「神化？」

エリリ「つまり、ユウタは人であり、神でもある”楽園人”<sup>エデン</sup>という人種になったですう!!おそらく身体変化能力を使ってたために授天力が体に馴染んで、身体の中に必ずある”氣”に授天力が反応して”神化”してみたいですう!!」

ユウタ「え?んじゃ授天力は…?」

エリリイはズイツと身を近づけてきた。

エリリ「すごいんですユウタ!!!貴方は授天力と”神化”した自分自身の神の力…両方使えるんです!!!前例がないので…大発見ですう!!!」

…どうやら俺は人外化してきたみたいだ…

ユウタ「…まあ、いいか…」

エリリ「ユウタの神名……善よき破壊神……善ぜん壊かい神しんですかね？」

ユウタ「善壊神ねえ…わかった。」

エリリ「ユウタ……楽園人おめでとうですう！！今から天照様に  
言ってくるから、ユウタは下界して待っててですう！！」

回想終了

んで…エリリイに確認したら、今んとこランクは低級の上位で”王  
臨”自体が俺の神の能力だったらしい。

だから、能力との同調と慣れのために今んとこできる限界”錬王凱  
哮”を維持している。これで傷の治りが若干早くなるらしい。

サン《”錬王凱哮”維持2時間半！経過！！一旦休憩です！！》

ユウタ「…はあ………」

俺の髪が漆黒から純白に変わる。身体中に響くなあ…

サン《マスター……》

本当に旅立たれてしまうのですか？《

サンライトが心配な声音で聞いてきた。

そう、俺は……怪我が治ったら様々な世界がみたいがため出ていこうと思っている。

ユウタ「ああ。俺のなかでは決定事項だ。ごめんなサンライト……身勝手なマスターで……」

サン《帰って……来るんですよね？この世界に……私達の元に……》

ユウタ「心配すんなよ！帰って来るから！！ここはいわば第二の故郷だぜ？帰って来ないわけないだろ！！」

サン《マスター……私は待ってますよ……貴方がまた私をセットアップしてくれるのを……いつまでも！！！！》

ユウタ「ああ！！」

俺はサンライトと…聖騎士達を忘れないぜ!!…因みに聖騎士達にはここに”騎士団海鳴支部”を作ってくれていったよ。

そして…5日くらいが経った…1月の寒い日…雪がちらつく朝…俺は騎士団の正装をしてそれぞれに別れを告げる…

高町家

ピンポーン…

なのは「は〜い……あ!…ユウタ君!!おはようなの!…」

ユウタ「よっす!…」

なのはは自慢のツインテールをおろして、暖かい格好をしていた。

なのは「ユウタ君どうしたの?」

俺はまぶたを閉じ…告げた。

ユウタ「俺、今日からこの世界から……旅に出ようと思った。」

なのは「……………え？…ゆ…ユウタ…君…？」

なのはは目を見開いて驚き……………俺につかみかかってきた…

なのは「……………行っちゃうの…？」

ユウタ「ああ、俺は…いろんな世界を旅して……………また戻って来るから……………」

なのは「…また……………戻ってくる？……………ほんと!？」

ユウタ「必ず戻ってくる……………ここはいわば第二の故郷だからな!!…それ…」

俺に”さよなら”なんか似合わねえだろ??”

だきっ!!

なのは「うん!!約束なの!!私!!いつまでも待つ!!」

ユウタ「ああ!!だから今は!!またな!!」

……というやり取りを繰り返しました。フェイトもはやても同じかよ……

### 海鳴市公園（三人称）

ユウタ「よし!四次元リング……」ヘブンスゲート”よ!!黒鋼を俺の手に!!”

雪が降り積もり、今もまだやむことはない雪の中……ユウタは純白

の髪をなびかせ、漆黒の制服を身に付け、漆黒の刀を握って…公園に  
来ていた。

ユウタ「転生して…初めて降りた場所…そして…俺のスタート  
地点だ！」

三人「…待って!!!!」

ユウタは声の方を振り向いた。すると……

ユウタ「なのは…フェイト…はやて!!…どうした？別れは一応いっ  
たはずだが…」

白い息を吐いているなのは…フェイト…はやての三人がいた。

なのは「ユウタ君…写真…撮ろ!!!!」

フェイ「私達、ユウタとの思い出があまりないから…」



はやて「せや!!写真撮ろっ!!」

なのはがカメラを手に持っていた。

ユウタ「ならさ……写真とる前に渡したいものがあるんだがよ……」

ユウタは三人の手に何かを握らせた。なのは達は手を開いた。そこには……

なのは「……宝石？」

フェイ「……でも……」

はやて「暖かい……」

ユウタ「それは……分化させたサンライトのコアだ。」

三人は驚いてユウタを見た。ユウタは優しく微笑んでいた。雪が相まってかなり美しい。

ユウタ「この世界か…お前達の揃っている場所に俺が来たとき…サ  
ンライトが完成する仕組みだ。なくさないでくれ。」

三人は静かにうなずいた…

なのははカメラを手頃な場所にタイマーを設定して置いた…そして…

4人「「「「1+1は2!!!」「」「」

パシャ!!!!!!

ユウタはなのは達の前から旅立った……

- t h a n k s f o r r e a d i n g ! ! !

N e x t s t a g e i s . . . " S t r i k e r s " !  
! ! -

StS編プロローグ「善壊神…来る…救助…」(前書き)

ユウタ「俺は、弱い…

みんなの幸せとか言って…

みんなに迷惑しか与えてない…

俺はそんな自分自身を変えたくて……修行を積んだ。

まだまだ発展途上だけど……

みんなの幸せを邪魔する奴等は…

俺の力で押し伏せてやんよ!!!

さあ、始まるぜ!!!俺の物語!!!」

S t S 編プロローグ「善壊神…来る…救助…」

- 新暦0071年4月…ミッドチルダ空港… -

あの”闇の書事件”から6年がたった…4月のある日…

？「うう…お姉ちゃん…どこお？」

燃え盛る空港…崩れ行く建物の中…青い髪の少女が涙を流しながら歩いてきた。

ドカアアアン！！！

？「キヤアアアアア！…もう…やだよお…お姉ちゃん…」

少女はその場に膝を落とした。背後には女神像が佇んでいる…

グラア…



？「お嬢ちゃん、お名前は？」

スバル「スバル……スバル・ナカジマ……」

ユウタ「俺はユウタ。まあ……まずはここから出ような！」

純白の美女……いや美男のユウタは肩から翼を広げた。赤が美しい翼でスバルは見とれてしまった……

ユウタ「さあて、まずはこの像を……」

ユウタは空いてる腕を構えた。すると、手に炎が宿った。周りの炎とはまるで違う……暖かい炎だ……スバルはさらに見惚れていた。

スバル「うわぁ……暖かい……」

ユウタ「行くぞー!!爆……龍……拳!!!!」

ドゴオオオオオオオオン!!!

ユウタの手に宿した手が像にあたると…像は爆発と共に砕けた。さらに…その直線上の瓦礫がなくなっていた…

す……

ユウタ「抜けるぞ?立てるか?」

ユウタは笑顔でスバルに手を差しのべた。

スバル「…うん!!」

きゅっ…!!

スバルはユウタの手を握った。

スバル(優しい暖かさ……私も…この人みたいになれるかな?)

すると、差しのべた手に付いていた腕輪が光り始めた…

スバル「……………」

ユウタ「!!！」

ユウタはそれを見た瞬間、さらに笑顔が溢れた。

ユウタ「あいつら……ここに居るのか!!……でも、今はここから出ような?…ちよつとごめんな?」

スバル「うわぁ!!?!?!」

スバルはユウタに抱き抱えられた。俗にいうお姫さま抱っこだ。

ユウタ「嬢ちゃん、ちよつぴり空飛ぶぜ?しっかり捕まれ!!！」

スバル「はいノノ……………」

お姉ちゃん(…………)!!！」



ビキイ!!!!!!!!!!

ユウタは固まった。そして目に涙を浮かべながら…

ユウタ「スバルちゃん? ……俺は男だよ?」

スバル「ええ!?!?ご…ごめんなさい!?!!」

ユウタ「あれ? ……しよっぱい雨が…」

空へ飛んでいった。

闇の書事件から6年……御神 ユウタは15歳となり、再び”物語”へと入っていく…

さらに”善壊神”の名に恥じない強さを秘めて…

S t S 編主人公とオリジナル人物紹介11 / 16 更新しました (前書き)

優氣凛々「今までののに追加する形でやって行きます! ! ! !」

## S t S 編主人公とオリジナル人物紹介11 / 16 更新しました

名前：御神 ユウタ

年齢：19（プロローグ時15）

性別：男

身長：168？

体重：62？

体型：スラッとしているが、からだがり引き締まっている。よく女と間違われる。

髪型：茶髪ロングヘア（能力発動時純白ロングヘアを束ね、前髪に蒼のメッシュ。その他いろいろ。）

詳細：言わずもなが主人公。心身共に成長し、“善壊神”の名に恥じない強さを身に付けた。

自分なりの信念を貫き、信念の為ならどんな無茶でもするマイナスな点も：

性格は温厚。優しく、時に厳しいお兄さん気質。よく子供に好かれる。相変わらず女性関係に鈍い。

16歳の時に転生者”（オメガ）”に撃墜され、1年間意識不明になり、19歳の現在でもリハビリをしている（16歳の時より強くなっているが：本人は”弱い”らしい。）

かなり努力体質で、他の人の5倍はやっている。異世界神と仲が良い。

能力：A・S編までに紹介したのに追加する形でします。

追加能力「授天力超覚醒能力」  
アルティメッター

…ユウタの持つ授天力を覚醒させ爆発的な力を得る。ただし、授天力消費がかなりすると共に反動が凄まじいため、奥の手。

攻撃能力？鳴神流拳技「虎牙昇掌」

…相手の懐に潜り、正拳突きから手をめり込ませて打ち上げる。

鳴神流拳連結技「竜尾墜蹴」

…虎牙昇掌で打ち上げた相手を回転踵落として勢いよく叩き落とし、自分も落ちて相手を踏みつける。

鳴神流拳奥義「四聖撲滅」

…相手に連掌を叩き込み、打ち上げ、叩き落とし、踏みつけ、頭を掴み、正拳突きを高速でお見舞いする奥義。上下左右に敵が動かされる様を四方に例えて名付けた。

身体強化能力「王臨」：今までに紹介したものを下位として中位、上位能力の紹介します。

・王臨「陸王壊放」

…中位の王臨。髪が紅蓮に染まり、肌が茶褐色になる。身体強化は

2倍となるが、火、雷を操る能力を得る。

追加技：“電光石火”

…雷と火の球体を高速で打ち出す。

”火葬大焼”かそうたいししょう：巨大な炎球体を叩きつける

”神鳴”かみなり

… 高压電流の塊を槍にして打ち出す。

・王臨「空王飛来」

… 中位の王臨。髪が蒼に染まり、肌が茶褐色になる。身体強化は2倍となるが、水、氷を操る能力を得る。

追加技：“明鏡止水”

… 氷の鏡で相手を閉じ込め、氷の槍を出し、相手を串刺しにする。

”雨坊主”

… 水を一ヶ所にまとめ、雨のように鋭くして降らせる。

”氷ノ花卉”

… 氷をまるで桜の花弁のように舞わせ、付いたところから凍らせる。

## 上位能力

・王臨「聖王爆誕」

上位の王臨。髪が金髪になり、肌が透き通った肌色になる。主に砲撃に特化している。身体強化は1.5倍と低めだが、授天力消費が4分の1となり、砲撃連射、破壊力・命中率が通常の4倍に膨れ上がる。

・王臨「霸王招来」

上位の王臨。髪が純白で鈍く輝き、肌色が黒くなる。格闘特化となり、砲撃は衰える。身体強化は8倍。砲撃は8分の1で、瞬発力、攻撃力、身体防御力など、体に関しての能力が上がる。聖王爆誕に比べ反動も大きいため、最終兵器。

【家族紹介】

名前：御神 サキネ

年齢：30歳

身長：152?

体重：---?

容姿：スタイルがよく、グラマーな体型。スリーサイズは上から90、58、86。

髪型：茶髪のショートヘア。横だけ伸ばしている。

詳細：ユウタの前世の姉。ユウタ史上主義でヤンデレ寸前。一応踏ん切りをつけたくて結婚したが…踏ん切りをつけれない。前世では使えなかった授天力を使える。契約者は”雷聖霊ライジ”。

ここで!!!

ユウタの授天力説明コーナー!!!

ユウタ「よっ！！読んでくれる人たちには感謝してるぞ！  
この小説の主人公の御神 ユウタだ。  
ぶっちやけ……”授天力”ってなんか曖昧じゃねえか？この際だから  
この場を借りて説明しようかと思っただけ……間借りしたぜ。  
……代わりに女装させられて死にたくなっただけよ……

んじゃ、気をとりなおして説明すんぞ。

”授天力”ってのは、神界にいる神や聖霊と”契約”することによ  
って得られる神や聖霊のちからの一部を示すんだ。  
だいたい一部は10分の1くらいかな？  
この一部も神や聖霊との”共鳴度”によって与えられる割合も変  
わるんだぜ？

因みに俺は共鳴度を100とするなら「50」……半々だな。

んで、神と聖霊の力を与えられるにあたっての大きな違いは……聖霊  
は共鳴度によつては”召還”が可能なところだ。  
なんでも……神と違って、”自然現象の象徴”みたいなもんだから、  
あまり神界から降りても問題ないらしい。  
神は……天変地異が起きちゃうから止める……らしいぞ？

契約の方法も二つあってな、まずは、生まれる前に母体を介して契  
約して生まれる”胎内契約”。

これは生まれてからずっと一緒だから共鳴度は高めなんだ。  
俺は実質生まれてからずっと一緒と同義だから高めなの。

そして、陣を介して契約する”陣契約”

まあ、これは途中から契約する形だから共鳴度はなかなか上げにくいけど、上がれば強くなること間違いなしだな。

俺も一応”善壊神”っていう神らしいから契約はできるみたいだけど……正直面倒だから滅多にしないかな？

今のところこんなところだな！！

んじゃ、また後々追加されてくからチラチラ見てた方がいいぜ！！」



StS編プロローグ「善壊神、復活！〜再会〜」（前書き）

優氣凛々「いやあすまんすまん！！更新が遅れてしまって！！」

ユウタ「誰が待ってる訳ではないし…良いんじゃない？」

優氣凛々「何気にとげのある言い方…」

ユウタ「しかも…誰が美女かな？かな？」

ジャキン！！！！ 美しい笑顔で刀を構える

優氣凛々「ユウタ…後悔はあるが…反省なんて「OHANN  
A SIなの」何故になのは口調！？ち…近寄るなアアアアア  
アアアアア！！ギヤアアアアアアアアアアア！！！！」

StS編プロローグ「善壊神、復活！〜再会〜」

ミッドチルダ空港上空

スバル「あ！！ユウタおね……お兄さん！！空港にまだお姉ちゃんが！！！！」

ユウタ「あはは……もう！！！」

ユウタがスバルを救出してまもなく、スバルがお姉ちゃんがいるとユウタに言った。…ユウタはお姉ちゃんといいかけたことに笑いながら泣いていた。

ユウタは首を振り、気を取りなおす。

ユウタ「なあスバルちゃん？お姉ちゃんってどんな感じ？」

スバル「えと…髪がお兄さんくらいに長くて、私と同じ色！！！」

ユウタ「ふーん…わかった！！ならさ…スバルちゃんは安全なところにいる？」



ら……

？「ナカジマ隊長！！」

活発そうな女の子の声が…ゲンヤは振り返り、

ゲンヤ「よお！お前が来たか、八神はやて指揮官…研修生！！」

はやて「別にええですよ……回りくどく言わなくても…」

茶髪のボブカットの八神はやてに嫌みたらしく返事をした。

はやて「どうですか？消火隊は！？」

ゲンヤ「ちっ！！！！あいつらの到着は遅くなるらしい！！…あの  
中には…俺の娘が……」

はやて「……なら……うちが消火します！！あと、娘さんは……」

うちの幼なじみの執務官と教導官が向かってますよ！！！！」





純白の髪的美女……のようで実は男のユウタが……

ユウタ「ぐっ……」

スバルと少女を下にして天井の瓦礫から体を使って庇っていた。

少女は横を見た……

?「スバル!!!!」

スバル「ギン姉!!助けに来たよ!!」

そこには、自分の妹のスバルがいた。

きゅっ……!!

ギンガ「よかった……本当によかったよお……」

ギンガはスバルを抱き締めた。

ユウタ「よい……っしょっと!!」

ドスウン！！！

しばらくして、ユウタは瓦礫を降ろした。すると…

ギンガ「あ…ありがとうございます！！助かりました！！！」

ギンガはユウタにお辞儀をしていた。

ユウタはギンガの肩に手をおいて…

ユウタ「よかったな！妹さん、元気みたいでさ！！」

笑顔を見せた。それは…まるで太陽のように暖かいものだった。

ギンガ「あ……はい！！／／」

スバル「ギン姉！！ユウタお兄さん私も助けてくれたの！！」

ギンガ「そっなの！？ユウタ…お兄さん？……お姉さんじゃ？」



グサリ…

ユウタ「……ギンガちゃん？……俺、男……」

ギンガ「ふえ？……あ……ユウタお兄さん！？ごめんなさい！！」

ユウタ「……凹む前に……二人を安全な場所に……」

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

### 空港上空

？「うーん……燃えかたが激しすぎてわからないね……フェイトちゃん……」

栗色でツインテール、白いバリアジャケットに身を包んだ少女が……隣にいる金髪でツインテール、黒い軍服のようなバリアジャケットに身を包んだ少女……フェイト・T・ハラオウンに声をかけた。

フェイト「うん……バルディッシュも感知しづらいらしいし……なのは……どうしようか……？」

栗色の少女…高町　なのはもうーん…と唸りながら考えていた。すると……

バル《サー、八神はやてから連絡です。》

フェイト「はやて…?」

なのは「どうしたのかな?」

はやて『フェイトちゃん…!なのはちゃん…!朗報や…!』

画面が展開するや否や…ハイテンションのはやてがアップで写っていた。

フェイト「は…はやて?落ちて着…つか?どつしたの?」

すると…はやてはあのペンダントを取り出した。

はやて『二人とも…!ペンダント…!』

なのは「ペンダント?…ふえ…!?!?」

なのはがポケットから桃色の宝石のペンダントを取り出した時……ペンダントの宝石が光り輝いていた。フェイトも金色の宝石のペンダントを取り出した。こちらも光り輝いていた。

二人「これ……まさか……!」

そして……ペンダントから……

ぽっ  
ぽっ  
……

宝石が取れた。同時に……

《3つの封印解除キーの認証完了。使用者の元に戻り、”サンライト”を再起動します。》

と言い、3つの光が空港内に吸い込まれて行った……

フェイト「……なのは……!」





サン《バージョン》H”…オールグリーン!!!セフトアップ!!!  
!》

スバルとギンガは眩しくて目を閉じていた。そして…目を開けると  
……

ユウタ「んじゃ…スバルちゃんもギンガちゃんも外に出るぞ!!!」

紅蓮のノースリーブコート、タートルネックのアンダーアーマー、  
手には紅蓮の籠手を着けた…ユウタがいた。

ギンガ（うわぁ…!!!か…かつこいい!!!／／／）

スバル（すごおい!!!／／／）

そしてスバルとギンガはユウタに掴まって、ユウタの紅蓮の翼で空  
へと飛んだ。

.....

## 空港上空

ユウタ「うーん…空気うまいな!!..!」

ギンガ「ユウタお兄さんのこれ…バリアジャケットですよね!..?」

ギンガはユウタにしがみつきながら質問した。ユウタはギンガに振り向き、

ユウタ「ん!正解!!名前はサンライトだ!.....挨拶は?サンライ  
ト。」

サンライトに目を向けた。

サン《……まさか…マスター…

何でそんなに可憐に育っちゃってるんですかあ！！！？？？マスター  
は私を萌え殺すつもりで！！！！？？？？》

ユウタ「…見ての通りだ……」

スバル「あはは……」

ユウタはかなり遠くに目を向けていた。涙が流れていて、スバル達  
は苦笑いを浮かべるしかなかった。

ユウタ「！！？」

急にユウタの目が空を見上げて険しくなった。

ギンガ「ユウタ…お兄さん？」

ユウタ「誰か………くる！！！！」

ユウタが見上げていた方向を見ると………こちらに向かってくる二つ



の影が……

その二つの影はだんだんとユウタに近づいてきて…

ユウタ達の前で止まった。

一人は栗色でツインテールの女の子、もう一人は金髪で同じくツインテールの女の子だった…

ユウタは特に怪しむことはなく、少し悪戯めいた笑みを浮かべていた。

ユウタ「一応聞くけど……おたくらどちらさん？」

二人は笑顔を向けて答えた。

なのは「私はなのは……高町なのはだよ……ユウタ君!!」

フェイト「フェイト・T・ハラオウン……昔はテストロッサだけだったかな?…ユウタ…」

ユウタ「…なのは……フェイト……やっぱりこの世界にいたのか！  
！久しぶりだなあ！！！」

6年の時を経て、管理局のエースと善壊神が…再び合間見えること  
になった。

ギンガ「あの……」

スバル「私たちはあ？」

StS編プロローグ・実力・（前書き）

ユウタ「俺は強くなった…

まだまだ弱いけど…

自分なりに努力はしてる。

だから…俺は…まだまだ高みに向かって…突き進む！！

俺の伝説は……始まったばかりだ！！！」

## S t S 編プロローグ - 実力 -

### ミッドチルダ空港

ギンガ「お父さん！！！！」

スバル「お父さ〜ん！！怖かったよお！！」

ゲンヤ「お前ら……よく無事……に帰って来たなあ！！！！」

あのあと、ユウタ等は「今は緊急事態だから」と話すことを我慢してギンガとスバルを親元に帰した。父親のゲンヤは涙を浮かべながら二人を抱き締めている。

ゲンヤはユウタに気づき、二人と手を繋ぎ、歩み寄った。

ゲンヤ「お前さんが助けてくれたのか！！ありがとうな！！！！」

ユウタ「別にいいって！！」人は皆幸せになんねえとな！それに……」

ユウタは二人に視線を合わせるためにしやがみ、

ぼぶん！

頭に手を置いた。

ユウタ「まだまだ未来ある子供がここで死ぬなんざ……これ以上に不幸なことはねえさ……」

ユウタは何とも言えない表情をしていた。スバルはユウタの手が気に入ったらしく、気持ちよさそうにしている、ギンガは恥ずかしいのか、視線をそらしていた。

それを遠くで眺めていたなのはとフェイトは……

なのは（あうう……今すぐユウタ君にハグハグしたいの！！／／）

フェイト（ユウタ……かつこよくなったなあ……あの顔近づけられたら……／／／／／／／／）

悶々としていた……

ゲンヤ「俺はゲンヤ。ゲンヤ・ナカジマだ。」

ユウタ「俺の名前はお「御神　ユウタ…だろう?」「しってんのか? おっさん?」

正直驚いていた。ゲンヤはユウタのことを知っていたのだ。

ゲンヤ「有名だぜ?

” 剣、格闘のみならず、砲撃、誘導射撃に長けた…闇の書の闇に立ち向かった【純白の聖火】御神　ユウタ”……

今じゃ、管理局が探している隊員候補No.1だぜ?」

ユウタ「へえ……なるほど。その話は後で聞くとして、今は…」

ユウタは燃え盛る空港を見ていた。未だに勢いが衰えない。

ユウタ「これを何とかしねえとさ…」

ゲンヤ「ああ…それなら八神に行かせてるぞ?あいつもそこの二人もオーバーSランクの魔導師だしな!問題はないだろ?」

ユウタは空港に向かって歩み寄った…

ユウタ「悠長なことを……民間に広がったらどうすんだよ…?」

仕方ねえ……なのはたちに力を見せる傍ら1丁やりますか!!!!」  
スバルとギンガ以外の全員が……ユウタの纏う空気が変わるのを感じた。

スバル、ギンガ以外

『……!!!!オーラが……変わった!!!!』

ユウタは火事に向かい、手をかざして……

ユウタ「いくぜ!!王臨!!」 陸王壊放”!!!!」

ユウタの髪が……まるで今、まさに炎で染まったような緋となり、肌の色も茶褐色に変わっていった。

皆は声が出なかった……





ユウタ「うっし！一丁上がり！！！！………って…

何でみんなフリーズしてんだ？」

ユウタが”陸王壊放”を解き、純白の髪に戻って顔を振り返ると……

みんながフリーズしたように微動だにしていなかった。

サン「ま…マスター……

今のは…いったい？」

ユウタ「ん？ああ…”陸王壊放”の能力でしたことか？あれはなあ…

特別にした訳じゃねえよ？ただ炎を操作しただけだぞ？」

サンライトに続く形でフリーズから解けたのはもユウタに詰め寄った。

なのは「ユウタ君！！あれはいつたい何!？」

ユウタ「何って……俺の能力だが？」

なのは「でも……何も力が通ってない（……………）炎を操るなんて……」

神様でもなければできないでしょ？」

ユウタは首を横に降った。

ユウタ「何も力が通ってないなんて嘘だな。自然現象には必ず通ってるんだよ……」

なのは「……そうなの？」

ユウタ「そうなんでない？俺も詳しくは知らんがよ？」

なのはは少し渋ったものの、納得することにした。

その時……上空から……

はやて「どこの誰やねん！人の火を消す努力無下にする奴は！！！」  
はやてが愚痴をこぼしながら降りてきた。その際、ユウタが視界に  
入るや否や……

はやて「あ……！！！」

ユウタ君やあ！！ユウタクくん！！！！」

ユウタ「へ？上から声が………って……」

どわあああああ！！！！」

ドスン！！！！

ユウタに上空からダイブした……

はやて「ユウタクくん やっぱり女の子にしか見えへんわあ」

はやてはユウタの胸板辺りに顔をスリスリさせている。ユウタは既に諦めた感じの顔だった。

ユウタ「お前はアホか!! 全く……」

お前ら変わらないな……変わったのは俺だけか……時が経つのは早いなあ……

あとははやて………」

ユウタははやての頭にグーの状態で手を置いて……

グリグリグリ!!!

はやて「うにゃああああ!!! ユウタ君いたあい!!! 痛いでユウタ君!!! ちよっ……にゃあああ!!!」

ユウタ「誰が女の子にしかみえないだつて!?!? …… O H A N A  
A S I するか?」

はやて「もうしとる……!?!? もうしとるやろおおおお……!?!?」

はやての頭をグリグリした。  
かなり痛そうな顔をしていて……目には涙が滲んでいた。

S t S 編プロローグ・約束と堕ちた神 - (前書き)

ユウタ「はやては頑張り屋さんだ…

部隊を作りたい…みんなを助けるために…

騎士団もそんなコンセプトで作られた…

俺は…そんなはやて達の力になりたい…

そう思った…矢先の…出来事。」

S t S 編プロローグ・約束と堕ちた神・

ミッドチルダ都内ホテル

ユウタ「…で？どうしてこうなった！？？？？」

ユウタがいきなり叫んだ。無理もない……今の状況からはそうしか言えないだろう…

なぜなら…

フェイト「あまり気にしちゃダメだよ？ユウタ。…私を寂しくしたのが悪いの…」

フェイトがボタンを二つ開けたワイシャツに制服のスカートで右腕に抱き付いて…

はやて「せやで？ユウタ君にお礼ひとつも言わずに……寂しくもあつたし……モヤモヤしてたんよ？」

はやてがフェイトと同じ格好で後ろから抱き付いて…

極めつけは…

なのは「私も寂しかったよ？ユウタ君！！せ…責任とるの！！！」

なのはがボタンを二つ開けたワイシャツのみ（・・・）で左腕に抱き付いていた…

因みにユウタはワイシャツにスラックスという格好だ。

ユウタ「まずはツツコませろ…」

なのは、俺男だし、はしたないからせめてスカート穿けバカちゃん！！！！」

なのは「む…一応アピールのつもりなのに…」

ユウタ「何のだよ…」



なのは「ううう……ユウタ君はやっぱり鈍ちんだよお!」

ユウタ「はあ?」

その言葉で他の二人もだれた。どうやら鈍ちはさらに拍車をかけられたらしい……

しばらくして……

はやて「うち……部隊作りたい!困ってる人を助けられる……最高の部隊を!」

そのためには……なのはちゃんとフェイトちゃん……ユウタ君の力があるんや……手伝って……くれへん?」

はやてが勢いよくいい放った言葉……”部隊を作りたい”……部隊を作るのは容易ではない。しかし……なのは達の答えは決まってい

た。

なのは「はやてちゃん水くさいなあ!! 言ってくれたら私、いくらでも力を貸すよ!!!」

フェイト「うん!!!」

なのはとフェイトは賛成の意を伝えるが……

ユウタ「俺は今は無理だ。騎士団の任務でてんてこ舞いだからな……騎士団も拡張しないと……」

はやて「ユウタ君……」

ユウタ「だからな……ほれ!」

ユウタは反対はしたものの……はやてに紙を渡した。

はやて「……?」

ユウタ「部隊の準備が整って……きちんと任務が出来るようになって……連絡しな。」

ユウタの言葉に反応するように、はやては涙を流した。

はやて「ユウタ……君……ありがとうなあ……」

ユウタ「おう……んじゃあ、俺はいまから任務があるから……また日取り決めて会おうぜ?」

ユウタはそういうと……コートとジャケットを持ち、

ユウタ「ヘヴンスゲート……黒き刀……黒鋼”を我が手に……!」

黒鋼を片手に握り……空間を裂いた。

なのは「ふえ!?!……行っちゃったの!?!?……また……会おうね!」

フェイト「ユウタ……………」

はやて「……………わかった！！！！部隊出来たらうち、騎士団に依頼するわ！！！！待ってってな！！！！」

ユウタ「おうよ！！！！」

そしてユウタは、騎士団の本部を置いた、自分の転生前にいた（………）世界……地球に戻っていった……



うなだれているのは、ユウタの親友にして……”死の神”と謳われ……  
”最強の転生者”とされる、アランである……

そんな時……

急にユウタの横に小さなモニターが現れ……一人の女性が映った。茶髪のシヨートヘアでメガネをかけている。女性は泣きながら……

？『ユウタ！！！！バカ、あんなにやってんの！！！！止めなさいよ！！！！死んじゃうわよ！！！！！！』

ユウタに停止を促した……。

ユウタは……

ユウタ「サキネ……

た……しかに……俺は……死に……そうだ……

でもなあ……俺は……親友を……目の前で……助けを……求めているダ







そしてユウタは激闘の末……敗れ、アランと共に生体ポットで一年  
もの間…昏睡状態になった。

舞台は……そんな惨劇から3年後……はやてから”機動六課”を作  
り、ユウタに連絡するところから始まる……

S t S 編プロローグ・約束と堕ちた神 - (後書き)

あのユウタが敗れた事件から3年…

騎士団本部

？「うゝ…まだかな？まだかな？」

騎士団本部の一室で…尖った耳に紅蓮の髪、翠の目を持つ少年が…駄々をこねていた。

？「あともう少しで着くらしいですよ？それとジーク？机には足を乗せないで下さい…アップルティーですよ。」

カチャ…

その少年に…黒の七分丈ワイシャツに赤のベストを着て、紫色の髪を一つに縛り、セバスチャン風のメガネを掛けている青年が少年…ジーク・フリートにお茶を煎れ、持ってきた。

ジーク「わぁ！…ありがと！…レイジ！…」

ジークは青年…陽神 レイジに御礼を言う…

ガチャリ……

?「すまねえ二人とも!!!リハビリ(……)に手間食った!  
!!!」

そこに、茶髪を後ろで縛り、緋と黄金の目、女の子に見える外見の男が黒の制服に白のコートをはためかせ入ってきた。

ジーク「待ったよ!!!ユウタ師匠!!!」

レイジ「ご主人様……お帰りなさいませ。」

ユウタ「わりい……で……今回の任務は……

ミッドチルダという世界の危機を救うこと……”機動六課”への  
出向だ!!!!

行けるな……”最強の騎士団”  
干ス・ナイッ」

ジーク「あたり前!!おれっち頑張るよ!!師匠!!!!」

レイジ「ご主人様の仰せのままに…」

そして…ユウタが19歳になった時…物語が動き始めた…

S t S 編第1話「いきなり戦場に立たされる気持ちってわかる？b y u u t a」

優氣凛々「久々に更新なり〜く（^・く）」

ユウタ「……なんだよこのタイトル……」

優氣凛々「（・・）？あまり意味は無いよ？こんな感じにかいたらそれっぽく書けるかな？見たいな淡い期待を持ってたらさ…グダグダだし、ずれるし…ダメだなあ…俺…」

ユウタ「意味無いならやるなよ……」

優氣凛々「因みにこの前書きの顔文字は作者の表情を現してるよ！  
！」

ユウタ「自分で言っなよ……」

S t S 編第1話「いきなり戦場に立たされる気持ちってわかる？b y u u タ」

騎士団本部、転送ポート

ジーク「ねえ師匠？何故師匠はリハビリなんてやってるの？怪我は完治したはずじゃ……」

転送ポートに着いた時、ジークはユウタに問いかけた。何故ジークが師匠と呼ぶかは、後に語ることにしよう……

ユウタ「良く”練習を1日サボると3日練習しなければ取り戻せない”って言うだろ？だから俺は1年寝てたから3年くらいはやんなきゃな……って思ってた……」

レイジ「さすがはご主人様です。いつまでも精進の心を忘れないその強靭な魂……感服です。」

ユウタが答えると、レイジが後ろで感極まったような表情をしていた……

ジーク「師匠はすごいや！……やっぱり今まで見た奴らの中で一番すごくて優しいんだね……」

ジークは転送ポート前でユウタに抱き付いた。その様はまるで兄弟だ。

レイジ「既にご主人様は常軌を逸する力をお持ちですが……どうしてそのように”さらに強く有りたい”とお思いに？」

レイジが少し微笑みながらユウタに問いかけた。

ユウタ「…なんとなく、今の自分に納得しねえし……」

もう、何も失いたくないからな……」

その答えにジークとレイジは少し顔を暗くさせた。ユウタがこれに気付き、笑顔を見せて……

ユウタ「悪い……場違いな答えだったな……」

さ！！気を取り直して……行くぜ！！最強の騎士団<sup>エース・ナイツ</sup>！！！！」





”レリック”という遺損物ロストロギアを追って、リニアレールにいます。  
私にとってはまだまだ頑張らなきゃ行けないから、この任務も完遂  
しないと……!

…火事の時助けてくれた……ユウタお兄さんのように……

でも……

ティア「……!!!そこ!!!誰かいるわね!!!」

ガチャリ!!ガチャリ!!

ティアがいきなり双銃型デバイス”クロスミラージュ”を構えた。  
…どうしたんだろうと思ったけど……答えはすぐにわかった。

私たちの目の前に……

?「ティアナ……スバル……可愛すぎる!!!」

目付きがいやらしい男の人が……立っていたから……

ティア「な……何この人……気持ち悪い……」

スバル「うん……なんかベタベタする目線……」

その人……外見はパツと見て整ってるんだよね……目線が気持ち悪いし、息荒いけど……

?「俺はカナタ……君らの夫だよ？」

ゾクウ……

寒気が走った……気持ち悪すぎる!!何で私たちがあなたのお嫁さんになってるの!??

ティア「き……気持ち悪い……近寄らないで!!!!」

ティアは耐え切れなかったのか、クロスミラージュで男の人……カナタを撃った……

ガチン……

ティア「……え？」

カナタ「クスクス……どうしたの？」

スバル「な……魔力弾が……出ない！？何で!？」

そう、クロスミラージュから魔力弾が出なかった……

カナタ「僕は君たちに気づかれないタイプの<sup>アンチマギングフィールド</sup>AMFを展開して……  
君たちには魔力弾とかは使わせないよ？クスクス……これで君たちは僕のもの……」

ティア「くうう……」

スバル「絶体絶命だよお……」

ジリ……ジリ……

カナタはどんどん私たちに近付いていく……

ヤだよ……こんなの……おかしいよお……





レイジ「申し訳ありません！！私は陽神 レイジと申します。

異世界犯罪撲滅組織”騎士団”、部隊”最強の騎士団”の隊員にして、騎士団元帥”御神 ユウタ”の執事をしております！！

以後、お見知りおき下さいませ。」

.....

同じくりニアレル内

・キャロside・

エリオ「……ぐう……」

キャロ「エリオ君……！！」

私たちは任務中です……たった今新型のガジェットを破壊したのに……

？「全く可愛いわぁ……坊や？」

茶色のウェーブがかったロングヘアの女の人エリオ君をいじめてるんです……！！

私は……さっき使った”竜魂召喚”で魔力を使いすぎて……私のパートナーの竜、フリードリヒも突かれています……だから……エリオ君が闘うしかなくて……

エリオ「えええええい！！！！！」

女性「フフフ……可愛いわあ……食べちゃおうかしら？」

ドゴオ！！！！

エリオ「ガアア！！！」

エリオ君が……どんどん傷だらけに……

女性「フフフ……さあ、もっと楽しませて？坊や……」

女の方はさっきから黒い魔力弾を使ってエリオ君を撃っています……

もう……私には……泣いていることしか出来ないのが悔しくて……

誰でもいいから……





エリオ「だ……大丈夫だよ？…君はだれ？」

ジーク「僕？僕はね…」

異世界犯罪撲滅組織”騎士団”、部隊”最強の騎士団”の隊員にして…御神 ユウタの弟子！！ジーク・フリートだ！！よろしくな！！」

- - -  
- - -  
- - -  
- - -

リニアレル上空

- フェイトside -

上空で制空権を獲得した”スターズ部隊隊長”のなのはと、ライト ニング部隊隊長の私だったんだけど……私たちの目の前に…

男性「ほお……やはり高町 なのはとフェイト・T・ハラウンは最高にいい女だな。」

物凄いいやらしい気を放出している男がいた。

なのは「貴方はだれ!!?」

ザリア「私の名はザリア。転生者の集う部隊”高天原”の隊員だ。それよりお前たち……急いで行かなければな……」

フエイト「どうしてだ!!」

ザリア「何でつて?…それは……お前の弟子たち……死ぬぞ?転生者を送り込んでたからな……」

な、フエ「転生者を!!?」

まずい……!!転生者と言えば……闇の書に乗っ取り、ユウタを殺そうとした……咲哉見たいな奴だ!!!!

ザリア「さあ……あいつらもお前らも……何分持つかな?」

くう……エリオとキャロも転生者を相手に闘ってる……キャロはさつき  
ので魔力がほとんどないし……助けに行きたいけど……こっちな  
んとかしないと……



ザリア「！！！！…なんだと！！！？どうしてだ！！！！」

ザリアは周りを見渡しているが、姿が見えない…

？「上だよ上」

ザリアが上に視線を向けた。その瞬間…ザリアの目の前に…赤いオーラに包まれた手が見えた。それと一緒に…純白に輝く綺麗な髪がなびいているのも…

？「爆…龍…拳！！！！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

そしてザリアは…炎に包まれた…

ザリア「ぐあああああ！！！！…くそっ！！！！」

ザリアは炎を振り払ったが、酷い火傷を負っていた。

そして、攻撃した純白の髪を持ち主は……私たちの目の前に来た。

ザリア「貴様あ……何者だあああああ……!!!!!!!!」

ザリアが純白の持ち主をにらみ、殺気を飛ばしているが、平然と……彼は答えた。私たちが会いたかった……

ユウタ「異世界犯罪撲滅組織”騎士団”……元統帥。現在元帥にして……部隊”最強の騎士団”リーダー……

御神 ユウタだ……!!」

愛しい人の名を……

レイジ「私は…捨てられました。両親に…

絶望の縁に立たされました…

ですが…

そんな私を…ご主人様は…

御神 ユウタ様が拾って下さいました。

私は…ご主人様に忠誠を誓います…

ご主人様の…仰せのままに…」

リニアレール内・スターズ・  
- スバル side -

カナタ「くそがあああああ……!!」

バフウウウウウン!!!

さつき男の人……レイジさん？が出した雷を受けたあの人が煙を払った。その手には鎌が握られている。……いびつな形な鎌だなあ……

レイジ「しぶといですね……まあ、楽しませてくれるなら構いませんが……」

レイジさんは殺気を飛ばしながらゆらりとした動きでカナタに向かい合った。手には……紙？が握られていた。

でも……その前に確認しないと……

スバル「あの、レイジ……さん？」

レイジ「どうかありませんか？お嬢様？」

お…お嬢様なんて初めて言われたよ…／／／

…いやいや！！…そうじゃなくて！！…！

スバル「あの…今、ユウタって聞こえたんですが…」

レイジ「ああ、ご主人様のことですね？もしかしてお知り合いの方ですか？」

レイジさんは殺気を消して私に振り返ってくれた。セバスチャン眼鏡似合ってるなあ…

スバル「4年前……火事にあつた時に助けてくれたんです…」

レイジ「では……貴方がスバル様でよろしいのですか？」

スバル「は…はい！！でも…何で？」



レイジさんは笑顔で答えてくれた…

レイジ「貴方を見て……」小さいのに魂が強い子だ！きっとこの子は伸びるよ！！” っっておっしゃっておりますから……”

スバル「え……本当に!？」

レイジ「はい!！」

嬉しい……!……!目標である人に認められたよ!……!でも……今は……!

カナタ「てめえ!……なに俺の嫁と話してんだよ!……!」

この男の人をなんとかしないと……!

レイジ「あの……そちらのお嬢様は?」

レイジさんはティアアを見て首を傾げていた。

ティアア「わ……私はティアアナ……ティアアナ・ランスタール。」

レイジ「ティアナ様……覚えました。ではお二方……今は下がって  
いて下さいね。後で美味しいお茶をご用意しますので……！」

ティアに笑顔を向けた後、目を吊り上げて殺気を飛ばしてまたカナ  
タを見た。

ティアは……

ティア「……！！！！／／／／」

……アレ？赤くなってるね……しかも、なんかぼーっとレイジさんを見  
てる……もしかして……レイジさんに……？

カナタ「てめえ俺の嫁をたぶらかしてんじゃねえよ！！ぶっ」相変  
わらず口の減らない……「あゝあ！？」

レイジさんは手に紙を何枚か広げて構えた。紙には……文字？見たい  
なのが書いてあるよ？

レイジ「私は今……怒っています。

たぶらかす？嫁？本人に承諾なく勝手にでっち上げておいて良く言

えたものですね…？

しかも私…

変態に云々かんぬん語られることに虫酸が走るんですよ…！！！！！！

陰陽師の末裔……陽神 レイジ…参る！！！！」

カナタ「そんな紙つ切れで何ができんだよ！！！！バアアアアアアアアアアアアカ！！！！」

ダン！！！！！！！！

カナタが地を踏み込み、鎌を振りかざしてレイジさんにつっ込んできた。……でも…

レイジさんは紙を空中にばらまいて……聞いたことも無い発動コード？を読み上げた。

レイジ「臨・兵・倒・者・界・陣・列・罪・前！！！！」

天に仕えし陰陽の神霊よ！！陽神の名において余に仇なす者を…  
凧ぎ払え！！！！

”符術……神威蓮華”！！！！！！”

その時……急に紙が光り出し……巨大な黒い炎の球になった。しかも、  
一つだけじゃなくて……たくさん……

あ、ティアが口をあんぐりしてる……カナタって人も……

カナタ「あ……謝る！！！！謝るから！！！！頼む！！！！命だけは！！！！命  
だけは助けてくれ！！！！」

レイジ「既に貴方には殺傷命令が出てますよ？さあ……私の最大陰陽  
術で……」



レイジ「ええ……あの男…転移をした見たいですね…あの技は隙があるから…チヨイスミスです…」

ティア「大丈夫…ですか？」

ティアがレイジさんを心配するように寄り添う…て、ティアって意外に大胆！？

レイジ「ありがとうございます……ティアナ様。」

ティアはレイジさんを支えながら壁に寄りかからせた。…私にするより優しい……

クルツ！！！

いきなりティアがこっちを見て……

ティア「スバル！！！！ここで見たことは内緒よ！！！！いいわね！！！！別に……これは…そんなんじゃない……／／／／／」

大声あげたらポシヨポシヨ話し始めたよ……これは……！！！！



スバル「なのはさんたちがいた場所だよ!!」

なのはさんたちがいた場所が赤い炎の柱に包まれていた。  
でも……なんか優しい感じの炎だなあ……

レイジ「あれは……ご主人様の”爆龍拳”ですね。きつとあちらにも  
何者かが現れた見たいですね。」

スバル「え!?じゃあ……本当に……あそこにユウタお兄さんが……」

レイジ「はい。」

うわぁ……!!……やっと……やっと会えるよ!!……私の……

憧れにして……好きになった人に……ユウタお兄さんに!!……

スバル side……end



紹介

陽神 レイジ

年齢：24歳

性別：男

身長：175?

体重：52?

外見的特徴：薄紫の髪を一つに束ねている。顔にはセバスチャン眼鏡をしている。（あの片方だけの眼鏡）やせ形。

性格：基本的に優しいが：ユウタを傷付ける者に対しては冷酷。サ  
ディスト。

紹介：とある世界でユウタに拾われた。当時18歳（ユウタは13歳）。陰陽師の末裔で膨大な霊力を持つが、家族に妬まれ捨てられる。”符術”を用いて戦術的な戦いをする。頭の回転が早い。  
ユウタ史上主義。

得意/好き：料理、掃除などの家事/ユウタ、お昼のティータイム

苦手/嫌い：加減調整/ユウタに仇なす者、虫

S t S 編第 1 ・ 5 話「弱い者いじめは惨めだし、シヨタはダメ！！B Y ジーク」

ジーク「僕は嫌われもの……」

紛い物は嫌われる運命……  
さだめ

だけど、師匠は……

僕を受け入れてくれた……

僕はそんな師匠が大好きだから……

守りたいと……思った。」

StS編第1・5話「弱い者いじめは惨めだし、シヨタはダメ!!!BYジーク」

リニアレール内・ライトニングサイド・

・キャラosite・

ジーク「そっぴや君たち名前教えて？」

赤髪の男の子が私たちに聞いてきました。

でも、何でエリオ君に似てるのに…フリードリヒという感覚になるのかな？

エリオ「ぼ…僕は…エリオ。エリオ・モンディアル。」

キャラ「私はキャラ。キャラ・ロ・ルシエ…で、こっちが私のパートナーの…フリードリヒ！」

フリード「きゅく〜!〜!」

フリードリヒを見たときに男の子…ジーク君は目を輝かせました。  
珍しかったのかな？

そういえば、あのお姉さんは…

女性「シヨタが……二人！！！！やあくん お姉さん悶え過ぎてイキそう」

くねくね腰をくねらせてます……なんか楽しそう…

キャロ「ねえ…エリオ君…

イキそうってなにが？」

エ、ジ「まだ知らなくてもいいの！！！！／／／／／／」

キャロ「う…うん…」

聞いただけなのに…顔を真っ赤にして怒鳴らなくても…

ジーク「子供相手になに勘違いされそうなことってんの！シヨタコンババア！！！！」







ジーク「この程度？ぬるいなあ……」

バフウウウン！……！！

煙を飛ばした先には……ジーク君がいました……ですが……

セレナ「な……なによ……それ……」

ジーク君は……

ジーク「龍ノ力……」ドラゴニック・フォース「火竜」！！！！！！」

額から角がはえて……皮膚が赤く……鱗みたいになって……爪が尖っ



て…終いには、翼と尻尾が生えて…まるで…

キャロ「龍……みたい……」

セレナ「ち……近寄るな化け物……!!」

セレナさんは黒い球体をたくさん作りましたが……

ジーク『無駄だよ……僕に火が通じるわけないじゃん』

あっさり言われてしまいました……

ジーク『さあ……喰らいなよ……』

ジーク君が手を天にかざすと……

ゴオオオオオオオオオ!!……!!

セレナ「い……いやあ……やめて……お願い……!!……!!」



ジーク「……転移で逃げられた……」

ジーク君は……元の姿に戻りました……

ジーク「……怖い？」

キャロ「え？」

ジーク君は悲しげな顔になってしまいました……

ジーク「いいんだ……慣れてる。やっぱり師匠しか……認めてくれないんだね……」

僕、こんなだから忌み嫌われてるんだ……」

エリオ「なら、一緒だよ……？」

僕も……嫌われてるんだ……

僕は…人造魔導師…人に造られた…魔法使いなんだ。」

エリオ君が…ジーク君に言いました…

わかるよ…ジーク君の気持ち。

キャロ「私も…力の強い竜の力を使えるから…嫌われてるんだ…。  
仲間だね!! 私たち!!」

ジーク君は…笑顔でした。しかも、心からの笑顔でした。そして…

ジーク「キャロちゃん…エリオ君…うん!! みんな仲間!!」  
”友達”だよ!!」

だきっ!!

わたしとエリオ君に抱きつきました!! / / /  
ジーク君…いい匂いだなあ…

は!! / / / / 私はなにを… / / /

あのと、リニアレールの壁に寄りかかって三人で話してました。

ジーク「二人はさ、”機動六課”の人？」

エリオ「うん！…そこでなのはさんの指導を受けてるよ！！」

キャロ「いつもぼろぼろになるまでやるけどね……」

ジーク「修行なんてみんなそうだよ。ね、フリードリヒ？」

フリー「きゅく、きゅく〜」

フリードリヒは…ジーク君にくっついていきます。

キャロ「ジーク君…：竜の言葉わかるの!？」

ジーク「うん!！」

あのみ、フリードリヒ、実はメス（・・・）なんだって!知ってた？」



ジーク「師匠はね…優しくて厳しくて…

お兄さんみたいなの、お父さんみたいなの…暖かさがあるよ！

しかも、ユウタ師匠は…強いよ。だから心から信頼できるし、ちからになってあげたいんだ…」

ジーク君は、笑顔で火柱の上がった空を見ていた…

ジーク・フリート

年齢：11歳

性別：男

身長：135？

体重：25？

髪型：赤のショートヘア。横だけ長くて、髪止めで留めている。

容姿：年齢のわりに少し小さめな体。体はほどよい肉付き。

詳細：

竜とエルフのハーフ。自然と会話し、竜と共存することが出来る。

しかし、仲間たちに忌み嫌われ、追い出された。

そこでユウタに拾われ、”恨みを努力に変える”と言われ、めが覚

める。ユウタから”善壊神”としての授天力”王臨”を授かり、”

龍ノ力”ドラゴニックフォースと名前を変えて使っている。

龍ノ力には”ドレイク火竜”、”サーベント水竜”、”ドラグーン雷竜”、”ヴァジュラ神竜”がある。



S t S 編第2話「転生してまで女が欲しいなら、努力して振り向かせなよ？ B

コウタ「まあ、現実と理想は違うからあまり気にしないでね？

ん？作者？今隣でo r z になってるよ？」

StS編第2話「転生してまで女が欲しいなら、努力して振り向かせなよ? B

リニアレール上空

ザリア「な……我々の中でも屈指の強さを誇る2人を……」

ユウタ「だからいったでしょ?……因みに、その二人は……転移して逃げたみたいだね。逃げ足は評価したげるからな。」

その言葉に我慢ならなかったのか、ザリアはユウタに殺気を放ち、

ジャキン!!!!

剣を構え、ユウタを睨んだ。その目は憎悪に染まっている。

ザリア「先ほどから……一体何の権利を持って上からものを言っている!!!!!! 貴様……何様のつもりだああああああああああああ!!!!!!」

ユウタは……睨み返しながら構えた。殺気をもろともせず、凜とし







『約束された勝利の剣 - エクスカリバー - 』！！！！！！！！』

ザリアの手には、黄金に輝くアーサー王の剣、エクスカリバーが握られていた。しかも、からだから溢れんばかりの魔力が吹き出していた。

ユウタ「ひゅ〜 やるね！なら……」

へヴンスゲート！！漆黒の剣……”黒鋼”を我が手に！！』

ユウタの指輪が光を放ち、手には、すべてを吸い込む暗い漆黒が深い刀が握られていた。

ザリア「これで貴様を葬ってやろう！！！！』約束された……』」（エクス………）」

ザリアは剣を肩で担ぐような型になり、溢れた魔力を集め始めた。

対してユウタも……

ユウタ「いくぜ……」

すべてを飲み込み……無に返せ……”黒火……”」

刀を抜刀の型に構え、相手の出方を伺い……そして……

ザリア「『勝利の剣 - カリバー - !!!!!!!』」

ユウタ「”聖衝” オオオオオオオオオオオ!!!!!!」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!

二人が刀と剣を振り落とした刹那……金色の魔力砲と黒の衝撃波がぶつかりあった。

しかし……金色の魔力砲の方が押されていった。

ザリア「な……何故だ!!!!!!何故だああああああああああ!!!!!!」

ユウタは……更に追い討ちをかけて……





ザリア「う……そ………だろ……」

ドサツ……

ザリアはダメージが限界を越えたのか、膝から崩れて倒れた。そのザリアをユウタは担ぎ上げ、なのは等の元に戻った。

とりあえずなのは等の誘導に任せ、機動六課のへりに出向いた。

ユウタ「まあ致命傷は避けたから死んじやいねえが……縛り付けとくべきだな。ヘヴンスゲート、無力化の鎖”グレイプニール”を我が手に。」

ジャラ……

ユウタの手には、異様なオーラを放つ鎖が握られていた。それを丁寧にザリアに巻き付ける。

ユウタ「いっちょ上がりってか？はあ……めんどくさかったなあ……」

なのは「……ユウタ君！……！」

だきっ……！

ユウタ「んな……！！！！／／／／」

安堵感に浸っていると……なのはがユウタに背中から抱き付いた。

フェイト「なのははずるい！！／／私も！！！！」

だきっ！！

フェイトもまた然りである。

ユウタはかなり焦っていた……無理もない。なのは等と自身は互いに19歳……意識しない訳がない。

ユウタ「お……おい！！抱きつくな馬鹿やろ！！お互いいい年だろうが！！／／／／／／／／」

なのは「違うよ」 ”いい年” じゃなくて ”お年頃” だよ！！」

フェイト「照れてるところを見ると……昔よりかは意識してくれてるみたいだね　／／ユウタ……　／／／／」

二人はかなりスタイルがよく美人。よって、ユウタの背中には……女性特有の膨らみがあたる……ユウタは……



なのは「ううう……痛いよー!!」

フェイト「…何でだろ？ユウタにぶたれると……／／／／／」

隊長達は、ユウタによって頭にたんこぶを作っていた。若干変な思考を持つものまでいたが…

S t S 編第2話「転生してまで女が欲しいなら、努力して振り向かせなよ? B

StS編第3話「ユウタの従者はお口が軽い」（前書き）

スバル「火事の中から助けしてくれたユウタお兄さん…

今も変わらず、あの温かい笑みを浮かべてくれる…

ユウタお兄さんみたいに成りたくて自己流にでも”爆龍拳”を真似したりした……

ユウタお兄さんのことを考えると……

胸のなかが…温かくなる……」

S t S 編第3話「ユウタの従者はお口が軽い」

へり内

スバル「ユ……ユウタお兄さん……!!!」

ユウタ「ん？」

機動六課宿舎に向かうへり内でユウタが座っていると、青い短髪の女の子に話しかけられた。そう、スバルである。

ユウタがスバルを目にした瞬間、だんだん笑みを浮かべた。

ユウタ「もしかして……スバルちゃんか？」

スバル「……!!!はい!!!スバルです!!!スバル・ナカジマ!!!」

ユウタ「っはは!!!久しぶりだなあ!!!まさかこんなに遅しく、女の子らしく育っちゃってまあ……何か親じゃないが……感無量ってか？」

ぽふん!!!

スバル「あつ…!! / / /」

ユウタはスバルの頭を撫でた。下心なんてない、兄のような微笑みで……スバルは……会えた嬉しさと今までの苦労が溢れ、頬を涙が伝った。

スバル「ユウタ……おにいひゃん……やっと……やっと会えた!!」  
だきっ!

スバル「ううう……ぐす……うわああああああん!!」

スバルは余りの嬉しさにユウタの胸に抱きつき、泣いた。その時若干2名殺気を放ってましたが……

ユウタ「…! ? (も…もしかして頭を撫でたから……嫌われた! ?)」

……ここにも抱き付かれてるにも関わらず、馬鹿な考えの我らが主人公もいました……

…しばらくして……



スバル「……すみません……服汚しちゃいました……／＼／＼／」

ユウタ「別に気にしないでいいぞ？」

しばらくして、スバルが泣き止み、顔を耳まで赤くしながら自分の席に着いた。すると、スバルの隣にいた女の子と目があつた。

ユウタ「ん？そのオレンジ髪の子、俺に何か付いてるか？」

ティアナ「申し遅れました……私はティアナ・ランスター。スバルのパートナーです。」

貴方が…スバルの”爆龍拳”のオリジナルが使える人ですか？」

ユウタは女の子、ティアナの発言に疑問を持った。

ユウタ「お？ちょっと待て？

てことは何？まさかスバルちゃん爆龍拳使えんの！？」

スバル「ふえ！？す…すみません！！勝手につか「マジか！！！」  
すごいな！！」…へ？」

スバルは怒られることを覚悟して謝ろうとしたが…予想外にも、  
ユウタの目はきらきら輝いていた。

ユウタ「なあなあスバルちゃん！！帰ったらスバルちゃんの”爆龍  
拳”を見せて！！」

スバル「へ？…怒ってないんですか？」

ユウタは何でもないような笑顔を向けた。　ユウタは女顔のため笑  
うと女の子に見えます。

ユウタ「は？怒る？いやいや！！今まで教導おしえて来たけどだれも  
使えなかった…  
だけど…スバルちゃん使えんじゃん！！

もし…本気で覚えたいなら…俺でよければ…”直伝”爆龍拳…  
教えてやんよ？」

スバルは…その言葉に嬉しかったのか…ユウタにまた…

だきっ！

抱きつきました。

スバル「本当に!?!わあい!?!ありがとうユウ兄!?!」

ユウタ「おっとと……何でなでなでがダメなのに抱きついて来るの……うーむ……わからん……」

…ユウタはどうやら頭のネジを数本置いてきたらしいです…

ぞくうううう!?!?!

ユウタ「おおっ!?!?」

ユウタは今にも殺しそうな殺気が出てる方向を向くと……

な、フェ「」……「ユウタ(君)……後でO H A N A S I L  
ようか」「」

なのは、フェイトが誰もが惚れ惚れするくらいに笑みを浮かべながら……念話で死刑を宣告していた。

ユウタ「お話？確かにいろいろ話したいことあるからな！！わかった！！！！」

ユウタは死刑執行なんて知らないらしい……

すると、ずっと黙っていたレイジが……口を開いた。しかし、それがまたややこしいことに……

レイジ「ご主人様？一応貴方が何の意図を持って隠しているかは分かりませんが……」

ご主人様……先ほどから授天力を使用しているところを鑑みて……先日の傷が開きましたね？」

ユウタ「……！！バカレイジ！！今の空気を読みや言っちゃ……」  
傷が開きました！？」「ほら……言わんこっちゃない……」

ユウタは顔を手で覆い、いかにも”あっちゃあ……”って感じになった。



フェイトとスバルがなのはを羨みと妬みを混ぜた視線を送るが、当  
のなのは本人はそっちのけにしていた。

ユウタ「あの〜…やめて」「いや!!／／／」…ああ……もっ…「レ  
イジイイ…覚えてる!!」

レイジ「何のことですか?」

レイジは”そんな無茶からです…反省してください”と言わん  
ばかりのドヤ顔をしていた。

ユウタは機動六課に着くまでなのはに膝枕をされた。



主人公は苦勞が絶えない。主に女性関連で…



S t S 編第4話「いざ、機動六課へ！」（前書き）

サンライト《マスターは強いです。

心も……体も……

しかし、そのぶん傷つき、闇を溜め込み安いのも事実……

マスター……私は……貴方の悩みも……苦しみも……闇も……

背負ってあげたいです……

それが……”パートナー”としての務め……

私を……貴方の”心の拠り所”にしていただけますか……？《

S t S 編第4話「いざ、機動六課へ!!」

機動六課隊舎

ユウタ「お!!あれが機動六課か!？」

ユウタはへりから下を覗いて感嘆の声を漏らした。ジークやレイジも……………

ジーク「へええ……………おつきいなあ!!」

レイジ「そうですね……………なかなかいい環境だと思います。」

下を覗いて関心していた。すると…ティアナがレイジに近寄り……………

ティアナ「レイジさんは……………こういう風景が好きなんですか? / / / / /」

レイジ「はい…自然が豊富で、力が大地からたぎってる強さが伝わります。きつと…いい方々ばかりでなんですね…自然がそう語りかけて来ます……………」

ティアナ「そう……………ですか / / / / /」

…なんだかピンク色の空間が出来上がってました…

なのは「スバル…？ティアナ…もしかして…」

スバル「間違いないです…！！ティアはレイジさんにゾッコンです！！」

フェイト「ティアナ…すごいね…私だって…」

なのは、フェイト、スバルが念話で話をして…フェイトはユウタに目を向けた…

フェイト（ユウタは…心が温かくて…優しくて…自分を隠すのが上手くて、人の変化には敏感で…  
私は…貴方の辛さを…分かち合いたい！！）

フェイトの思いとは裏腹に…

ピリリリリリリ！！！

どこからともなく電子音が聞こえた。

ユウタ「ああ、俺にだ。……出たくねえけど……仕方ないか……」

サン《マスター、この通信の相手とは……？（久々に喋りました……作者さん……出番くださいな……）》

……頑張ります……

なのは「私も気になる！！誰なの！？……まさか……女の子？」

フェイト「……ユウタ？」

何故かフェイト、なのはからどす黒オーラが吹き出していた。

ユウタ「ん？俺の姉ちゃんだよ……ッたく……あ、みんな耳塞いどけ？」

へり内のメンバーは訳が分からないと言わんばかりだが、一応耳を

塞いだ。

ピッ……!!

すると、ユウタの目の前にウィンドウが出てきた。

ユウタ「はあいこちらエー」「ゆうううちやああああああああ  
あああああん!!!」「何で行っちゃったのおおおおおおお!  
!?!?!?」「やかましいわ馬鹿!!!」

ビリビリビリビリ……

声の振動にへり内の空気が揺れた。

ユウタ「なんだよサキネ……」「要件を10字以内で答え」「会いたかつたから。」「……」「きつちりだな……」

なのは「……ユウタ君のお姉さん?」

フェイト「……耳を塞いでなきゃ鼓膜破れてたね……」

なのは、フェイトがサキネの声にびびっていた。しかし、その声が

サキネに聞こえてたのか…

サキネ『ねえユウちゃん？……女の子の声が聞こえたよ？まさか彼女とか言わないよね？彼女なら……どうなるかわかってるよね？』

モニターからすごくどす黒オーラが吹き出していた。しかし、ユウタは呑気に、

ユウタ「俺をどうにかする？サキネ、俺に勝ったことは？」

サキネ『う……無いです。』

ユウタ「できないこと言ったって意味ないの…わかった？」

サキネ『はあい……』

しかも的確にサキネを鎮め、モニターをなのは等の方に向けた。

ユウタ「この人らは時空管理局の方々。その中の機動六課の皆さんだ。サキネ、一応挨拶しな？」

サキネ『わかったわ……ユウちゃんのイケズ…』

私は御神 サキネ。異世界犯罪撲滅組織”騎士団”元帥で狙撃隊総隊長よ。よろしくね?……って!女の子ばかりじゃない!!!」

画面に写ってた女性は茶髪の短髪でメガネをかけていた。しかも、可愛いと言うよりは綺麗と言ったほうが合っている。

ただ、怒ってなければのはなしだ。

ユウタ「知るかよんなもん、全員友達だって……で、用件は?」

サキネ「ふーん……まあいいわ。実はね、そっちの世界をサーチングしてたんだけど……」

おそらく、あなたたちが今まで捕らえた転生者から聞いた”メインキャラ”なるものなら……気を引き閉めて……  
転生者があなたたちの世界に集中してる……

ユウちゃんがいるからまだ良いけどね……」

すると、なのはがモニターの目の前に来た。

なのは「時空管理局戦技教導官、高町　なのは一等空尉です。その話……本当なんですか？」

サキネ『一等空尉……なかなかの地位ね。あなたなら話はわかると思  
うわ。』

おそらく、まとまりとしてはそんなに多くないけど……実力は高めよ。  
だから、”不用意に近づく” 奴等は疑いなさい。いいわね？』

それを聞いて、なのはは笑顔を見せた。

なのは「にやはは！お姉さん優しいんですね？」

サキネ『そりゃ……あんたたちの為もあるけど……ユウちゃんのため  
でもあるのよ……』

サキネの顔が一瞬曇った。ユウタはその瞬間を見逃さなかった。

ユウタはモニターの目の前、触れる寸前まで顔を近づかせて……

ユウタ「……余計なことを言っつなよ？サキネ……心配は掛けさせたく  
ねえ……」



声を殺して呟いた。

サキネ『……………』

はあ…ユウちゃんたら…わかったわ。でも…もう、あんな無茶しないかね？いつでも私の部隊呼んでもいいから！』

ユウタ「わかったよ…じゃあな、サキネ。」

そして、通信を切ると同時に…へりは隊舎へ着陸した。

ジーク「着いたみたい！！行こ！！フリード！！」

フリード「きゅく」

キャロ「待って！私も！！」

エリオ「僕も行くよ！！」

子供組は元気良く飛び出して行った。実は、ジークとキャロ、エリオはへりの中で既に仲良くなっていた。

他の面々も降りていく。

ユウタ「さあて、ぼちぼち降りるかな？」

降りようとした時、後ろから急に…

きゅっ……

金色の髪の毛……フェイトがユウタの服の裾を掴んだ。

ユウタ「どうした？早く降りようぜ？」

ユウタは振り返り、フェイトに促すと……

フェイト「ユウタ……何か辛いことがあった？さっきのサキネさんとの会話……聞いちゃって……」

予想外な言葉が返された。ユウタとサキネの小声が、フェイトに聞こえてしまったのだ。

ユウタは再び前を向き、服から手を優しく払った。

ユウタ「今は話せない……これは、お前らでも簡単には話せない。



シグナム「……まさか、御神ではないか……？」

ヴォルケンリッターの将、シグナムがいた。ユウタはシグナムを見るやいなや……涙腺から滝のような涙を流し……

ユウタ「シグたあああああああああん！！！！部隊長室どこおおおおおお？？？ついでにお久しぶりい！！！！」

ぎゅううう！！！！

シグナムに抱きついた。因みにシグナムのぼうが身長が低いため、シグナムの顔がユウタの胸に埋めてしまう形だ。

ジーク「出たよ……師匠の悪い癖……」

レイジ「ホツとした時などにでる……」ド甘えモード……」

二人「これさえなければなあ……」

説明しよう……！

ユウタは安心したり、緊張が溶けたりした少しの間、精神的に子供っぽくなる”ド甘えモード”になってしまっただ……！！





ユウタ「よっ！！はやて久し」ユウタクうううん！！」「ぶ  
りiiiiiiiiんぎゅむうううう！！？」

ドッテン！！！！ズシャアア！！！！

はやてが全身全霊を込めたお祝いの抱きつき（タツクル）をかまし  
た……

続く……

S t S 編第4話「いざ、機動六課へ!!」(後書き)

オマケ

シグナム「シグたんはやめろばかもん…!! / / / / /」

ユウタ「別にいいじゃん 可愛いと思っよ? シグたん?」

シグナム「ばか / / / か…可愛いとか言っな / / / / /」

ユウタ(やっぱり名前を誉められると嬉しいよな!! シグナムはど  
ちらかといえば”綺麗”だし )



番外編「私が好きになった理由・すずか編」(前書き)

すずか「私は普通じゃない……」

だからみんなには言えない苦しみがある……

でも……貴方なら……

私を受け入れてくれますか……？」

久しぶりの投稿 & amp; グダグダですがよろしくお願いいたします  
す



すずか「うっん、気にしないで？それより……酷いね……怪我。」

私はユウタ君を家に呼びました。ユウタ君なら……私を受け入れてくれると信じて……

しかも……私はさっきから疼いている……ユウタ君の首……手首……足首……全てが美味しそう……

ユウタ「まあ、俺としちゃこの程度で済んだから良いんだけどさ？今は腹以外かすり傷だぜ？ほら……」

シユルシユル……

あ……ユウタ君の手の包帯がとれて……赤く生々しい傷跡が見えるよ……もう、無理だよ……

我慢……してられない……

すずか「ユウタ……君……」

ユウタ「いつ……！……ちよっ……すずか……！？」

ちゅっ……ちゅぱ……ちゅる……

ユウタ君の指の傷を舐めて…しゃぶりついて…血を飲む…

ユウタ君の血の味が…口いっぱい広がっていく…濃厚で美味しい…癖になるよお…

ユウタ side

ちよっ…すずかが変だよ!?

俺が傷を見せた途端…目付きが嫌らしくなって…傷口をなめ回してる…しかも…血を吸ってる!?

ユウタ「く…ふう…なんだよ…体が…熱い!?!  
ちい…すずかに血を飲まれてるからか?頭までぼーっとして…とにかく止めさせ…ねえと…!?!」

すずか!?!おい、すずか!?!目を覚ませ!?!すずか!?!」

体を揺ると…ハツとしたように我にかえって…涙を流して…  
ちやうねん!!俺は泣かしてない!!!

すずか「…ごめんなさい…」

ギィ…バタン…！！

…なんか訳ありみたいだな…

俺は中に入ってすずかを追うことに…

バタン…！！

ユウタ「すみません！！今すずかが…！！」

忍「ユウタ君！？今すずかが勢い良く部屋に…！！」

そこにはすずかの姉の忍が驚いた顔で佇んでいた。そして、おれの  
手を見てなにかを察したらしい。

忍「なるほど…ユウタ君の血を飲んだのね…！！ユウタ君…貴  
女には話さなくてはならないことがあるのよ…」

そして俺は…リビングに招かれ、全てを聞いた。

どうやら月村家は代々？なのかは知らねえが”夜の一族”なる、吸  
血鬼の親戚みたいな奴等みたいだな。しかもメイド等はロボットら  
しい。…オーバーテクノロジー？

…しかし…だからどうした？



- - - - -

- すすかの部屋 -  
すすか side

すすか「バカバカバカ!!! 私のバカア!!! 何で……何で私……」

私はバカだった… 友達の指を… 血を飲んだ…

我慢してたのに…… によりによってユウタ君の血を……

すすか「うう……どんな顔をすれば会えるのぉ…… わかんないよ  
お……」

すると……

コンコンー!!

ユウタ「すすか? 大丈夫か?」

ユウタ君の声……ここまで来てくれたんだ……でも……

すずか「来ちゃダメ！！私……私……血を飲んだんだよ！！ユウタ君の！！化け物なんだよ！？しかも……私……まだユウタ君の血を求めちゃってる！！味が忘れられないの！！」

だから……だから……」

私はまた申し訳なさが込み上げてきて涙が溢れた。

ユウタ「別にいいじゃん？血が欲しいなら欲しいで？」

ユウタ君の声が扉越しに聞こえる……ものすごく優しい声……聞こえるだけで胸が高鳴る……

ユウタ「むしろ良く我慢したなって称賛するぜ？だってさ、お前が血を飲んだ相手がコレステロールでぎとぎとな親父だったら……大変だし不味いだろ？」

俺自身、すずかよりか化け物じみてるから嫌われんのは俺の方だ……

……」

すずか「そ……そんなことないよ！！！！ユウタ君優しいし……十分人間だよ？」



ユウタ君……私のことを心配してくれてるんだ……

ユウタ「いやいや……俺のほうが……まあいいや……  
とりあえず入るぞ？」

ギィィィ……

ユウタ君が部屋に入ってきた……ユウタ君の目は、いつもより一段と温かい……ユウタ君は私の目の前まできて……

ぎゅっ……

私を抱き締めた……

すずか「ゆ……ユウタ君！！？／／／／／／」

ユウタ「今だけは我慢すんな……俺が受け止めてやっから……お前がこれから頑張るためにも……な？」

ユウタ君が体を離し、肩を掴んだ。顔が目の前であって……ユウタ君

の香りが鼻腔をくすぐる……  
頭がくらくらする……ならお言葉に甘えて……

すずか「ユウタ君……私は……

貴方の血を飲みたい……もう、忘れられないの……貴方の濃い血の味が……」

ユウタ「別に構わないけど……殺さないでくれよ？一応身体的には人間なんだから……」

私は頷き……ユウタ君の上着を脱がし始めた……

わあ……／＼／＼ユウタ君の身体……綺麗だなあ……引き締まって……かつこいいい……

ユウタ「ちょい待て……上着全部脱がす必要無くな？手とかからでいいで「イヤ あむっ」「おおっ!？」

私はユウタ君がワガママを言う前に首筋に噛みついた。そこから血を飲む……

ああ……濃厚で美味しいよお……

すずか「ちゅっ……んむ……ちゆる……はむっ……ちゅぱ……」

ユウタ「~~~~っ！~！くっ……はぁ……！~！~！（また体が熱い……頭がくらくらして……って只の貧血じゃね？）」

「しばらくお待ち下さいませ……」

あれから10分くらい……私はユウタ君の味を堪能した。私は首筋から口を離す……私の唾液が糸のようになって……なんというか……いやらしいなあ……／／／／／／／／

ユウタ「はぁ……はぁ……はぁ……終わったみたいだな……」

ユウタ君は上着を着直していた。ユウタ君の顔が若干血の気が引いている……飲みすぎた？

すずか「ユウタ君……ありがとうね……私を受け入れてくれて……」

ユウタ「気にしなさんな ダチだろ俺らは？」

ユウタ君は心の籠った笑みを浮かべ、頭を撫でてくれた……  
撫でてもらっている間…ユウタ君を見ると顔が熱くなって…心臓が  
高鳴る……すごく幸せなんだ…

すずか「……うん……」

ああ……気づいちゃったよ……  
私は……

ユウタ君……私は貴方が好きになってしまいました…

番外編「私が好きになった理由・すずか編」(後書き)

オマケ

忍「すずか〜!」

すずか「お姉ちゃん……」

ユウタ「さあて……俺は帰るとしますか(ガシッ)……ね?」

キギキギキギキギ……(ユウタの首が回る音)

忍「次はわ・た・し」

ずるずるずるずる……

ユウタ「まつ……ちよつと……俺失血死するからあああああああ  
あああああああああああああああ!?!?!?!?!」

S t S 編第5話「反省の色は態度で示せ」（前書き）

はやて「ユウタ君……」

闇の書事件の時、闇の書の闇を葬った実力者……

リインフォースも会いたがってた……

でも……かなわへんかったけど、今、また世界のために……

うちらと戦ってくれる……

ユウタ君……頼りにしてるよ……」

感想お待ちしております???

## S t S 編第5話「反省の色は態度で示せ」

機動六課総隊長室

ユウタ「……………で？言い残した事はないな？」

はやて「まだユウタ君を食べてません！」

ユウタ「よしそこに直れしはいたるわバカやる「御神落ち着け！！」  
うがー！！離せシグたん！！男にや討たなきやならない敵がいるん  
だよお！！！！」

現在、部隊長室はカオスと化していた。

はやてが”反省の色なし！！”と言わんばかりの眼光でユウタを見  
つめ、反対にユウタはその態度に腹を立て、シグナムがユウタの両  
手を抑えている。そんななか…………

サンライト《はぁ……………マスターったら……………》

？「大変そうですね？」

サンライト「あなたは…デバイスですか？私はサンライト、マスター御神 ユウタの授天力専用デバイスです。」

リイン？「私はリインフォース？（ツヴァイ）ですう！よろしくですうサンライトちゃん！」

サンライト「はい。では、あなたの事はリインと呼ばせていただきますね？長いのは苦手です……」

リイン？「リインは構わないです！！私はあなたをサニーちゃんて呼ばせてもらおうですう」

サンライト「わかりました！あなたと話すのは楽しいですね」

など、こちらはこちらでよろしくしてるみたいだ。

ユウタ「全く……もういいや……で、ここに来たのは他でもねえ、機動六課に出向しに来たぜ。騎士団隊員は随時増減があるが、固定は基本3部隊だ。まあ3部隊のうち1部隊は揃ってるが……よろしく頼むわ。はやて？」

ユウタの方が先に折れ、シグナムを優しく払い、めんどくさそうにソファに座った。



しかし、はやてはユウタの言ったことに驚いた。

はやて「さ……3部隊も!? ええんかそんな出しても!!!」

ユウタ「安心しろ、別に人手不足なんてないし、少人数だから。

部隊の説明は後々やるから気にすんな? 一応俺等は騎士団の団員2人と俺の計3人で部隊だからな? 横にいる奴等がそれだよ。2人も、自己紹介よろしく頼むわ。」

はやては「横にいる二人がそうなんかあ」と呟きながら二人をみる。

ジーク「はい師匠! えと、僕の名前はジーク・フリート! 異世界犯罪撲滅組織”騎士団”、部隊”最強の騎士団”メンバーで近、中距離担当です!! よろしく願います!」

レイジ「では次は私が……異世界犯罪撲滅組織”騎士団”、部隊”最強の騎士団”メンバー、陽神 レイジと申します。担当は中距離、防御支援です。お見知りおきくださいませ?」

二人を見て、はやては感心したようなかんじの表情になった。

はやて「ふうん……バランスとれてるんやな…で、ユウタ君の自己紹介ないんか?」

ユウタ「…え？なに？俺もすんの？」

はやて「当たり前やん　うちはユウタ君の自己紹介聞きたいなあ」

はやてのしてやったりみたいな表情に、ユウタは顔をしかめたが、無駄だと思いきや張らずに素直に答えた。

ユウタ「俺もすんのダルいが…仕方ない…」

異世界犯罪撲滅組織”騎士団”元帥とともに、部隊”最強の騎士団”のリーダーをしている御神　ユウタだ。担当は近、中、遠距離だ。…これでもいいか？」

はやて「…あれ？ユウタ君”統帥”やないの？なのはちゃんに聞いた話じゃそう言うてたよ？」

そう、ユウタは10年前に”騎士団”を設立した”統帥”のはずである。

ユウタ「ああ、それが。確かにそうだったが、今は親父に任せてる。だから俺は”元帥”にして、一応副職として”教官”してるんだ。

」

はやて「……親父に？ユウタ君は転生したんやろ？なら……

……まさか……ユウタ君！！」

ユウタははやての反応を見て、笑顔を見せた。ユウタは中性的な顔つきな為に……ものすごく綺麗な笑顔になるのだ……

ユウタ「転生する前の親父に……会えたんだ！7年前にね……

だが……俺が授天力を持ち始めてから……元の世界の因果を書き換えちまったらしくくな……

授天力を持つ奴等が出始めたんだ……俺の元の家族や幼なじみも持つてる……

だから、これを機に騎士団本部をそこに置いたんだ！親父は俺より剣の腕が強いし、統率力もあるから代わってもらったんだよ！！」

はやてはユウタに近づき……優しく抱き締めた……

はやて「良かったやん……大切な家族に会えたんやから……

これからよろしくな……ユウタ君……それに、ジーク君、レイジ君……頼りにしとるよ……」

それはまるで……母親のような暖かさだった……

ジーク「任せてよはやて部隊長!!」

レイジ「おまかせくださいはやてお嬢様……」

二人「我ら騎士団の誇りにかけて守りとおします!!」

はやてはしばらくしてからユウタから離れていき、ユウタはソファから起き上がった。

はやて「んじゃユウタ君らの紹介とか部隊のことは明日やからそれまでは、部屋の場所教えるからゆっくりしとって?」

ユウタ「わかった。サンライト、お前リンちゃんだっけ?と話してたいならここにも良いぞ?」

先ほどからサンライトはリンフォース?と話をしていた。サンライトは気がついて……

サンライト《わかりました!リン、後でマスターのお部屋に案内してください!》

リン「わかりましたですう　ユウタさん、サニーちゃんは任せて  
くださいですう」

リンフォース？といることになった。ユウタは視線をシグナムに  
むけた…シグナムはさっきから少しそわついていた。

ユウタ「よっし…シグたん？約束通り、模擬戦やんぞ！体を動かし  
たいし…」

シグナムはその言葉にピクツと体を反応させ、ユウタをキラキラし  
た目で見つめた。

シグナム「よくぞ言った御神！！さあ！早く！！早く！！善い戦い  
をしようではないか！！」

シグナムはユウタの手をむんずつとつかみ、部隊長室を出た。ジ  
クとレイジも後をおっ…

はやて「ユウタ君……ありがとうなあ……／／／／」

部隊長室には、届かないお礼の言葉が木霊した。

S t S 編第6話「烈火の将 VS 善壊神」(前書き)

シグナム「御神と戦ってみたい……」

あの闇の書の一件以降……日に日にその思いが強くなっていった。

そして……永らく待った待望の対戦……

存分に楽しませて貰おうか!!!!

さあ……始めるぞ!!!!」

……更新遅くてごめんなさい……

テストが頻繁にあります……

では、どうぞ……!!!!

S t S 編第6話「烈火の将 VS 善壊神」

機動六課 訓練室

シグナムに手を引かれながらついていくと、元気なのはと…最早死んでるのでは？と思うほどにヘトヘトになっているフォワード陣4名が…

ユウタ「……この数十分で何をどうしたらこんなにヘトヘトになるんだよ？シグたん？」

シグナム「高町の教導はかなりきついからな…って！御神！！し…シグたんはやめるといっているだろうが！！！」

シグナムの顔がまるでゆでダコのように真っ赤になっていた。しかし、ユウタは顔色を全く変えずにしれっとしていた。

ユウタ「いいじゃん チャーミングだと思っよ？シグたん」

シグナム「ぐぬぬぬ……」

なのは「あっ！ユウタ君！」

すると、流石に声で気づいたか、なのはが此方に近寄ってきた。

ユウタ（…フォワード陣は沈没しているが……放つといていいのか…？）

どうやらなのはは10年の間に鬼教官になっていたらしい…

なのは「どうしたの？」

ユウタ「今からシグタ…シグナムと模擬試合したいんだが……いいか？」

流石にシグナムをこれ以上弄ると可哀想なので、とりあえず普通に呼んだ。なのはは話を聞いて、少し考えたが…すぐに答えてくれた。

なのは「うん！！ユウタ君の実力知りたいし……」

で、シグナムさんの次は（…）私とね「」



………ユウタは今、聞いてはいけないことを聞いてしまった気がした。

ユウタ「は？」

なのは「だから、私とも模擬試合しょ？」

ユウタ「いやいやいや！？明らかにこちらが疲弊する事見越してるよね！？」

なのは「……さあ、シグナムさん！！ちゃちゃっといってみましょー！！」

シグナム「うむ！さあ御神！！早く模擬試合をしようではないか！！」

気づけば、ユウタの襟をシグナムが掴み、戦場へと運んでいった。その際……

ユウタ「理不尽だコンニャロオオオオオ！！！！」

まるでユウタが売られていく牛のように見えたのは秘密である。

.....

ティアナ「あ…あの、レイジさん…／／」

レイジ「ん？ああ、ティアナさん！！大丈夫ですか？高町さんにごつてり絞られた見たいですが…」

ティアナ「…はい、なんとか…／／／」

ティアナは、ボロボロの状態でレイジの元まで歩いてきた。  
何故死んでるのではないか？みたいな状態から歩けるのかというのは…いわゆるマンガ補正と同じ原理だと認識して頂こう…

ティアナ「あの…ユウタさんって…強いんですか？」

レイジ「ええ…お強いお方です。心も…身体も。私を助けてくれた恩人で、私の目標です…」

ティアナ「そう…ですか…。あの…ちょっと肩を貸してください  
／／／」

レイジ「え？」

レイジの肩に重みと温もりが感じられた。見てみれば……

ティアナ「すう……………すう……………」

しごかれて疲れたのか、ティアナがレイジの肩を枕に眠っていた。レイジは不覚にもドキドキしていた。レイジは拾われた身…こんな経験は皆無に等しい。よって…

レイジ「…っ／／／／／／／／／／／／／／／／」

顔を真っ赤にしてうつむいていた。しかし、肩からティアナを離すことはなかった。

それを遠くからスバル、エリオ、キャラ、なのは、ジークが見つめていたりして……

なのは「うう……………ティアナ大胆！！私だって…ユウタ君と……………／／／」

スバル「……………私だって…ユウ兄としたいなあ…／／／」



言葉を放った瞬間…炎が立ち上った。しばらくすると…炎が二つに分断された。

中から、体を被うパワーアーマーに短い丈のジャケット、腕や腰に甲冑部分が現れた、バリアジャケットを身にまとったシグナムが出てきた。手には愛剣レヴァンティンが握られていた。

二人の間を静寂が支配していた…そして…

ユウタ「騎士団の闘士…御神 ユウタ…」

シグナム「ヴォルケンリッター、烈火の将…シグナム…」

ユ、シ「いざ、参る…！」

火蓋が…切られた。

仕掛けたのは、シグナムからだった。

シグナム「はあああああ…！レヴァンティン…！最初から本気で行くぞ…！カートリッジロード…！」

シグナムがレヴァンティンを振りかざし、ユウタに斬り込もうと駆ける。レヴァンティンの刀身は紅蓮の炎を纏っている。

ユウタ「ふうう……」

対してユウタは……居合いの構えを取り、目を閉じていた。黒鋼からは……ただならないオーラが放たれている。

そうしている間にもシグナムは勢いを殺さずユウタに迫る。

シグナム「紫電……一閃！！！」

レヴァンティンがユウタを捉える前に、ユウタの握る黒鋼が火を吹いた。

ユウタは目を開き、体を捻り、黒鋼を思い切り抜いた。

ユウタ「鳴神流剣技……乱時雨……」つがいきく「番菊」！！！！」

抜いた瞬間……シグナムの腹部に幾度も剣撃を受けた衝撃を覚え……

気づいた時には…

シグナム「がああ…！！！！な…！！？」

シグナムは地面を抉りながら墜ちていた。背中と腹部が激しく痛む。

ユウタは目をシグナムに刀の切っ先を向けて上から見上げていた。

ユウタ「乱時雨「番菊」…：…複数の剣撃を一点に当てる技だ。  
一撃一撃の威力がなくても…：…数撃ちや痛いだろ？」

シグナム「…フフ…やってくれる…！！！！！」

しかし、シグナムも負けずに立ち上がった。まだまだ体は動くらしい…。

ユウタ「…そうでなくちゃ楽しくないよなあ！！！！！」

そこからは…まるで獣同士の戦いだった。互いの剣と刀をぶつけ合う…：…一合、二合、三合と数を重ねて行く。





その斬撃は竜の如く…舞椿を呑み込んでいく…

飛竜はユウタへと一直線に向かって行く…

シグナム「切り裂けえ！！！」

しかし、ユウタは笑顔で刀を振りかざし……

ユウタ「鳴神流剣技…” 虎篝” …！！！」

飛竜に向かい…時雨の中を暴れる虎のような一閃を放った。

ユウタの放つ虎篝の衝撃波は飛竜を弾き、シグナムへと迫って行く。  
シグナムは急いで連結刃を戻すが……

シグナム「があ！ぐつ……！！！」

虎篝が迫るが早く…虎篝をまともに受け止めてしまった。

シグナム「ま……まだまだあ！！！」

しかし、シグナムは…執念で耐えている。既にバリアジャケットは意味を成さないほどに破けていた。…隠すところは隠しているので悪しからず…

ユウタは隙を見逃さず、止めへと移った。

黒鋼には…漆黒のオーラが満ちている…

ユウタ「さあ……詰みだ！喰らえええ！！！」 黒火聖衝” おおおお  
お！……！！！」

ユウタが刀を振るうと…シグナムに向かって漆黒の衝撃波が飛んでいった。

シグナム「はあ……はあ…レヴァンティン！！カートリッジロー  
ド！……！！！」

シグナムは向かってくる衝撃波に背を向けず……レヴァンティンを構える。

シグナム「紫電……一閃んん！！！！！」

黒火聖衝と紫電一閃がぶつかり合い、周りにはその余波が広がっていく。

シグナム「ぐ……あああああ！！！！！」

シグナムは最後の力を振り絞り対峙する。しかし……ユウタは防ぐ

ことを予想していた。

ユウタ「待ってたぜ……さあ……もう一発喰らええ！！黒火聖衝！！」

シグナム「……なに！！！！？」

今ぶつかり合う黒火聖衝でも辛いのに……重ねられたら……たまったものではない。

そして……黒火聖衝が重なり……シグナムが漆黒に飲み込まれた……

ユウタ「新奥義……黒火十字星……ってね？」

ここに、烈火の将と善壊神の試合は……善壊神に軍配が上がったことを伝えておく……

S t S 編第6話「烈火の将 VS 善壊神」(後書き)

オマケ

ティアナ「すう……すう……へへっ……／＼／」

レイジ「て……ティアナさん／＼／＼いい加減……起きて下さいませ／  
／／」

ジーク「……止めてよその甘ったるい空気……」

番外編「IF」X・mas StS edition「(前書き)

優氣凛々「特別編ダヨ!!! 全員集合!!!……

何かいろいろやらかしたあああああああああああ!!!  
「!

番外編「IF「X・mas StS edition」」

世の中のカップルや夫婦等が大抵楽しみにするであろうクリスマス…

ユウタはというと……

……深夜 機動六課……

ユウタ「皆寝ちまってたな……何だか忍び込んでるみたいだが…許してくれ。」

只今ユウタはサンタの帽子と服を着て六課の隊舎を回っていた。

「クリスマスだし、せっかくだからプレゼントが欲しい」という機動六課隊員全員の為にユウタは一人奮闘しているのだ。

因みに、ルキノやヴァイス等にも既に枕元にささやかながら（水晶のネットレスや最新端末機など）プレゼントをおいて回った。

残るは……

ユウタ「フォワード陣と隊長陣だが……つむ…」

実を言つと、一応プレゼントは用意したが…気に入るかどうか不安なのだ。

ユウタ「……まあ、なんとかなるか？」

とりあえずまずは、スバル・ティアナの部屋へ…

- スバル・ティアナの部屋 -

ユウタ「お邪魔しますよ……」

入って見ると……二人とも可愛い寝顔をしながら寝息を立てていた。

ユウタ「…鬼教官の鬼畜教導お疲れさん……ささやかだがプレゼントだぞ。」

ティアナには、つい最近雑誌を見て「可愛い！」って言っていたネツクレスを……

スバルには…

ユウタ「……腹下すなよ？」

近くの市街地にある有名なアイスクリーム屋の「どんなアイスクリームでも商品無料で選べるチケット」をプレゼントした。おそらくアクセサリーより喜ぶだろう…

…エリオ・キャロの部屋…

ユウタ「おつ邪魔…」

流石に罪悪感を覚えるが、とりあえず入る。

エリオ・キャロは共にすやすや眠っていた。

ユウタ「小さいのに頑張ってるお前等にプレゼントだぞ？」

エリオには、最近発売したゲーム機とソフトを…キャロには洋服とガーネットの付いた腕輪を枕元に置いた。



ユウタ「お前らの頑張りは俺が一番知ってるから……頑張れよ！」

ユウタは二人の毛布をかけ直し、静かに部屋を出た。

- - 廊下 - -

ユウタ「うん、フォワード陣は終わったな……さて次は……っと？」

ふと廊下を歩いていると……前から人の気配がして、よく見ると……

フェイト「あ……ユウタ。」

フェイトがいた。しかも、同じことを考えていたらしく、サンタのドレスを着ていた。ミニスカートからチラチラ見える太ももがまぶしいが、ユウタは気にしないらしい。

ユウタ「…同じようなことしてたんだな……」



フェイトの顔は未だに赤く、目も心なしに潤んでいた。ユウタは少し心配になった。寒いのにそんな格好では風邪をひきかねない。

ユウタ「……………」

フェイト「……っ！？／／／／／／／／／／」

気づけば、ユウタはフェイトの肩に自身が着ていたサンタのジャケットをかけていた。ユウタは下にノースリーブの訓練用のシャツ一枚だったため、肩から先が顕になる。

フェイト「え、ゆ…ユウタ！？これ…風邪ひいちゃうよ！？」

ユウタ「俺は寒いのに慣れてるから平気だ！フェイトの顔が赤かったから熱でもあるのかな？って思ってな。一応着ときな？」

フェイト「うん…………／／／／（ユウタはいつもそう…………人への気配りは上手いのに…自分の心配はしてない…）」

フェイトは顔をうつむかせ、少し考えていた。ユウタは人への気配りが上手い反面、自分に厳しい一面がある。そんな彼を…

フェイト（ずっと……ずっとそばで支えてあげたい……これからも  
…／／／／）

支えてあげたいと切に願っていた。フェイトはユウタが好きだ。いつも優しく、強く、厳しい…そんな彼に、彼女は支えられていた。いつからか、フェイトの心はユウタのそばで支えてあげたいと思い始めた。しかし…なかなか時間がないために言えずじまいだった……

フェイト（……待つて？今、ユウタと二人つきり……

今なら…言えるかな／／／／／）

そう思った時だった……意外にもチャンスは来るもので…

ユウタ「ほい、フェイト！」

フェイト「…え？」

ユウタはフェイトの目の前に白い包みを差し出した。

フェイト「……これ……」

ユウタ「メリークリスマス、フェイト　いつも時間なくて言えなかつたが……お疲れ様！

でも疲れは溜め込んだじゃないねえ…疲れたら俺に言えよ？何かしらは手伝えるかもしれないから！

そんなフェイトにささやかながらプレゼントだぞ！！」

フェイトは…早まる心拍を押さえながら、恐る恐る包みをほどいた。そこには……

フェイト「…暖かい……」

ユウタ「太陽の隕石」って言ってな、熱くはないが…疲れが出る　と体を温めて癒してくれるんだ。」

朱に輝く六角形の宝石がついている十字架をあしらった銀色のネックレスとピアスだった。とても綺麗でつつい見惚れてしまいそうになる……

フェイト「……ユウタ……」



フェイト「ん……ちゅ………んむ………」

ユウタ「んん……ふえ……ふえいとお………んむ……やめ………」

ユウタの体から力が徐々に抜けていき、フェイトに押し倒される形になった。

フェイト「ぷは………うぶぶ……／／／／／」

ユウタ「ふぁ………ふえ………フェイト！？／／／／／／／／／／／」

お互いの口が離れる。その間には唾液が混じりあい糸をひいていて、どことなくいやらしい。

フェイトは妖艶な笑みを浮かべ、ユウタはしどろもどろしている。

フェイト「ユウタからプレゼント……貰ったから………プレゼントあげるよっ。」

ユウタ「プレゼント？」

フェイトはユウタの首筋に指を這わせる。ユウタは体がびくついて  
いる。

フェイト「……………ユウタへのプレゼント……………私だよ？／＼／＼ねえ、  
ユウタ…／＼／」

フェイトの顔がユウタの胸に押し付けられる。ユウタはもう既に頭  
が真っ白になっていた。

フェイト「好き……………私、ユウタが好き……………／＼／＼／＼／」

このあとは……………「想像にお任せしようか……………」



S t S 編第7話「星光 VS 善壊神」(前書き)

なのは「10年前にユウタ君と戦った…

あのときは勝てたけど……

ユウタ君は性格は変わってなくても、強くなってるのはわかる…

だから、確かめたい…

ユウタ君と私……どっちが強いかを……!!」

帰省ラッシュにハマり身動きが取れない優氣凛々でし……

なんでみんなこんな時に帰んねえええん!?

S t S 編第7話「星光 VS 善壊神」

.....訓練室内.....

シグナム「ユウタ……やはり貴様は強いな……」

シグナムは既にジャケットを解除して機動六課の制服だ。しかし、ユウタとの戦闘で堪えたのかユウタがシグナムをおんぶしている。顔が赤く、まるで熟れたトマトのよう……

ユウタは女性をおぶっているにも関わらず、顔色を変えずに笑顔で皆の所に近付いていた。

ユウタ「んなことないってば！！俺としては”乱時雨「舞椿」”で積んだつもりだったんだがよ……

烈火の将の名は伊達じゃねえな！」

その笑顔は太陽のように暖かく、柔らかいものだった。シグナムはその純粋な笑顔に更に顔を赤くしながら、ユウタの背中に顔を埋めた。

シグナム「……当たり前だ！烈火の将は…主を守る”刃”だからな、そんなに柔では面目がたたんからな？」

ユウタ「そだな！！はやてを守る為にも頑張りな！！」

シグナム「…うむ！

そういえば、次は高町と戦つのであろう？高町との戦いもきつと心躍るぞ！」

話題を変えんとばかりにシグナムがユウタに言った。刹那、ぐつたりと肩をおろした。

ユウタ「……本つつつつつ当にやんなきゃなんないの？」

シグナム「なんだ？殺りたくないのか？」

ユウタ「…字が違う気がするんだが……まあやりたいのは確かなんだが…シグナムの後だし…」

シグナム「殺りたいのだな！楽しみにしているぞ？」

ユウタ「……………シグたん…（泣）」

もはやユウタの私刑宣告は暗黙の了解らしい。

……………【一方その頃】……………

ティアナ「……………ごめんなさい、寝ちゃいました／＼／＼／＼／＼」

レイジ「い…いえ!!可愛らしい寝顔を堪能させていただきましたから!!／＼／＼／＼／」

ティアナ「…可愛らしい!?／＼／＼／」

ティアナはレイジの肩を借りて寝ていた事を謝るが、レイジ自身満更でもないらしい。もうあの辺り一面ピンク色の空間になっていた。

ジーク「……………やめてよもう……………」

ジークが気持ち悪そうにしている傍らで……………

スバル（…ユウ兄……………強いなあ……………

私も、ユウ兄から爆龍拳教わったりすれば……………強くなれるかな?）

エリオ（ユウタさん……強いな……  
僕も……ユウタさんみたいに強くなって……みんなを守りたい！！）

スバルとエリオは、ユウタの戦いを見ていて、ユウタのように強くなりたいと心に決めていた。

なのは「ユウタ君……やっぱり強いなあ……でも、また昔みたいに勝つよ！」

- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -

【再び訓練室内上空】

ユウタ「マジでやんのかよ……」

現在、ビルが幾重にも並んでいる空間に、向かい合う形でなのはとユウタが浮かんでいた。

いかにも気だるそうにしているユウタに対して……

なのは「よおし……頑張るよ、レイジングハート……」

LH《はい！マスター……ユウタ様を愛するのはそのあとです！／／／／》

なのは「れ…レイジングハート？」

なのはは気合い十分、レイジングハートはユウタを愛でる気は十分だった。

レイジングハートがおかしくなったのは今に始まった話ではありません。一通り話を読めば分かります。

ユウタ「レイたん…相変わらずだな…だけど、

今日は勝たせてもらっぜ？なのは！！！」

なのは「負けないもん！！！」

そして……

シグナム「なら私が審判を勤める。勝敗は相手を戦闘不能にするか武器を奪取し戦力を失わせるかだ。

では……始め！！！！！」

シグナムのコールにより、なのはとユウタの10年越しの対決が火蓋を切った。

ユウタ「身体変化能力・エレメント・ブレイブ……!!!!」

ユウタが叫んだ刹那、ユウタの肘から下が装甲で固められ、指が猛禽類のような爪と化した。更に、肩甲骨の辺りから紅蓮に輝く翼が現れた。

なのは「アクセルシューター……!!」

LH《アクセルシューター……セツト……!!》

なのは既にセツトアップを済ませていて、自身の周囲に12基の魔力スフィアを出した。

そう、これは10年前になのはがやって勝利を納めた戦法の下準備だ。

ユウタ「またアクセルか……面白え!!受けて立つさ……!!」

ユウタはアクセルシューターがあるのに関わらず、翼を広げ……

ユウタ「いづくぜえええええええええ!!!!!!!!」

なのは「え？速い！？（うそ！？これじゃ…フェイトちゃんより速い！？）」

凄まじい速度でなのは近づかんとしていた。しかし、なのはも黙ってはいない。

なのは「切迫されないうちに……アクセルシューター…ファイア！  
！！」

アクセルシューターはまるで意志が一つ一つにあるように、複雑な動きをしながらユウタに迫って行った。

ユウタはといえば、余り顔色を変えていない。むしろ、笑顔だった。

ユウタ「そんなもの無駄だぜ！！！砲閃花！！」

ユウタは周りに砲閃花をアクセルシューター同様12基出し、アクセルシューターをアクロバット飛行をしながら相殺していった。

なのは「むむむ……ユウタ君…やっぱり強いの！！！！」



ユウタ「今度はこっちの……番だぜ!!!紅蓮ノ爪・クリムゾン・エッジ……!!!」

ユウタは再びなのはへと切迫せんとし、その最中、両手の爪が紅くなり、爪が伸びた。その長さは自身の身長を越える程だ。

なのは「くっ……レイジングハート!!!」

LH《プロテクション!!!》

なのはは自分の周りを覆うようなドーム状のバリアを展開した。

そうしている間にユウタはなのはに接近していた。そして……

ユウタ「はああああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

ユウタはなのはをプロテクションごと紅蓮ノ爪で切りつけた。すると、なのは自体に傷はないものの、プロテクションのみ砕け散った。

なのは「ふう……惜しかったけどまだまだだ」「終わってねえし、これが目的だぜ!!!」「え!?!」

なのは自信に満ちた表情からだんだん焦りが生まれ始めた。今までにプロテクションを砕かれた。つまるところ、今、なのはを守るものはバリアジャケットのみとなる。

気づいた時にユウタを見れば、攻撃した体勢から、爪をなくし、なのはにかなり近づき、右手に授天力を溜めていた。

なのは「…ッ!??」

ユウタ「さあ…喰らいな!!!爆…龍…拳!!!」

ユウタが放った拳は紅蓮の龍になり、なのはを飲み込んだ。

なのは「きゃあああああああああああ!?!」

ユウタ「うっし!決まった!」

ユウタは内心決まったことに安心していた。防御力に定評があるなのはの防御を打ち砕き、本体にダメージを負わせるのは何気に難しい。よって、決まったのはかなり嬉しいのだ。

紅蓮に煌めく龍はなのはを飲み込んだまま、ビルに激突した。  
龍が居なくなり、ぶつかつたビルを見てみると…

なのは「いてて……ふう…

防御を打ち砕きに来たのは予想外だよ？ 凄いやユウタ君！！！」

ユウタ「……俺としては、今の喰らって立つなのは、お前が予想外だよ。」

バリアジャケットがぼろぼろになりながらも、意外にけるっとして  
いるなのはが立っていた。

なのは「……ユウタ君…私、ユウタ君の砲撃と勝負したい！！！」

なのははユウタにレイジンググハートを向け、言い放った。

ユウタはなのはの目を見た。なのはの瞳は決意に満ちている。

ユウタ「…良いぜ？ 受けて立ってやんよ！！！」

なのは「…ッ！！／／／ありがとう！！ユウタ君！！……レイジン  
グハート、デイバイン……」









S t S 編第8話「聖騎士との再会と紹介、それと…?」(前書き)

神音「ユウタの力の一片として生まれた私…

ユウタを守りたいのに……私が守られている…

だったら私は…あなたの…

あなたの心を……守ります…

私は…あなたが……好きだから」

更新おつそ!!--ダメだ!!--難産!!--!

上の言葉はあまり関係ありません。  
下が本心です。



S t S 編第 8 話「聖騎士との再会と紹介、それと…?」

… 訓練室内 …

なのはとユウタの戦闘を見ていたギャラリー（フォワード陣＋シグナム）は…

全員『……………』

言葉が出なかった。むしろ、言葉が見つからない。

なのはのえげつない砲撃、スターライトブレイカーを押し退けた砲撃を放ったユウタは…

全員『怒らせたら塵すら残らないのかも（知れん）知れない……………』

まさに魔王を越えた魔王のように思えたギャラリー陣でした…

… 機動六課内廊下 …

ユウタ「そっいやさ…なのはよ?」

訓練実室内にいた一行は、夕食の時間になつたらしいので食堂に向かう最中だった。

なのは「どうしたの？ユウタ君？」

ユウタ「俺らがこつち来た時にリニアレール……だっけ？なんかやたら機械の破片とか散らばってるわ、狭い所で魔法ぶっぱなすわ……何があつたんだ？」

レイジ「それもそうですね。気になります。」

ジーク「あんな乗り物ぶつ壊して暇潰し……なんて訳ないもんね？」

そう、騎士団組はまだ機動六課が設立された理由や、リニアレールでのことを詳しく知らない。ユウタのなかでは少し引っ掛かりがあったらしい。

なのは「…実はね…」

私達機動六課は”遺損物管理課”として動いてるの。それで今回は”レリック”っていうロストログアを回収するためにリニアレールに行つたんだ。

そしたら、”ガジェット”っていう機械が襲つて来たんだ。どうやら”レリック”を狙う人がいるらしくて……それを破壊してたらあの有り様に……。」

ユウタら騎士団はとりあえず理解をしたらしいが、ユウタは腑に落ちないと言わんばかりな顔をしていた。

ユウタ「話から察するに、レリックってのは遺損物、つまりはお前らが回収すべき物で…危険な物なんだな？」

…そんなもん、誰が欲しがるんだ？」

なのは「今のところまだ分からないみたい。フェイトちゃんが調べてくれるけど…」

ユウタ「そっか。」

ユウタの顔から笑顔がこぼれた。どうやら納得したらしい。

なのは「んじゃ、次はこっちからね？」

ユウタ君、あの転生者達…”高天原”って名乗ってたけど…あれって？」

ユウタ「ああ、あれね。」

あれは転生者達が”各々の目的を果たす為”に集まった集団だ。

大抵は”その物語のメインキャラ等とハーレムを作る”なんて自分勝手な理屈だ。」

レイジ「よって、私達騎士団が”高天原”の転生者達に説得、応じない場合は捕縛もしくは抹消してゐるんです。」

なのは等は”抹消”と聞いた瞬間、目を見開いていた。そんな縁起でもない単語が出てくるとは思わなかった。

スバル「ま…抹消？」

ユウタ「確かに聞こえは悪いだろうな。捕縛すりゃあ能力取り上げて騎士団で働いてもらう訳なんだがよ…頑なに譲らず、挙げ句こつちに仕掛けて来るんだよ……」

ユウタはみんなに背を向ける。その背中は憂いに満ち、震えている様にもみえた。

ジーク「ユウタ師匠だって苦しいんだよ、本当は。でも……仲間を救うためには仕方がないんだよ。」

レイジ「本来であれば、私達も一人や二人殺めていてもおかしくありませんが……」

ユウタ様は…ご主人様は私達には殺させず、ご自身のみで殺めてしまうのです。」

フオ、な、シ「「「「「」……」「」「」「」

廊下に暗い空気が溢れた。

ユウタは皆の方に振り向いた。その顔は笑顔だが、誰から見ても無理矢理作った笑顔だとわかった。

ユウタ「ほらほら、早く行かないと飯無くなるぞ！行くっぜ！」

ユウタはそう言って前に歩きだした。

なのは「にゃ！？待ってよユウタ君！」

シグナム「また迷子になっても知らんぞ？御神。」

その場の皆に心配の念をのこしながらも、ユウタ等は食堂へと向かうのだった。

ユウタ（……あいつは…あいつだけは…私情で殺さなきゃならないけどな。）

.....「その頃、食堂」.....

はやて「うーん…混んでるなあ…」

リイン「ですう………」

サンライト《この時間は混むんですかね?》

はやて、リイン、サンライトも食堂に夕食を食べに来ていた。実ははやて、今までかなり忙しかったためあまりまとまった食事を取れていなかったのだ。

とりあえずトレーを持って食事を乗せ、空いていたテーブルに向かって行った。  
すると………そこに、

?「あ、いたいた! ! おおい! はやち〜! !」

?「あまり大声あげるとき? 全く………」

?「かみちゃんは子供だから………まあ、いいか。はやて〜! !」

はやて「あ！！神音ちゃん！仙さん！海里ちゃん！！来とつたん？」

ユウタの守護騎士、聖騎士・パラディン・が食堂のテーブルに座っていた。

何故聖騎士がいるかというと、はやてがあらかじめ転生者対策として呼んでおいたからだ。

神音は水色の髪をサイドテールにしている。

仙は10年前までポニーテールだったが、今はうなじが隠れるくらいに短い。

海里は10年前に比べ、身長が大きくなり、胸も大きい。髪は相変わらずのポニーテールだ。

神音「今しがた着いたんだ。そしたらお腹空いちゃって」

仙「すんまへんさ…うちの将がこんなんやから…」

はやて「いえいえ、あんたらにはいろいろ助けてもるとるから気にせんといて！たんと食べてってな！！」

時空管理局と聖騎士は度々共同で行動するために、意外に仲がいい。

海里「まあ、それを除けばすごいんだよね！かみちゃんは…？

リインちゃん、それなに？」

リイン「ほえ？」

海里はリインの持っていた腕輪に気がついた。そう、腕輪というかサンライトであるが…

リイン「これですかぁ？これはサニーちゃんですう」

サンライト《はじめまして…は無いですね？改めて、お久しぶりで  
す。聖騎士の皆様。》

私は授天力専用インテリジェントデバイス”サンライト”（……  
・）です。》

サンライトと聞いた瞬間、聖騎士の手が止まった。

神音「…サン…ライトが…」

仙「…復活…しとる？」



海里「…て…いうことは…」

三人とも、肩を震わせて涙を目にためていた。

はやて「ちよつと聖騎士たち？何で涙なんk「お、はやてじゃねえか。みんなも飯なんだなあ！」ユウタ君、話しかけるなら前降り欲しいわぁ…」

はやての後ろから声が聞こえた。高くて、透き通った綺麗な懐かしい声が……

聖騎士がゆつくりとその声の方に顔をあげた。そこには…

ユウタ「……もしかして…神音？それに…仙…海里も…？  
うわぁ！！みんな久しぶりだなあ！！元気してたか？」

背が10年前よりも高く、逞しくなったが、女の子に見えてしまう容姿…白い髪に青のメッシュ…  
聖騎士の主、御神 ユウタがそこにいた。

神音「ゆ…ユウタああ…!!」

仙「あ…主…!!」

海里「ユウちゃああああん…!!」

聖騎士はテーブルから立ち上がり、ユウタに抱きついた。ユウタはよろけるがなんとか耐え、三人の頭を撫でた。

ユウタ「あはは！みんな大きくなって！約束、守ってくれたみたいだな。ありがとうな！」

神音「ユウタ、ユウタあ…ヒグツ…会いたかったよお…」

仙「主い…どこいっとったんや？…男前になってもうて…」

海里「ユウちゃん…私、こんなに大きくなった…よ？ユウちゃん…」

ユウタ「…みんな…俺も会いたかったよ。また会えて良かった！

そっだ、聖騎士。紹介しとくよ。」

そういつてユウタはレイジとジークを呼んだ。

ユウタ「聖騎士、こいつらは右からジーク・フリート、陽神 レイジだ。俺の小隊”最強の騎士団”のメンバーだ。」

ジーク「最強の騎士団隊員、ジーク・フリートです！！」

レイジ「同じく、陽神 レイジと申します。」

ジークとレイジの紹介が終わるや否や、神音がユウタの襟を掴み顔を近づかせた。

神音「え〜！！？ユウタ、私達はあ〜！？」

ユウタ「はあ…お前ら元帥だろうが。元帥等が複数集まるには小隊リーダーとしてただだからなあ……………」

神音「そんなあ……………」

神音は残念そうに襟を放した。しかし、ユウタは神音の頭を撫でた。

ユウタ「でも今は”高天原”が相手だ。だから聖騎士も小隊に加える。だから機嫌直せ、な？」

ユウタの言葉に聖騎士の三人は”ぱああ”と効果音が聞こえそうなくらいに明るくなり、また抱きついた。

神音「わあい！！ユウタと一緒に！」

仙「主のことしっかり守ったるからな！！！」

海里「エへへ……」

感動の再会を切り上げ、みんなで夕食にありつき、フォワード陣や隊長らに聖騎士を紹介した。

そして、「今日は疲れた」と言って、夕食のあと、ユウタは割り当てられた部屋に入った。

・ ・ ・ ・ ・ 「ユウタの部屋」 ・ ・ ・ ・ ・  
・ ユウタ side ・

今、時刻が夜11時くらいです。

ユウタ「ふう……みんな元気だなあ……」

いやあ……かなり疲れた。特にあの連戦……二度とやってたまるか!!

ん？サンライト？「今日はリンといます!」……てさ。嫌われたのかな？

一応、シャワーを軽く浴びてもう後は寝るだけ……

なのは「……ユウタ君？寝ちゃったかな？」

にはならなさそう……なのはがドアをノックしてるよ。

ユウタ「なのはかあ？いいぞ、入りな？」

なのは「お邪魔します……」

今なのはの格好は、ワイシャツとスカート。あの機動六課のやつな。



番外編「懐かしき再会」前編」（前書き）

優氣凛々「今回はユウタの過去、自分の世界に帰れた時の話ですな  
！！！

グタグタは日常茶飯事な優氣凛々ですた！（\*、\*）





崩れた家屋、燃え盛る車両、抉れた地面……そんな変わり果てた首都圏に、二丁拳銃を構えた少女がいた。

少女は栗色のポブカットで眼鏡をかけていて、かなり真面目な容姿である。しかし、その可愛らしい顔から、似つかわしくない鮮血が滴っていた。

彼女は”授天人”であり、警備隊に所属していた。青の警察の制服にミニスカート、タイツとスパッツを身につけている。

少女「はぁ……はぁ……っ！！！」

彼女は背後から刺さるような殺気に振り向いた。そこには……

人の様に二足でたっているが……頭からは2本の角、皮膚は赤く、牙が生え、爪が鋭利になっている……もはや人としての形を成していない”異形”がいた。

少女「……このお！！！」

少女の二丁拳銃が異形に向かって火を吹いた。

少女「聖霊よ！！力を貸して！！」

「ライトニング・ファイバー」！！！」

二丁拳銃から、電気を帯びた弾丸が異形……魔物”に向かつて連射されていく。

魔物「ガアアアアアアアアアア！！！！」

対し魔物は……ライトニング・ファイバーを避けながら少女に向かって鋭利になった爪を突き立てんとしていた。

そして…

少女「……っ！！！！」

魔物「ガアアアアアアアアアア！！！！」

少女と魔物の距離は……なくなつた。

…「首都圏内、とあるビル」…

何時もなら人々で賑わい、栄えていたビルは…まるで死んだ様に静かだった。

そんなビルの屋上に、一筋の亀裂が入つた。空間に亀裂が入るなん

て普通ならあり得ない。

そして…亀裂がさらに広がり、中から…

ユウタ「次の世界に到着…!!…って…凄まじい風景だなあ？」

純白の髪、青のメツシユの御神 ユウタが出てきた。手には全てが黒い刀、“黒鋼”が握られていた。亀裂はユウタが出るとひとりではふさがっていった。

ユウタはなのは等と別れたあと、自分を磨くためとあらゆる世界に行きたいために世界を巡っている。そしてこの世界に流れ着いた訳で。

ユウタ「さあて、眺めは…

って家屋倒壊、道路がぼこぼこじゃんか…あれか？天変地異でも起きた…!!？」

ビルから眺めていると、銃声が聞こえた。音からして、あまり遠くない。

ユウタ「誰かいんのか…?とにかく行ってみるか。」

ビルのアスファルトを蹴りあげ、空中に出る。そして…

ユウタ「身体変化能力・エレメント・ブレイブ……！翼を……！」

ユウタの背中に二対の炎のように赤い翼が生えた。翼は羽ばたき、凄まじい速さで銃声が響いた場所まで飛んだ。

そこには、明らかに異形な生物が少女に襲いかかろうと距離を詰めていた。

少女は警察か？制服がそれっぽく、栗色のボブカットだ。

ユウタはそんな少女を見殺しにはしない。黒鋼を握りしめ、居合いの構えを取った。

……「首都圏内・少女side」……

少女「……っ……！」

魔物「ガアアアアアアアアア……！」

くっ………何でこんなに強い奴がいんのよ！見た目は”グール”なのに……

”グール”は人に近い容姿であり強くないってデータなのに…こいつ…強いよ…

グールの爪が私の腹部を狙って向かってくる…ああ…私、死ぬのかな？まだ結婚して間もないのにな…

…最後に…会いたかったなあ…

…………『ユウ』…………

？「鳴神流…………」「黒火聖衝」！！！！」

え…？

グール「ゴガアア！？」

少女「…え？なに？」

と…突然黒い衝撃波がグールを包み込んで向かいの建物に…？

それに…「黒火聖衝」…………？

どこかで…聞いたことが…？

~~~~~

『持ってけ、ユウタ。』

ユウタの父、ユウトは『黒鋼』をユウタに差し出す。

『…っ！…バカ！家宝なんだろ！？受け取れ』受けとれ。これは”鳴神流”…だったか？設立祝いだ。』…親父…わかった！…』

そして、ユウタはユウト、エリカ、カツリ、サキネに背を向けて刀を居合いの構えで持った。

ユウタ『いくよ……鳴神流新奥義！！「黒火聖衝」！！…』

振り上げた刀から黒い衝撃波が出て、空間を切り裂いた。

ユウタ『みんな…行ってきます！！…』

~~~~~

…っ！…夢で出てきた『ユウ』の奥義！！…そうだ、思い出した！！…

私は自然と衝撃波が出てきた方向を見る……もしかしたら……。

私の目には……純白の髪を靡かせ、青のメッシュユが純白にかなりマッチしている髪、少女のような出で立ちで……黒い刀、”黒鋼”を持っている……

少女「……ユ……ウ……？」

ユウタ「ふう……大丈夫ですか？」

私の会いたかった……ユウが……私の弟、御神　ユウタがいた。

……続く

番外編「懐かしき再会 中編」(前書き)

遅くなりやした…!!!!

テストに向けて勉強するため少し不定期になりやす!

こんな駄作見てくれてる皆様、ありがとうございます

鉄槌の騎士さん!!リクエストありがとうございます!

真心こめて書かせていただきます!



番外編「懐かしき再会 中編」

・ ・ ・ ・ 「日本 首都圏内」 ・ ・ ・ ・  
・ ヨウタ side ・

少女「ユ……ウ……？」

ユウタ「……？ケガとかありませんか？」

いやあ危ない危ない。あと少しで女の子……？がケガする所だったぞ……。それにしても、見た目から察するに警察だよな……でも何でこの子から授天力を感じるんだ？今のところ俺と聖騎士たち以外は持つてないはずなんだがな……

それに……”ユウ”？

俺をそう呼ぶのはそんなにいない……

そういえば……この子……どことなく……

俺の姉貴、御神 サキネににてる……

そして俺は、そのサキネに似てる女の子に手を伸ばさず。

ユウタ「ほら、立たないとまたあの化け物が……ねえ……ねえ！貴方の名前は？」うおっ！？」

急に女の子が立ち上がって俺の襟を両手で掴んで来た。やめろや、心臓に悪いぜ？

とりあえず、名乗って欲しいなら名乗ってやるか。

ユウタ「お、落ち着いてください！……はあ……

俺の名前は……御神 ユウタ。”只の”旅人です。」

名乗った途端……女の子は掴みかかった手を緩め、目を見開いてこっちを見ていた。……変なことだったかな？……名乗ってどう変な？と言えないよな？

……と、そんなことを考えている合間に……また変な奴が来た。

見てくれは、まあ……緑の皮膚にふてぶてしいくらいにでっぷりと肥えた腹、鋭い牙に角、手には巨木の棍棒？かなにかを握られている。

化け物「ガアアアアアアアアアア！！！！」

ユウタ「…何でまあ……また変な奴g」オーガ「…グールをまとめるリーダーよ……今までの非じゃない強さを誇るわ……」

いきなり現れた化け物にやけに詳しいな…女の子。だけど、肩で息をしてるってことは相当疲れてんな。

なら、あいつを……即刻斬ればいいんだろ？

俺は女の子を後ろに引き寄せ、下げさせた。女の子にはちょっとこのオーガは重荷だ。

女の子「え……え？ちよつと!？」

女の子は俺を掴んで抵抗してるみたいだが……

オーガ「ガアアアアアアアアア!オア`アアアアア!!!」

あのオーガが…棍棒振り上げて突っ込んできてんだよ!

ユウタ「下がって!!!」

女の子「キヤア!」

俺は女の子を突飛ばし、居合いの構えをとる。オーガとの距離は約40メートル……

30メートル……

俺は鎧に親指をかけ、鞘からいつでも抜ける様にする。

20メートル……

この距離でも既にオーガからの殺気が分かる。俺は目を閉じ、集中する……

10メートル……

5メートル……

そして、

2メートル……



オーガは身体の至るところを切り刻まれ……倒れた。

- 女の子side -

女の子「…すごい………」

さつききちんと名乗ってくれた……ユウが……御神　ユウタが帰って来たんだ……

それに……さつきの居合い抜き……すごいよ……オーガを見てみると……うん、完全に息の根を止められたみたい。

ユウタ「大丈夫ですか？すみません、さつきは突飛ばしたりして……」

ユウが私に駆け寄って心配そうな目で見てくる……さらに優しい目になったなあ……／／／／／

女の子「私は大丈夫よ！ユウ（・・・）が私を……助けてくれたから！」

私は溢れんばかり…いや、再会の嬉しさが溢れた笑顔を向けた。でも…ユウはなんかしかめた顔してる……

ユウ「あの…さっきから”ユウ”って……名乗ってない時から言ってますでした？なぜ……」

ああ、私名乗ってないや やっちゃったぜ

女の子「ああ……まだ名乗ってなかったわね……

私は”御神 サキネ”。……また会えたね。……”ユウ”！！！」

あ、ユウが面食らった顔してる！まだ子供の身体で、女の子みたいな顔だから……  
かわい~~~~~！！！！！！！！

不味いわね…私には夫が……

ユウタ「は……？サキ……ネ……？」

ま、マジか！？おまつ、マジでサキ姉！？」

サキネ「ええ 正真正銘、サキネお姉さんだぞ」

私はユウタに近づいて……優しく抱き締める……

サキネ「……遅くなっただけ……」

お帰りなさい……ユウ。」

ユウは……表情は見えないけど……肩を震わせてる。しかも、すすり泣きの声も……

ユウタ「サキ……姉……」

ただ……い……ま……



ただいま……！サキ姉え……！！」

こうして、私はユウト……御神 ユウタと再会を果たした。

番外編「懐かしき再会 中編」(後書き)

オマケ

抱き締めるとき…

ユウタ「……／／／／／」

サキネ「どしたの？ユウ？」

ユウタ「な…何でも！？(身長的に俺の顔が……胸に！？／／／／／)  
／」

ユウタは悶々悶えました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0956w/>

---

授天力(エネルギー)の戦士が世界を廻る-作るぜ!!最強の"絆"!!-

2012年1月14日06時47分発行